

すくらんぶるLOVERS



神原 涼

はじめに

この物語は2000年10月に書いた。

当時は「ホームページ」を持つ人も少なく、Blogなどこの世に存在しなかった。チャットが盛んな時期で、そこで知り合った小説を書くのが好きという大学生と、「ラフな設定を与え合って、相手から出された設定で物語を書く」ということをした。今のようにBlogはないので、レンタル日記に書いていた。

私を与えられた設定は・・・

“気の強い女の子Aは内気でうじうじしている友だちBに、
無口だがカッコいい優等生Cが好きだと打ち明けられる。
友だちのためにCに近づいて、いろいろと聞き出したり
Bと近づけるために奔走する主人公Aだが、どうも優等生Cの心が
主人公Aに傾いているような...？ さあ、Aはどうする？”

【登場人物】

- ・ 気の強い女の子A = あかり
- ・ 内気でうじうじしている友だちB = マリ
(この二人は“ポケットの中の恋人”とは別人物、適当に名前つけた結果同じになっただけ)
- ・ 無口だがカッコいい優等生C = 中原くん

正直困った。

こんなベタな設定で何が書ける？

ただ、私はこういうことに関して「難問」を突きつけられると燃えるのだ。

設定はラフであり、他は自由という約束になっていたもので、もう一人登場させた。

15年ぶりに読み返してみると、ベッタベタにベタな青春ラブコメで、

読んでいて「ヒャー」と恥ずかしくなるような場面が多々ある。

しかし、これは私がNET上で初めて書いた物語なので、まとめておきたくなった。

ちなみに、これを書いた当時は、ウッチャンナンチャンの「ウントコ」という番組内の、「[未来日記](#)」というのが人気だった頃なので、

それを知らないと「???'」なところが多い。

それと、今のように皆が携帯持っている時代ではなかった・・・ということで。

マリの告白

風が涼しくなってきた学校の中庭。

大きな木の根元に座って、マリと二人でお弁当食べてる...のが、いつもの風景。

「あかりちゃん、次の英訳やってきた？」

「ったりまえじゃ〜ん、英訳の佐藤、うるさいもん、マリ、やってないの？」

「やったんだけど...最後のページがよくわかんなくて...」

「しょうがないなあ、あとで見せたげるよ」

「うん、助かるう」

不思議だよな、私とマリ、ぜんぜん性格違うのに、クラスでいちばん仲がいい。

水と油、赤と白、天使と悪魔...って、誰か言ってたな、アッタマくる！

でも、それくらい違うんだよね。見た目もぜんぜん違うしさあ。

マリは、小さくて、フワフワってカンジで、「男が好きになる女の子」の典型？

私はねえ...身長高くて、直線的つつうか、あ〜あ、いいけどお？

お弁当食べ終わって教室戻って、

マリが私の英訳のノートを写していると、中原くんが私たちのそばに来た。

「山岸（私のことね）今日の学活、文化祭のクラスの出し物についてやるからな」

中原くんはクラス委員長、んで、私は副なんだよね。

「でもさあ、三年の二学期に文化祭ってのはどーでしょね？」

「まあな、でも、けっこう燃えてるヤツもいるぞ」

そう言って中原くんは自分の親友の河合を指差した。

「ああ、あいつねえ」

河合つつうのは、これがまたお調子モンで、バカ丸出してカンジで、

なんでこいつと中原くんが親友なのか謎だよなって、人のこと言えないけどな。

「あいつはそうでしょうよ」

「ハハハ」

中原くんは、女の子たちの中で有名な「中原スマイル」して、河合のそばに行った。

モテるんだよね、けっこう、ていうか、かなり！

学年で成績トップ、この前までバスケのキャプテン、んで、顔もいい！じゃ当たり前だけどね。

ふと、目の前のマリを見ると、顔...真っ赤！

「マリ、どうしたの？熱あるんじゃないの？顔赤いよ？」

「そ、そんなこと...ない...よ」

「具合悪かったら言いなよね、マリは、いつもギリギリまでガマンしてバタンって倒れるんだから」

「だ、大丈夫だってば」

マリは真っ赤な顔のままくちびる尖らせた。

こういう表情って男の子が好きそうな表情だよね。

私にはぜーったい真似できないよ。

だって、マリのくちびるはプクツとして小さくて、

私といたらいつもデッカイ口開けて笑ってばっかで...

んつとに、えらい違うんだから！ホントに不思議、私とマリ！

学活終わって、文化祭の出し物は、

予想どおり河合が大ハリキリで提案した「未来日記体験版」に決定！

ったく、考えることが軽すぎていうか、あんたがやりたいんだろっ!?っていうか、

他のみんなも反対しろよなあっていうか！

みんな、どうでもいいんだよね、そろそろ受験体制に入らなきゃだから、

「やりたいやつがやってくれ」ってカンジ？

まあ、いいけどね。河合にやらせとけ！だよ。

帰りもマリと一緒にバス。私の方が遠いけどね。

「あかりちゃんて...うらやましい...」

「ハ？」

「私...あかりちゃんみたいだったらよかった」

な、なに言ってるの??? しかも突然! どーしちゃったのよおっ??

「こっちこそマリがうらやましいよ! 女の子っぽくてさあ、私なんて逆立ちしたってなれないもん」

「だって...あかりちゃん...誰とでも話せるでしょ？」

「まあ、そりゃそうだけどさあ」

「私なんて...話せない...話したい人とも...話したい人とは...ぜったい...」

「えっ? 話したい人? 誰よ？」

「え...」

マリは真っ赤になってうつむいた。

「誰よ? 言えよお! ねえったら! ほら!」

「だ、誰にも...言わないでくれる？」

「私が誰に言うってのよ!? いいから、早く言えってば!」

「あの...ね...あの...な...中...原...くん...」

「エッ!? 中原くん？」

「あ、あかりちゃん、声大きいよ」

「あ、ご、ごめんごめん」

私はマ리에顔近づけて小さい声で聞いた。

「いつからなのよ？」

「前から...いいなあって...でも、三年になって、運動会的时候に...」

「ああ！あんたが貧血起こして倒れたとき？中原くんが保健室に運んだ、あれ？」

マ리는もっと真っ赤になって、コクンとうなずいた。

「知らなかったよお」

私はなんか頭がボーッとしちゃってるよ。

「あかりちゃんは...中原くんとクラス委員もやって...いっぱい話できて...すごく
うらやましい...私は...ダメだから...」

「なーに言ってんのよ！あんたなんかその気になったら中原くんの一人や二人、
すぐゲットだよ？なんならコクっちゃえば？」

「ダ、ダメ、ぜったい、そんなこと、できない」

「だって、このまんまでいいわけ？」

「え... だって...」

「ぼやぼやしてたら、他の子に取られちゃうよ？あいつ、モテるもん」

「え... ど、どうしよう...」

マ리가涙目になっちゃったよ？マジだ、こりゃ！

あかり、立ち上がる！

そっかあ...

ドテッとベッドに寝転びながら、バスの中のマリとの会話を思い返してた。

マリは中原くんが好き...だったんだ。

知らなかったよ、ずっと一緒にいたのにさ、マリったらひとこともそんなこと言わないんだもん。

まあね、あの内気なマリじゃね、言わないよね。

でも、言ったよね？ さっき。あれって、かなり勇気いったんじゃない？

よっぽど思いが募ってたのかもね。ずっと好きだったって言ってたもんね。

運動会するとき、貧血起こしたマリをサッと抱き上げて保健室に運んでいった中原くん、たしかにかっこよかったもんなあ。そりゃ好きになるよね。

でもさあ、あの内気なマリじゃ、一生言わないよね？

私に打ち明けるだけで、あんなに真っ赤になってたくらいだもん。

このままじゃ絶対、他の子に取られちゃうよ？みんな狙ってんだからさ。

どうすんだ？

「あっ！」

ガバッとベッドから起き上がって、いいこと思いついた！

私が二人の仲を取り持つってのはどう？私ならさ、クラス委員一緒にやってるし、中原くん接近しやすいじゃん？

そうだよお！それで、いろんな情報集めてさ、

なにげ～になにげ～に、マリと中原くんを接近させる！いいねえ！

『Mission Impossible 3』だね！カーッコイイ！って、Impossibleなのか？？

んなことないよ、マリならさ、どんな男子だって好きになるよ。

私だってさあ、マリみたいな可愛い系だったらさあ、不可能ナシなんだけどなあ。

って、今は私のことはどーでもいいんだよ！

おっし！明日から作戦実行だあっ！

「えっ？」

マリが目を見開いてビックリした。いつもの中庭のランチタイム。

「そ、そんなこと...したら...中原くん...私のことキライになったりしないかなあ」

「だから、そこを私がうまくやるんじゃん！」

「う、うまく...いくのかなあ」

「マリ、私のこと信用してないの？」

「そ、そうじゃないけど...私なんか...中原くんと付き合えるなんて...ムリだよ」

「なんでやってもいないうちからあきらめんのよ！」

「だって...」

「いいから、私にまかせろって！ぜーったい悪いようにはしないから！」

「い...いいの？」

「いいにきまってんじゃん！」

「でも...あかりも...中原くんのこと...好きなんじゃないの？」

「ハア？」

「なんか...そうなのかなあって...」

「バーッカじゃない？ だったら、こんなこと考えるわけないでしょ！」

「あ... そっか」

マリがホッとしたように微笑んだ。

まずは... どうする？

5時間目終わりの中休み、ボーッと作戦タイムな私。

いちばん早いのは「中原くん、マリがあんたのこと好きだって」って、
おいおい、それじゃ意味ないつつうの！

「山岸！」

あっ！飛んで火にいる中原くんだあ！

「今日、放課後、文化祭実行委員会あるからな」

「あ、うんうん、わかった」

それだ！それぞれ！実行委員会でうちのクラスからは私と中原くんだけ。

そこで、いろいろと情報収集！おっし！

委員会の最中も、私はチラチラ横にいる中原くんのことばっか見てる。

やっぱたしかに美形だよなあ。マリって面食いだったのね。

そういえば、こんなにジックリ中原くんの顔見たことなんてなかったなあ。

「な、なに？」

中原くんが私の視線に気づいて、戸惑った顔で聞いた。

「ううん、べつに」

中原くんはチラッと私を見ると、また議長席の方に顔を向けた。

フッフッフッ、君はまだ気づいてないね、山本マリはね、君が好きなのよ、なんちって！

なんか、ミヨーに楽しいぞ、こりゃ。

ダルダルの委員会も終わって、さてと、さっさと帰ろう！じゃダメなんだよ！

「中原くん、途中まで一緒に帰ろうよ」

「え？ ああ、いいけど、俺、チャリだぞ」

「あ... ダメだ、私、バスだよお」

「それじゃ、奥野のバス停まで乗せてってやるよ、俺はそこから曲がるからさ」

「えっ、いいの？ラッキー！」

って、私が喜んでどうする？

でもさ、二人っきりになったら、もっといろいろ聞きやすいじゃん？やりい！

チャリ置き場まで二人で歩く。

「山岸ってさ...」

先に中原くんが口を開いた。

「ン？なあに？」

「え、あ、いや、兄弟何人？」

「私？私は一人っ子。なんで？」

って、私が質問されてていいのか!?

「いや、なんか、兄弟大勢の長女ってカンジしたからさ」

「よく言われるんだよねえ、姉御肌とかさあ」

「ハハハ、言えてんな」

「やっぱ、そう？」

「まあな」

「中原くんは何人兄弟なの？」

「俺は妹二人の長男」

マリ、小姑二人だってよ、覚悟しとけよ！

中原くんがチャリを出してきた。おお、シルバーの車体！カッコいいじゃん！

「先生いないよな」

そう言って笑って、私に後ろの荷台に乗るように合図した。

よいっしょ！ってまたがると、スカートが上に上がっちゃうんですけどお？

ま、いっか！ってことで、出発！そして...作戦開始！

夕暮れの町をチャリが走る。

気持ちイー！なんて思ってる暇はないんだよ。

いろいろ聞き出さなきゃね！何から聞く？

肝心なのは、中原くんにかノジョがいるかどうかだよ。

いたらさあ、いくら私が頑張ったってダメじゃん？てか、マリだけだよ。

うんうん、それを聞かなきゃね！おっし！

「中原くーん！」

中原くんの背中越しに大きな声出すと、「ン？」ってカンジで振り向いた。

「中原くんはかノジョいるの？」

「エッ!? あっ！あ、あ、あ、あーっ」

チャリのバランス崩れてキキーッと止まった。中原くんがフーッと息ついた。

「ごめーん、私が話しかけたからだね」

「い、いや」

中原くんが体勢整えて、またペダルをグイッと踏んだ。

「ねえ、どうなの？」

また背中越しに大声出したけど、

「なにが？」

今度は中原くんは前向いたまま答えた。

「だからあ、つきあってる子はいるの？」

「い、いないよ」

「ホント？」

「ああ」

おっし！マリ、やったよ！

「山岸はいるの？」

「なにが？」

「カレシ」

「やったあ、アハハ！いるわけないじゃーん」

「マジ？」

「マジマジ」

哀しい事実だよ、やれやれ...なんて浸ってないで次だよ、次。

「中原くんの好きなタイプってどんな子？」

「エッ!? あ... べ、べつに... タイプとか... ないよ」

う〜ん、イマイチはっきりしないなあ。

「たとえばあ、（マリとかあ...なんて言っちゃダメだよ）可愛い系は？」

「な、なんで、そんなこと聞くんだよ？」

「え？ それは... なんとなくね」

身辺調査なんて言えないよ。

キキーッとチャリが止まって、あ、バス停に着いちゃった。

まだ聞きたいことあったけど、しかたないから「サンキュー」ってチャリから降りた。

「山岸、今日の委員会で、各クラスからそれぞれ4人委員出せって言ってただろ」

「え？ そうだっけ？」

「聞いてなかったのかよ」

中原くんが、しょうがないなあって顔して笑った。

だーってさあ、私は別のことで忙しかったんだもん。

「俺と山岸と、あと二人決めないとき」

「明日また学活で決めるの？」

「いや、誰かやりそうなヤツに声かけてってことでいいんじゃないか？」

「やりそうなヤツなんているかなあ」

「俺は河合にやらせようかと思ってるんだ」

「ああ！あいつならヨダレたらして喜んでやるよ！」

「ハハハ、あと一人、山岸の友だちで誰かいない？」

「う〜ん...誰かねえ...」

三年のこの時期に文化祭実行委員なんてやりたいヤツがいるかねえ...って、あっ！

「いる！」

「マジ？」

「うんうん、いるいる！ マリ！」

「山本？」

「うん！ぜったいやるよ！（てか、やらせるよ!）」

「そうか、それじゃ、山本に話しといてくれよ」

「オッケー！」

バイバイってカンジで手をあげながらチャリで去っていく中原くんの背中を見ながらニヤリ。

フッフッフッフッ...やったーっ！

「わ、私が？」

電話の向こうでマリが驚いた。

「わ、私は...ムリよ、実行委員なんて...そんな...」

「なーに言ってんのよ！チャンスだよ？中原くんのそばにいれるんだよ？

話だってできちゃうしさ、こんなチャンスないじゃーん！」

「で、でも...」

「ダイジョーブ！私がそばにいるんだから！ね？」

「う...うん...」

「それにさ、中原くん、カノジョいないんだって！ だから、超チャンスだよ」

「そ、そんなこと聞いたの？」

「ったりまえじゃん、いちばん肝心なところだもん」

「そ...そう...だけど...」

「あとね、妹が二人の長男だって、小姑二人だから結婚したら苦労するかもだけど、
まあ、今はそこまで考えなくてもいいか！アハハ」

「そ、そんなことまで...？」

「情報はね、多い方がいいでしょ？」

「あかりちゃんて...すごい」

「どういう意味よお？」

「なんか...あの...ありがとう」

「なーに言ってんの！友だちじゃん！」

「なんか...私、ちょっとだけ...希望が持てたかなって...」

マリの声がちょっと明るくなった。

「まかせなさいー！ ぜーったいうまくいくようにしちゃうから！」

「あかりちゃん、ほんと、ありがとう」

「いいからいいから、それじゃ、明日から実行委員がんばろうね！」

「うん」

よかったあ！マリも希望が持てたって言ってるし！

こんなにうまく事が運ぶとは私も思わなかったよ。やっぱ行動あるのみ！だね。

なんて、恋のキューピッドやってるヒマがあったら自分のカレシ探せってカンジだよな。

あ～あ、私なんてさあ、なーんにもないよ。

ま、いっか！マリのが終わってからだ！...って、即、私にもカレシができるとは限らないんだよなあ。

あー、ヤメヤメ！今はマリと中原くんをくつつける使命に燃えるのよ、あかり！

次の日の放課後の教室、中原くん、河合、マリ、そして私。

3年2組文化祭実行委員の顔合わせってやつ。

マリったら私にピタッとくっついて、ずっと下向いてばっか。

中原くんはいつもの冷静な中原くんで、おいおい、河合一人で大はしゃぎだよ。

「いいねいいねえ、2対2じゃんよ、このまま未来日記できんじゃねーの？」

バーカ、私はあんたとやる気ないっつうの！

「具体的な企画は俺たちで考えるとして、会場設置のメンバーも決めないとな」

中原くんがいてくれて助かるよお。ちゃーんと議事進行してくれるもんね。

「日記の内容はどうする？」

「俺やる！俺！」

河合が小学生みたいにハイハイって手をあげて言った。

「まかせちくりよ、スッゲーの作るからさ」

こいつが作る未来日記... 未来なさそう。

「いちおうクラスみんなにも案を出してもらった方がいいんじゃないか？」

中原くん、そのとーり！

「賛成！（河合にまかせらんないから！）やっぱりクラスの出し物なんだから、みんなにもやってもらわないとね」

「でもさ、俺たちで原案っつうの？そういうの作っておいた方がいくねえ？」

河合っ、どーしてもやりたいわけねっ！

「それじゃ、俺たち4人それぞれで作ってみようか？」

「エッ？」「え...？」マリと私、同時に声あげた。

「いろんなパターンの原案があった方がみんなも作りやすいだろ？」

「ま、まあね」

私も作るのかあ？

「いいねいいねえ、キマリ！」河合っ、あんたはいいかもしんないけどさっ！

マリが困った顔して私を見てる。

「え...っと、マリと私は二人で作るよ」

「なんでだよお、いろんなパターンがあった方がいいって中原言ってんじゃん」

河合っ、うっさい！

「それにさあ、マリちゃんとあかりじゃ性格ぜんぜんちがうんだからさ、

バラバラに作った方がゼッテーおもしろいって！」

な、なににいっ!? “マリちゃんとあかり”にいっ!?

なーんで、あんたに親しげに名前と呼ばれなきゃなんないのよっ!?

しかも、なんで、マリはマリちゃん、私は呼び捨てなんだよっ!?

「そうだな、山岸と山本もそれぞれで作ってきてよ」
マリは戸惑った顔しながらコクンとうなずいた。
「あいよ」私はブスーッしてうなずいた。
「アハハ！あいよだってよ！あかりっておもしれーっ！」
だーかーらーっ！呼び捨てにすんなあああああっ！

第一回3年2組文化祭実行委員会終了！

金曜日の昼休み、マリと中庭でお弁当食べてると、河合がそばに寄ってきた。

「へえ、おまえたち、こんなところで食ってたんだ」
悪い？ギロツと睨んでもヘーキな顔して私たちのそばにしゃがみ込んだ。
「なあ、明日とかさ、誰かん家に集まんねえ？」
「ハア？」
「なんつうの、実行委員会としてさ」
「そんなの学校だけでいいじゃん」
「いや、だからさ、なんつうの？親睦を深めるつつうかさ」
あんたと親睦なんか深めたくないつつうの！
え？親睦？あっ...いいかも！
「それって、中原くんもだよな？」
「ったりめえじゃん、4人でさ、どうよ？」
マリの顔をチラッと見ると、戸惑った顔して私を見た。チャンスだよ、マリ！
「いいけどさあ、誰の家？」
「ちょっと待ってろよ」
河合はポケットから携帯出してどこかにかけて。
「あ、俺、俺、あのさ、ちょっと中庭来いよ」
ピッ。そして、ニヤッ。
「今、中原も来るからさ」
私の横のマリの身体がキュッと硬くなるのがわかった。

中原くんが息を切らして中庭に走ってきた。
「なんだよ？なんでみんな集まっているの？」
そう言って河合の横にしゃがみ込んだ。
「今さ、明日、誰かん家でみんなで集まろうって話になってさ、な？」
って、私に同意求めるなよ！

「なんつうの、実行委員会親睦会ってやつ？やろうぜ」

中原くんは私とマリの顔をチラッと見た。

「二人はいいの？」

「いいよ、ね？マリ」

マリは困ったような顔して私を見てから、コクンとうなずいた。

「それじゃ俺もいいよ、どうせなら、そのとき未来日記の原案もやっちゃおうか」

「なんだよなあ、んなことすんのかよお」

河合、あんた、実行委員会って言ってたじゃん！

「いいけどよお、んで、誰ん家にする？あかりんどこにすっか？」

「な、なんでウチなのよっ!？」

ってか、呼び捨てやめろっうのっ！

「俺の家でもいいよ、明日は両親とも出かけるって言ってたしさ」

おお、中原くんの家に！急接近じゃーん！やったね、マリ！

「あ、でも、午後からでもいいかな、午前中は予備校の模擬試験なんだ」

さっすが中原くん！学年トップの座はそうやって築いているのね！

「2時くらいには終わるからさ、そうだな、3時でいい？」

って、ことで、なんと中原くんの家に行くことになったよ！

これでまた一步中原くんに近づいたね！

たまにはいいことするじゃん、河合！

「あ、そうだ、あかりとマリちゃんの携帯番号教えろよ」

「ないよ」

「ハ？ マジ？ ねえの？」

悪いっ？

「私もマリも携帯持ってないもん」

「親がダメっつうのか？」

「そうじゃないけど、べつに使うことないもん」

「なんだよなあ、携帯あったら4人で連絡取り合えんのによお、なあ、中原」

「しょうがないだろ」

中原くんはチラッと河合を見て苦笑した。

「いちおう俺の番号教えておくから、何かのときはここに電話して」

中原くんはポケットから生徒手帳を出して、番号を書くと一枚破って私に渡した。

おお！中原くんの携帯番号ゲート！

やったね、マリ！

「あ、待った待った！俺のも！」

河合が私からメモを取り上げて自分の番号を書きやがった！

あんたのはいらないんだよ！ あとで捨てる。

中原さんと河合が校舎に入って行って、私とマリは、思わず顔見合わせた。

「マリ！ やったよ！ 中原さんの携帯番号ゲットだよ！」

「で...でも...かけることなんて...」

「そんなこと今考えなくていいよ、すごいと思わない？」

携帯番号に、明日は中原さんの家に行っちゃうんだよ？急接近じゃーん」

「な...なんか...信じられない...」

マリがボーッとした顔で私を見た。

「あっ！ねえねえ、携帯買わない？」

「え？」

「明日、中原さんの家に行く前に買おうよ」

「で、でも...」

「マリの家は携帯ダメって？」

「そ、そんなことはないけど...」

「だったら、買おうよ、それで中原さんに番号教えるの、ね？」

「う...うん」

「おっし！キマリ！」

いいじゃんいいじゃん、どんどん計画どおりに進んでくよ、てか、計画以上？

マリと中原さんがつき合う日は近い！

土曜日の朝、マリと待ち合わせして携帯ショップへ。

すごーい！いっぱいあるんだあ！どれがいいかなあ。

「あかりちゃん、携帯だとメールできるんだね」

「うん、みんなやってるよね」

「私とあかりちゃんもメールできるよね」

マリが嬉しそうに言うけどさ、

「私とじゃなくて、中原さんとやらなきやダメじゃーん」

「え...そ...そんなこと...」

マリが真っ赤になってうつむいた。

「ったくさあ、なんのために携帯買いに来てんのよお、そのためだよ！ いい？」

「う...うん...」

それじゃ私はなんのために携帯買うの??

ま、いっか、マリだけ買ったら見え見えだもんね。それに...私も携帯欲しいもん。

どれにしようかなあ... パッと目に入ったのは、ピンクの携帯。可愛い!

これにしよう! ぜったいこれ!

「あ... 可愛い、私、それにしようかなあ」

マリがピンクの携帯に手を伸ばした。

あ... マリも、これ?ってか... そうだよ、

ピンクはマリに似合うよね、私には似合わないよ...ね。

「いいんじゃない?ピッタリだよ」

「あかりちゃんはどれにする?」

「私...は、えっと... あ、これにしとく」

ピンクのと色違いの白。ま、こんなところか。

「おそろいだね」

嬉しそうに笑うマリ。だよ、だって、マリがメインなんだからさ。

登録完了まで時間があるから、近くのカフェでティータイム。

「ウフフ」

マリがアイス・ティー飲みながら嬉しそうに笑った。

「なに、どうしたのよ?」

「だって...なんか嘘みたい、携帯買っちゃって、それに...

こんなに早く中原くんのそばにいれるようになったら、信じられないくらい」

「だから私にまかせなさいって言ったでしょ?」

「うん、ほんと、ありがとう」

「お礼を言うのはまだ早いよ、カンペキ中原くんをゲットするまで作戦は続く!」

「あかりちゃんて、すごーい、あかりちゃんが友だちでよかったあ」

「でしょでしょ?」

マリが喜んでくれてよかった!

なのに...なんだろう...なんか...さ。

「ねえ、あかりちゃん、ストラップ欲しくない?」

「あ、そうだよね、携帯つつたらストラップだよ」

「二人おそろいのにしない？」

「うん！って、私とオソロじゃダメじゃん、中原さんとオソロにしなきゃ」

「そ...そんな...」

「まあ、今すぐってわけじゃないけどさ、つき合うようになったらね」

「う、うん」

マリはポッと赤くなってうなずいた。頬がピンクに染まって可愛いよね。

こういうのに男の子は弱いんだよね、私が赤くなったって...ねえ。

「あかりちゃん、ストラップ...どうする？」

「いちおう買っとくか！ 飯のってことでき！」

私のは永久保存版だけだね。

マリは白くてキラキラ光る細いビーズのストラップ。

ピンクの携帯にピッタリですっごい可愛い！

「マリ」ってカンジだよ。

私は「LOVE」って金の文字が入ってる真っ赤な皮のストラップ。

「あかりちゃんらしい」ってマリ。やっぱ私のイメージって、こういうハッキリした色なのかなあ。

ま、いっか！

ってことで、携帯引っさげて、中原くんの家に行くぞー！

中原くんの家

白いシンプルな家の前、『中原』って表札、ここね。

ドアホン押すと、「はい」って中原くんの声がして、
途端に私の横のマリがピンと緊張したのがわかった。

「山岸と山本で一す」

「今開ける」

すぐにドアがガチャッと開いて、中原くんが顔を出した。

「よう」

ジーンズに青っぽいチェックのシャツ、私服の中原くんて初めて見る。

かっこいいじゃん？

チラッと横目でマリを見ると、ポッと頬染めて上目遣いで中原くんを見てる。

マリも『かっこいい』って思ってるんだなあ...って、あたりまえだけど。

「入れよ」

「おじゃましまーす」

中原くんからはどう見えるんだろう...私服の私たち...っていうか、マリだけど。

中原くんの後ろをついて二階に上がって、ここが中原くんの部屋ね。

ブルーのカーテンにブルーのベッドカバー。本棚には本がいっぱい。

なかなかきれいにしてるじゃん？てか、男の子の部屋って始めて入るよ。

「遅っせーじゃん」

河合、なんだ、あんたいたの？

あ～あ、ヨレッとしたTシャツにご汚いジーンズ...ある意味、似合ってるけどさ。

「あれ？その袋なんだよ？駅前の携帯ショップンじゃん」

河合がめざとく私とマリの携帯が入ってる紙袋を見つけた。

「買ったんだもん」

「マジ!? 見せてよ」

おいおいおいおいおい！人の袋の中に手え突っ込むなよっ！

「あっ、これ、俺たちと同じ機種じゃん」

河合が箱を（勝手に！）出して中原くん到手渡した。

「ほんとだ、ほら、これだろ？」

中原くんが机の上の自分のシルバーの携帯を見せた。

「あ、そうそう！その色違い！」

やったね、マリ！中原くんとオソロだよ！

「どれどれ？見せろよ」

河合、うっさいなあ、見せるけどさあ！

マリと私、カバンの中からストラップ付き携帯を出してみせた。

「マリちゃん、カッコイイ！すっげー合ってるじゃーん」

河合がとろけそうな声で言った。そうでしょうよ、どーせ私には似合わないよっ！

「なんだよなあ、あかりのって俺とおんなし色じゃんよ」

「ヘッ??」

「ほら、な？」

河合がジーンズのポケットから白い携帯を取り出して見せた。

ゲーーーーーッ！河合とオソロかよおおおっ！

「もう設定したの？」

中原くんが私の携帯を手にとって聞いた。

「ううん、まだ。説明書見たんだけど、どれからやっていいんだかわかんなくて」

「やってやろうか？」

「いいの？」

中原くんは『中原』スマイルしてピピピッ。ラッキー！

「んじゃ、マリちゃんのは俺がやってやるよ」

河合がマリの手から携帯取り上げてピピピッ...って、これ、ちがうだろ!?

マリのを中原くんにもやってもらわないとだよ。私のやらせてどーする!?

でも...今さら「中原くんはマリのをやって」なんて言えないし...

「俺の番号、登録しておいていい？」

中原くんが顔をあげて聞いた。

「うん」

マリは...どんな顔してるんだろう...ごめんね、マリ。

プルルッて、机の上の中原くんの携帯が鳴った。

「山岸の番号、俺のに入れたから」

「あ、うん、あの、中原くんの番号、マリのにも入れてくれる？」

「うん」

ピピピッ。プルル。マリの携帯が鳴った。

「河合、今の俺の番号、登録しといてくれよ」

「オッケーオッケー！」

なんか、ちょっとホッとした。

だって...なんかマリに悪いてカンジでさ。

「んじゃ、俺のも入れとくかな」
河合、あんたのはいらないうつうの！
中原くんと河合は私とマリの携帯に交互に番号入れて登録してた。
「できたよ」
中原くんが私に携帯渡して、
「マリちゃん、これでカンペキっすよ」
河合がマりに携帯返した。
私の携帯...中原くんが触った携帯...ごめんね...マリ。

携帯騒動(?)も終わって、やっと本題の「未来日記」の打ち合わせ。

「俺、考えたんだけどさあ、なんつうの？未来日記って、男用と女用があんじゃん？
だからさあ、俺たちも男と女二人一組で作った方がいいんじゃない？」
「え？」
「だってさ、ほら、なんつうの、男が女にしてほしいことは男が書いてさ、
女が男にしてほしいことは女が書くつうの？その方がグッとくんだろ？」
「俺は...いいけど」
中原くんが私とマリの顔を見た。
そっか...ここで、マリと中原くんが組めば、もうこりゃイタダキ！じゃん。
「私もいいよ」
「おっし！マリちゃんは？」
マリが戸惑った顔で私を見たから、目で「まかしとき！」って合図したら
(って、伝わったかどうか知らないけど)コクンてうなずいた。
「組み分けはどうする？くじ引きかなんか？」
「くじは(マズイよ!)どうかなあ、あ、ほら、私と中原くんは前から委員会に
いるから、経験者と初めての人で組んだ方がよくない？」
私が河合の犠牲になるからさ、やれやれ。
「つうかさ、中原とあかりは、これからも二人で委員会出なきゃなんねえじゃん？
だから、中原とあかりと一緒に組んだ方が便利つうかさ。
んで、俺とマリちゃんが組むって、その方がいくねえ？」
「エッ!？」

それはダメだよ————っ！

「そうだな、山岸には委員会の連絡とかいろいろあるし。それでいい？」

「え、あ、そ、それは...」

マリの方をチラチラ見ると、マリは私に小さくうなずいて見せた。

「わ...私は...それで...いいよ...」

エー——ッ!?!いいのおおっ?? 河合と組んだって意味ないじゃ——ん!

「おっし!キマリ!」

どーすんのよおお、私の計画はどうなるのよおお。

「んじゃ、俺はマリちゃんのとなりー!」

河合がニッコニコして私とマリの間にグイッと入ってきた。

「おまえ、中原んどこにいけよ」

えっらそうに、なにさ!ったく、あんたのせいで私の計画がグチャグチャだよ!

プリプリしながら中原くんのとなりに座った。

「山岸、俺と組むのイヤだった?」

中原くんが不安そうな顔して言った。

「エッ?あ、や、ち、ちがうの、マリがはじめてだから、大丈夫かなって」

「ほんとに仲いいんだなあ」

「あ、うん」

そうだ!ここでマリをアピールしとかなきゃ!

「だってね、マリって、すごくいい子なんだよ、内気だけど、可愛いし、
マリみたいな子をカノジョにしたら、ぜったいいいってカンジ?」

中原くんは『中原スマイル』しながら私を見ている。

なんか...ドキッとして、

なんか...黙っちゃった...よ。

「出会いの場所はどこがいい?」

「えっ、な、な、なにが?」

「未来日記だよ」

「あ... ああ、うん、そうねえ... あっ、中庭の大きな木の前は?」

「ああ、いいかもな」

「うん、あそこ、好きなんだ」

って私の好み言ってどーする!?

「そうなんだ」

中原くんが微笑んだ。またドキッとして...

「あ、そ、そうだ、マリたちはどこにするのかな?ダブッたらまずいよね」

「そうだな、河合、おまえたちは出会いの場所はどこにした?」

マリにピタッとくっついたまま河合が顔あげた。(離れろよっ!)

「フッフッフ、俺たちは理科室の人体模型の前！」

ハァ〜!?

「どうよ？インパクトあんだろ？」

あ〜あ〜あ、お化け屋敷じゃないんだからさあ！いいけどお？

マリが私の顔見て、困ったような呆れたような複雑な顔して笑った。

マリ、んつとにゴメン！

『彼と彼女は中庭の大きな木の前で出会った』

それから... どうする？ ゼーんぜん浮かばない。

だって、河合がマリにベッタリくっついててさ、ったく、ジャマだよお！

あっ！肩に手を置くなつづのっ！

「山岸？」

中原くんが私の顔を覗き込んだ。

「え？あ、な、なあに？」

「どうしたの？」

「え、あ、う、ううん」

思わずチロツと横目でマリたちを見ると、中原くんがそっちを見ちゃったあっ！

「あ、ちょ、あの、な、中原くん、次、どうする？」

「ン？そうだなあ」

ま、まさか、誤解したりしてないよね？

中原くん、マリが好きなのは中原くんだからね！

「山岸は... この後、彼にどういうことしてほしい？」

「え？ 私？ そう...ねえ...」

中庭の大きな木の前で会って...そして...

「いろんなこと...聞きたいかなあ、趣味とか、好きな色とか、なんか」

「いいね、それじゃ、質問項目考えといてくれよ」

「うん、あ、それでさ、何問以上自分と合うとかそういうので次に行くコースがちがうっていうのは？」

「そうだな、それにしよう」

「中原くんは... 彼女にどんなことしてほしい？」

もしも...マリと...付き合うとしたら...

「そうだなあ... メールが... ほしい」

「え？ メール？」

「あ、はじめからじゃダメだよな」

中原くんはそう言って頭を掻いて笑った。

そうか...メールがほしいのか...！ マリ、いいこと聞いたよ！

「だったらさあ、彼が何かやって、それでクリアしたら、メールをもらえるとかな」

「うん、そうしよう」

「あっ、でも、まだ最終的に結ばれるかどうかわかんないのに番号おしえちゃマズイよね？」

「非通知にすればいいんだよ、メールに名前書いておけばわかるだろ」

「なーるほどね！アッタマいい！」

中原くんは照れくさそうに微笑んだ。

「どんなメールがいい？」

「それは... やっぱり... 好き...だろ」

中原くんがそう言った私を見た。

ドッキーン...！って、バ、バカじゃない？

なに、私がドキドキしてんのよ!?

「は、はじめから、好きっていうのは、ムリじゃない？」

「そ、そうだよな、ハハハ」

中原くんが真っ赤な顔になって笑った。

なんか、この、未来日記作るのって、なんか、ドキドキするよ、ヘンなの...！

初メール

気がついたら、もう6時！ってことで、私とマリは帰ることにした。

「送っていくよ、チャリだけど」

中原くんがそう言って微笑んだ。

「え？いいよ、私たち、バスで帰るから」

「おっ、いいねえ！送ってくべ！」

河合っ、なんで、あんたが出てくんのよっ!?

「中原、おまえ、あかり乗っけろよ、俺はマリちゃ〜ん」

そう言ってマリの肩を抱くんじゃないっての！

マリが泣きそうな顔して私を見てるじゃーん！どうしよう...

「えっと、そ、それじゃ、メンバー・チェンジしない？」

今度は中原くんとマリ、私と...河合...くんで」

「どうして？」

中原くんが不思議そうな顔して聞いた。

そりゃそうだ...わけわかんないだろうね。

「てか、俺はマリちゃん家の近くなんだぜ？」

なんでわざわざあかり乗っけて遠回りしなきゃなんねえわけ？」

だったら、あんたに送ってもらわなくていいよっ！

「マリちゃん、いこいこ！」

河合がマリの手引っ張って行っちゃったよお！

マリ、ごめん！ホントーーーに、ごめーーーん！

中原くんの家の玄関前、自転車が2台、ピカピカのシルバーの車体と、

河合の、なんだあれ？ すっげーボロ！

あれにマリを乗せる気いいい？？

「マリちゃ〜ん、遠慮しないで乗ってちょ！」

遠慮じゃなくて、イヤなんだってば！

なのに、けなげなマリ、後ろの荷台に、あ... 横座り... ああやって乗るのね？

私、この前またいじゃってたよお！

「山岸もいいよ、乗って」

自転車にまたがった中原くんが呼んだ。

「う、うん」

マリを真似て、横座り、って、なんか、グラグラして...

「俺の身体に腕回してくれる？」

「え？」

「あの、安定性が...悪いから」

「あ、うん」

チラッとマリの方を見て...

「マリちゃん、俺の腰にグッとつかまってるよ」

マリもチラッと私を見て...

「う...うん...」

「んじゃ、中原、あかり、またなあ！」

河合がグイッとペダル踏んで、マリを乗せた自転車が遠ざかっていく。

なんか...すごく...悪いカンジ...

「それじゃ、行くよ」

「う、うん」

中原くんがグイッとペダル踏んで、自転車が走り出した。

夕暮れの街を風を切って走る。気持ちいい！

腕に中原くんの体温が伝わってきて、なんか...ドキドキするよ...ヘンなの...

信号が赤になって自転車が止まる。

「山岸ってさ」

中原くんが前を向いたままで話しかけてきた。

「河合のことが... 好きなの？」

「ハアアアアアアア????」

「なんか河合のこと、けっこう気にしてるだろ」

「なに言ってるんのおおおお?? ぜーんぜん違うよおおおっ！」

「マジ？」

「ったりまえじゃーん！やめてよおおおお！」

「ちがうの？」

「ちがうよおお！河合が、くん、が、マリにベタベタするからさあ！

中、あ、あの、マ、マリって内気だから心配で、それだけだよお」

「なんだ、そうか」

「そうだよお」

やめてよねっ！

私だって選ぶ権利あるっつうの！っていうか...

なんか、私、すごいムキになってる、なんで？

信号が青になった。中原くんがグイッとペダルを踏むと、グラツとして、思わずギュッとしがみついちゃった。

ほっぺたが中原くんの背中にくっついて、なんか、熱い。

ほんとは...ここに座るのは...マリのはずなのに...なのに...私....

家に到着。ホッ...としたような、ちょっと淋しいような...って、何考えてんの？

「山岸ん家ってマンションなんだ」

中原くんが長細いビルを見上げて言った。

「うん、ここの202号室」

「今度... 来てもいい？」

「え？ あ、うん、いいよ、そうだね、いつも中原くんの家じゃ悪いもんね、今度集まるときはウチでもいいよ」

中原くんはチラッと私を見てフツて笑った。な、なに??

「それじゃ、またな」

「うん、バイバイ」

中原くんが手をあげて、夕闇の中を帰っていった。

私は、見えなくなるまで、ずっと中原くんの背中を見ていた。

ごはん食べて、お風呂に入って、今はドテツとベッドの上。

な~にしょっかなあ、予習でもするう？まっさかあ！って、

そろそろ受験のことやらないとなんだよなあ...と、思いつつ、

ベッドに寝転がったまま、机の上の充電器に置いた携帯をポーッと見ていた。

買っちゃったよ。私は関係ないんだけどさ。

マリと中原くんが携帯でつながればいってだけなんだけどさ。

ピポッ

え？ なに？ 急いで携帯を手にとると、メールのマーク。誰だろ？

マリ？ ピッと画面を変えると、

『好き 祐樹』

エッ？ 誰？ 祐樹？ エッ!? た、たしか...中原...祐樹...じゃなかった？

エーーーーーッ!? ドキドキドキドキドクンドクンドクンドクン

ピポッ

エッ？ま、また？ 震える指で、ピッ。

『こんなカンジでどうですか？ 中原』

ハ？ これって... ああ... なんだ... 未来日記の... なんだ... ハハ...

私... バカみたい。

ほんと、バカみたい、何ドキドキしてんのよ!?

えーっと、返事打たなきゃだよね。ピッピッ...ピッピッ...

『OKで一す! (^)v』

あ、でも、やっぱ、『好き』っていうのは最後の方がいいよね。

私みたいにとんだ誤解するかもだし（って、私だけ??）ピッピッピッ...

『でも、これは最後の告白タイムの方がいいかも? (^)』

ピッ。送信!

ピポッ

『だよな』

なんか... メールっておもしろーい! 離れてるのに会話してるみたいだよお。

えーっと、次はなんて打とうかなあ? あっ! そうだ! いろいろな質問?

未来日記で彼女が彼に質問するってやつ、あれやろう!

だってさ、ほら、中原くんのこといろいろ知りたいじゃん? マリのために...ね。

『中原くんの誕生日・血液型・身長・体重は？』

（これは未来日記の「彼女からの質問だよん♪）』

ピッ

ピポッ

『7月18日 A型 178cm・57?』

おお！A型なのかあ！マリと一緒にじゃーん！他に...えーっと...好きな食べ物？
そんなの聞いてどうすんのよ、つまんない、んーっと...

『好きな女の子のタイプは？（ない...じゃダメ！回答せよ！）』

『明るい子...かな』

明るい...か。マリは...内気だけど、根暗じゃないから、合格圏内だよな？...って、
考えてる心のどこかで...明るいって、私のこと？なんてうっすら思ってる...なに？

『今、好きな（または気になる）子はいますか？』

『YES』

エッ!? い、いるのおおっ?? だ、だれ??

『だれ?（ぜったい答えること!）』

ピポッ

き、来た...! な、なんか、手が震えてきたよ...ピッ。え?

『これはなかなかいいと思うよ。』

俺たちの未来日記はメール専門でやってもいいかもしれないな。どう?』

あ... そっか... 「未来日記」か... マジじゃなかったのね... なあんだあ。

ホッとしたみたいなの、力抜けちゃったみいな、がっかりっていうか...。

だってさ、だって、マリ以外の子なんか好きだったら困るじゃん?

だからだよ。

『OKで一す！(^ ^)v』

『それじゃ、またな！オヤスミ☆』

『オヤスミ！』

初メール、中原くん...でした！って、私と中原くんがやってど一すんの!?

マリとだよ。

マリと中原くんが近づくために携帯買ったんじゃん。

私はただのオマケじゃん。

なのに... なんだろう...

な～んか胸のあたりがモヤモヤして...

わけわかんない....。

Wデート...かあっ!?

日曜日の朝、パジャマのままでボーッとリビングにいたら、
「あんだ、何かやることないの？休みの日だってのにボーッとしてえ！」
って、お母さんに言われた。

「いいじゃーん、休みの日なんだからさあ」
なんて、なんかのCMみたいだな？

プルルプルル...

え？ あっ！ 私の部屋からだ！

バタバタッと部屋に駆け込んで、携帯取ると「河合靖男」？って、河合？

ピッ

「あ、俺、俺、河合」

「なによ？」

「アハハ、おまえ、ショッパナから、なによ？はねえだろ」

「だから、なんなのよ？」

「あのさあ、おまえ、ヒマ？」

なっ そっ ヒ、ヒマって、おまえヒマ？ってっ！

ヒ、ヒマだけど、あんだとしゃべってるほどヒマじゃないつつうのっ！

「映画行かねえ？」

「ハアアアア??？」

な———んで、あんだと映画なんか行かなきゃなんないわけええええっ!?

「今、中原と一緒になんだけどさ、映画行くべってことになってさ、んで、
どうせなら、おまえとマリちゃん誘うかなあっと、まあ、そういうわけよ」

お... おおお！ 中原くんと？

これは... いいじゃ———ん！

「ン...いいけど、マリに聞いてみないとね」

ちょっともったいぶらないとね！

「んじゃ、俺、電話するわ」

「エッ！（あんたはダメ！）私がする！」

って、ことで、急いでマ리에電話。

「え...映画？」

「チャンスだよお、チャンス！デートってカンジじゃーん」

「デ、デートって... だって、みんなで行くんでしょ？」

「ダイジョーブ！ ジャマな河合は私にまっかせなさい！（イヤだけど）

マ리는中原さんとツーショットって、いいじゃん、いいじゃん」

「え...や...やだあ...あかりちゃんもそばにいてよお」

「ったくう！しょうがないなあ、だったら、いるけどさあ」

「うん... それなら...いいよ」

「おっし！キマリ！」

超スピードで顔洗って着替えて、家を飛び出した。

待ち合わせの映画館の前、中原さんと河合はもう来てた。

「ここだけ、まだ未来日記映画版やってたっつうわけでさ」

なーるほどね、わざわざ映画館に来て見るほどのものかねえ、いいけどお？

中に入ると、河合が私とマ리의間にグイッと入ってきた。

「マリちゃん、飲み物買ってくるけどさあ、何飲む？」

マリだけかーいっ!?てか、あんたがマ리의買っちゃダメなのっ！

「私とマリが買ってくる！」

グイッと河合のヨレヨレのシャツ引っ張ってどかして、マ리의腕つかんだ。

「マリ、中原さんに、何飲みたいか聞いといでよ」

マ리의背中を中原くんの方にトンって押して...

クルッと河合の方を振り向いて、

「んで？ あんた、何飲みたいわけ？（聞きたくないけどさ）」

「え、あ、な、なんでもいいっす」

「あーっそ！」

ツン！ってカンジで自販機のところに行くと、マリがいた。

「中原くん、何飲みたいって？」

「アクエリアス...だって」

マリがちょっと頬をピンクに染めて答えた。

マリは中原くんのアクエリアスと自分のジュースを買って、私は...コーラ！
んで...

河合は...なんでもいいつつたよね！

おしるこ！ ガシャン！

どこにいるのかな？って、見ると、エッ!? 中原くんと河合が通路隔てて右と左。
こりゃ完璧ツーショットになれるじゃん！って、私は河合とかよ、しかたないけどさ。

「マリちゃん、こっちおいでよお！」

河合がニッコニコしてマリを呼んだ。

「え...あ...う...うん」

って、行こうとしたマリの腕つかんで、

「バッカじゃない!? 河合の横にいてどーすんのよ!？」

「だ...だって...呼ぶから」

「無視！ ほら、飲み物持っていったついでに座っちゃえ！」

マリをグイッと中原くんの方にやって、私はドカツと河合の横に座った。

「ほら！」

河合の顔の前におしるこの缶突きつけた。

「お、おしるこおおお??」

「なんでもいいって言ったでしょ！」

「あ、は、はい、言いました」

河合はおとなしくて受け取って、それから、肩を震わせて... な、泣いてんの??

「ククッ...ククッ...ブアッハハハ、信じらんねえ！」

「な、なによ!?(笑ってたのね!)」

「なんでもいいつつたってさ、フツー、おしるこ買ってこねえだろ？」

「なんでもいいってことは、なんでいいってことでしょ！」

「そうだけどもさ、アハハ！おまえって、んっとおもしれえな！」

あんたはおもしろくても、私はぜーんぜんおもしろくないっ！

チラッと横目でマリと中原くんの方を見ると、二人で楽しそうにしゃべってる。
おお、いいカンジじゃん。いいよね、うん、いいよ...でも...なんか... いいけど。

ブザーが鳴って照明が暗くなった。画面で予告編オンパレードやってる間、
私はずっとマリと中原くんの方を見てた。

だって、マリがちゃんとやってるかどうか心配なんだもん...

それだけ？ それだけに決まってるじゃん...そうだよ...

なのに... なんだろう... この...モヤモヤしたカンジ...

未来日記映画版、本物の高校生三人が織りなす恋のストーリー。

スクリーンの中で、都会の男の子と女の子、そして島の男の子が渡された日記どおりに動いてる。

都会の女の子、可愛い系、男の子が好きになりそうってカンジ？

都会の男の子もまあまあかなあ、ちょっとナヨツとしてるけどね。

んで、島の男の子、顔デカ！

ほった赤いよ？いいやつだけど...ってカンジだよな。

なんかもうショッパナで結末が決まりってカンジじゃーん。

「ちょっと飲ませてよ」

「え？」

河合の手がニュッと伸びて、私のコーラを...勝手に飲むなよおおおっ！

「サンキュ」

「私の勝手に飲まないでよっ！」

「だってよ、おしるこのノドにひっからまっちゃまって辛れえんだって」
だろうね。

「スッゲー甘めえしさあ、飲んでみい」

河合がグイッとおしるこの缶を私に突きつけた。

「いらない！」

フン！って顔そむけて、

「これもいらない！」

コーラの缶を河合に押しつけた。

「おっ、サンキュ！」

あんたの口つけたのなんか飲みたくないだけよっ！
まったくさ！こいつと一緒に映画観てるなんてサイテーだよ！

チラッとマリたちの方を見ると、中原くんがマリに何か言って、
マリがコクンとうなずいてる。

ふ～ん、なんか...いいカンジじゃん...。
なんか...フウ～ッなんてため息が出て、またスクリーンに目を戻した。

島の男の子だけに日記が渡された。

『島の彼は恋のサポート役である。つまり、恋をしてはいけない』

え？ 恋のサポート役... 恋をしてはいけない... 恋をしては...
なんだか... 胸がギュッとなって... 私のことじゃ...ないのに...

島の男の子は、もう好きになっていた女の子に恋を告白することができない。
女の子を都会の男の子とキスするための場所にリヤカーに乗せて連れていく。
自分の好きな子が他の男の子とキスするのを知ってる...なんて、辛いよ...ね。
自分はぜったい好きな子と結ばれないってわかってるのって...辛いよ...ね。
途中で可愛い花が咲いていて、女の子が「きれい」って言うと、
島の男の子は藪に手を入れて花を一輪取って、なんともないように渡した。
なんともないように...自分はなんとも思っていないように...だけど、本当は、
女の子が「きれい」と言った花をあげて、それで自分の気持ちを伝えようとする
せいっぱいの...恋をしてはいけないから...好きと言ってはいけないから...

涙が...勝手に...だって...悲しくて...こんなの悲しすぎて...
好きなのに...好きって言えないなんて...
恋のサポート役だから... 恋をしてはいけない...なんて...

やだ...涙が...止まらなくなっちゃった...
や、やだな、河合に見られたら、絶対こいつにだけは見られたくないよ。
ど、どうしよう、ティッシュ、鼻まで出てきちゃったよ...

「ズビッ」

え？ 鼻をすする音、私じゃないよ？ 横を見ると、

「グズッ、ズビッ」

河合が泣いてるよおおっ!?

「ヒック、ズビッ」

あ〜あ〜あ、きったないなあっ！シャツの袖で鼻拭くなよおおっ！
ガサガサッてカバンからティッシュ出して、シュッシュッて取り出して、
河合の顔のところに押しつけてやった。

「え？ あ... サ、サンキュ」

河合がティッシュ受け取って「ビーッ」って鼻かんでる間に、私もサササッて涙を拭いた。
やだな、こいつと一緒に泣いてるなんて！

チラッとマリたちの方を見ると、マリがハンカチを出して涙を拭いていた。

あ〜あ、マリが泣くのって絵になるよね。

きっと中原くんも可愛いとか思ってるんだろうなあ...って、いいじゃん、そう思った方が。

そう...なんだけど...さ...

結局、女の子は都会の男の子と結ばれてハッピーエンド！ だと思ったよ！

「いやあ、カンドーっすねえ」

映画館を出た途端、河合がそう言って笑った。

「どうよ、マリちゃん、感動したべ？」

「え...うん...ハッピーエンドでよかった」

マリがそう言って微笑んだ。

そりゃね、結ばれた二人にとっては“ハッピーエンド”かもしれないけどさ、
恋のサポート役のあの子にとっては“ハッピー”じゃないじゃん！

...なんて、私...

なんかイライラしてない？

恋のサポート役

ミスドに行ってお茶して、他の三人が楽しそうにしゃべってるのに、私は...

なんか、私だけ...胸の真ん中がモヤモヤして...重くて...

中原くんがマ리에話しかけるたびに、どんどん気持ちが沈んでく。

なに？ これ... なぜ？

ううん...私...わかってる...なぜなのか...だって、私... 中原くんが好き...なんだ。いつのまにか、中原くんのこと好きになってたんだ。バカみたい、何やってるの、マリの恋のサポート役だったはずなのに、私が中原くんを好きになるなんて、バカみたい、どうしよう、どうしよう、こんな...

「あかりちゃん、私、トイレに行ってくる」

マ리가耳元でささやいた。

マ리가立ち上がって、そして、フラッと座り込んだ。

「マ、マリ、大丈夫？」

肩をつかんで支えると、マ리가青い顔してうなずいた。

「ちょ...ちょっと...貧血...」

「疲れたのかも、帰ろうよ、ね？」

「う...うん...」

私に支えられてヨロヨロと立ち上がるマリ。

そうだったよ、マリはすぐ貧血起こすんだった。

私ったら、自分のことばっかで、マ리가具合悪いの気づかなかった。

「ごめん、私たち、先に帰る」

中原くんにそう言うと、中原くんが心配そうな顔で「う、うん」とうなずいた。

「あかりちゃん...私、一人で帰れるから...あかりちゃんはまだいて」

「なに言ってんのよ!? 途中で倒れたりしたら危ないじゃん！」

それに、私がここに残ったって...意味ないんだよ。

「俺が送ってくよ」

そう言って立ち上がったのは、河合だった。

「俺、マリちゃん家と近けえしさ」

「い、いいよ、私が送っていくから」

「つつたって、バスだろ？ 遠回りすんじゃないよ。」

チャリなら近道通ってくから、すぐ着けんだからよ、俺、送ってく」

「で、でも」

「中原、あかりのこと頼むな」

そう言うと、さっさとマリの手を取って出ていった。

え... いいのかな... 河合に... でも... 今はしょうがない...よ...ね...

「俺たちも帰ろうか」

「え？ あ、う、うん」

食べかけのドーナツとコーヒー置いて、中原くんと一緒に店を出た。

中原くんがチャリ引いて、私とその横を歩いて近くのバス停に向かった。

ピポッ

エッ？ 私の？

急いでカバンの中から携帯出すと、メールが来てた。

マリかな？ ピッ。

『ただ今マリちゃん無事帰宅！ 安心しろ』

あ... 河合だ。

「河合...くん、からだった」

そう言ってメールを中原くんに見せると、「よかったな」って言って微笑んだ。

「山岸って、友だち思いだよな」

「えっ、そ、そんな...」

そんなこと...ないよ...だって...今だって...

こうやって中原くんと二人きりでいるのを...心のどこかで...喜んでる...やなやつ...

「河合は、山本のことが好きなのかもな」

「エッ!? ウソッ!?」

中原くんが私の顔をチラッと見て、なんか淋しそうに微笑んだ。

「や、やだ、ぜーったいダメ！」

「河合が山本を好きだったら、山岸は...困るわけ？」

「困るっ！ え、あ、だっ、だって、河合って、マリのタイプじゃないもん！」

「山岸は？」

「え？」

「どんなヤツが好きなの？」

中原クンガ...好き...

「そ、そんなこと考えたことないってばあ！ア...アハハ」

言えないよ...そんなこと...ぜったい...

バス停が見えてきた...とき、中原くんが自転車にまたがった。

「乗って」

「え？」

「送るよ」

「でも、もう少しでバスが...」

「いいから乗れって」

中原くんがそう言って笑った。

「う、うん、それじゃ」

私は荷台に横座りして、中原くんの腰に腕をまわした。

中原くんがグイッとペダルを踏んで、私はもっと強く中原くんを抱きついた。

心臓がドキドキして、中原くんの背中に伝わっちゃわないかな。

伝わればいい...言葉の代わりに...私の心臓の音...

ダメだよ...あかり...中原くんは...マリの好きな人なんだから...

わかってる...だけど...今だけ...今だけだから...

なんか、せつなくて、苦しくて、涙がツーッと頬を伝って、中原くんのシャツを濡らした。

私の家の前、中原くんの自転車から降りて、

「ありがとう」

そう言うと、中原くんが微笑んだ。

コノ微笑ミヲ...私ダケノモノニデキタラ...

バカじゃない？ 私、どうかしてるよ、私、あんな映画みたからだよ。

「な、中原くん、あの、マ리에メールしてあげてくれる？」

「え？」

「だ、だって、ほら、あの子のことだから、あんなカンジで帰っちゃったこと
気にしてると思うんだよね、でも、自分からメールしたり電話して、
ゴメンとか言えない子だし、だから... メールしてあげて」

そしたら...きっと...マ리는喜ぶから...

「うん、わかった、しておくよ」

「サンキュー」

中原くんはニコッと笑ってペタルを踏んで帰っていった。
中原くんの背中が小さくなって見えなくなるまで見送りながら、
私は必死にグチャグチャの自分の気持ちを静めようとしてた。

お風呂から上がって、ボタンとベッドに寝転がった。
な〜んか疲れた...中原くん...マ리에メールしたのかなあ...
しないで欲しい...
バカみたい...頼んだのは私なのに...

プルルプルル...

電話、誰？ あ... マリだ！

「も、もしもし？」

「もしもし、マリ、あかりちゃん、今日はごめんね」

「なに言ってるの！ そんなこと気にしなくていいよ、もう大丈夫なの？」

中原クンカラ、メールハ来タノ...？ バカ！

「うん、あの...ね、生理だったの」

「ああ！ それで！」

「うん、それに...なんか、緊張しちゃってたみたい」

ウフフツツという笑い声が聞こえた。

マ리는なんにも知らない...私が中原くんのこと好きになってるって...

「あかりちゃん、私ね、すごくシアワセだなあって思う」

そりゃそうだよね... マリは...恋のサポート役じゃない... 主役だもん...

「今ね、あかりちゃんのこと考えてたの」

「え...? 私のこと?」

「うん、私ってウジウジしてて、自分からは何もできなくて、
だから小さいときから友だちってすごく少なくて、
でも、あかりちゃんは私と仲良くしてくれて、私のためにいろんなことしてくれる...って、
そう思ったら、とってもシアワセな気持ちになって、
なんかねあかりちゃんに、ありがとうって言いたくなかったの」

「え...」

「あかりちゃんが友だちになってくれて、ほんとにシアワセ、ありがとう」

胸がズキーンってした。ちょっと泣きそうになった。

マリがそんなこと考えててくれてたのに、私ったら、自分のことばっかで...

「マリは私の一生の友だちだよ！ ぜったいに...ぜったい、裏切らないよ」

「あかりちゃ〜ん」

マリの泣きそうな声を聞きながら、私、誓った！ マリのこと、裏切らない！
もうヘンなこと考えるのやめる！ 恋のサポート役に徹する！

そうだよ、よく考えたらさ、もしも私が中原くんにくっついてとしても、
成功率かなり低いよ、撃沈だよ。

そんなことで中原くんともマリとも気まづくなったら、もっとイヤじゃん。
それに... 恋のサポート役なら...中原くんのそばにいたっていいんだもん...
なんか...私って、セコッ！

でも、それくらいオイシイことないとやってらんないって！アハハハ〜ア。

いいよね、そばにいるだけなら...

いいよね...そばにいるだけでも...

河合との対決

月曜日の昼休み。

いつものようにマリと中庭でお弁当食べてると、河合がそばにやってきた。

「おお！マリちゃんの弁当うまそうだなあ」

マリの前にウンコ座りして、あっ、マリの卵焼きを...！

「ちょっと、あんた、きったない手で！」

「いいじゃーん、なあ？ マリちゃん」

「う、うん」

「ほらあ、マリちゃん、いいってよ」

そう言うと、今度は私とマリの間にお尻をグイッと入れて座りやがったあっ！

「な、なによっ、ジャマでしょ!？」

「つうか、おまえがジャマ！」

「ヘッ!？」

「おまえは中原んところにでも行ってろよ」

「あ、あ、あんたがいけばいいでしょ!？」

「俺はマリちゃんの卵焼き食うんだもーん」

こいつうううっ！

ふと中原くんの言葉を思い出した。

『河合は山本のことが好きなのかもな』

な、なにいいっ!? ぜーっっったい許さーっーん！

私は必死こいてサポート役に徹することにしたんだからああああっ！

あんたの好きにさせないんだからああああっ！

「マリ、中原くんのところ行ってて」

「え？」

「私は河合に話があるから」

「エッ、お、俺？」

「そう、あんた！」

マリは戸惑った顔して、私と河合の顔を見て、コクンとうなずいて校舎の中に入っていった。

私は仁王立ちしたまま、河合の顔をジューッと睨みつけてやった。

「ちょ、ちょい、おまえ、なんか、すげー怖えよお」

「あのね、あんた、マリのこと好きになってもムダよ」

「ヘッ？」

「可能性ゼロ！ ていうか、マイナス！」

「マ、マイナスって、おまえ、アハハハハ」

「笑ってる場合じゃないのっ！」

「あ、は、はい」

河合が上目遣いで私を見ながら、口押さえた。

「それにね、マリには好きな人がいるの！ わかった？」

「はあ」

河合が上目遣いのままペコペコうなずいた。

「以上！」

クルッと河合に背を向けて行こうとすると、

「なあ、おい」

って呼び止められた。

「なによ？」

「まあ、ちょっと座れって」

グイッと私の腕を引っ張って無理やり自分の隣りに座らせた。

「マリちゃんの好きなヤツって、誰？」

あんたになんか言えるわけないじゃん！ 中原くんと友だちなのにさ！

しかも、あんたなんか、すぐベラベラしゃべっちゃいそうだよっ！

「おまえ、俺の顔睨みながら、なんか考えんのやめろよお、怖ええって」

河合がそう言って笑った。

笑ってる場合じゃないのよっ、私はねっ！

どうする？ 言えるわけないじゃん、よりによってこいつに...！

でもさ... 「マリちゃん、好きなヤツがいるらしいぞお」なんて中原くんに言われたりしたら...

どうする？ 今までの私とマリの行動から、すぐに中原くんだってバレちゃうよね？

どうしよう...

あっ！ いいこと考えた！

こいつを味方に（イヤだけど）つけちゃう！

「ブァッハハハ！」

河合が突然笑い出した。

「おまえ、百面相みてえ！アハハハ」

「ひゃ、百面相おおおっ!? な、なにそれえええっ!？」

「考えてることぜーんぶ顔に出るっつうか、コロッコロ表情変わんだもんよ、おっかしい！ 笑いすぎて腹痛てえよおお」

んつとに失礼なヤツ！

こんなやつを味方につけようなんて私もバカかもしれん。

人の顔見て涙流して笑ってるこいつを...!?

「んで？ 誰よ？」

河合がひとしきり笑い終わると、涙を拭きながら聞いた。

「誰って？」

「だからあ、マリちゃんの好きなヤツ」

中原くん！...なんて言ったら、こいつは即ここから走って中原くんに言うだろな。

でも、言わなかったら、「誰？誰？誰？」ってしつこく聞いて、中原くんにも

『マリちゃんに好きなヤツがいるんだってよ』なんて無神経に言っちゃって、クラスのみんなにも言っちゃって、マリが窮地に陥るに決まってる。

やっぱり、こいつを味方につけよう！てか、手下にする！

「ちょっと、耳貸して」

私は河合の耳をギュッと引っ張った。

「イデデデ！ な、なにすんだよお」

「いいから、耳貸して！」

「貸せねえよお、これっきゃ持ってねえもん！なんちって！ブァッハッハッ」
バッカじゃない...!? いや、今はガマンガマン...！

「あんた、私に協力してよ」

「ヘッ??」

「マリの恋のサポート役」

「お、俺が??」

「あんたには、ぜひ！いや、ぜったい！協力してもらわなきゃ困るのよっ！」

「いいけどさ、相手わかんねえと協力できねえじゃん」

「それじゃ言うけどね、ぜったい、ぜーったい、誰にも言っちゃダメよ！」

「言わねえ、誓う、な？ 誰よ？」

「言ったりしたら、ほんとにこの耳引きちぎるからねっ！」

そう言ってグイッと河合の耳をひつつかんでやった。

「イデデデッ！ わ、わーかったから、言わねえってばよお」

「ぜったい？」

「マジマジ」

「ほっっっっつんとに？」

「ブァッハハ！ おまえ、そんなに疑うなら、俺に協力させんのやめりゃいいべ」

「それじゃ困るのよっ！」

「わーかったよ、んじゃ、ホイ、指きり！」

河合が私の手を無理やりつかんで指きりした。

高校生にもなって指きりかよお!?

ま、いいや、なんでも。

「んで？ 誰？」

「ぜったい協力してよ？」

「はいはいはい」

「もう一回言っとくけど、あんたじゃないからね！ あんたは可能性…」

「マイナス！ だろ？ わーかってるって」

河合がそう言って笑った。

「あのね、中原くんなの」

「エッ!？」

河合が目ン玉飛び出そうな顔して驚いた。

「だから中原くんとマリが、うま〜く、なにげ〜につき合えるようにしたいわけ」

「ア—————ッ」

河合がそのままバタンと寝転がった。

まあね、河合にしてみたらショックだよな。

自分の好きな子が自分の親友を好きなんだもんね。

「そりゃ、おまえ、ヤベえよ、なんだよ、それえええ」

わかるけどさ、でも、

「しょうがないじゃん！ 好きなんだから！」

「そうだけどおお、どーすんだよおおお」

「あんたは黙って協力してくれればいいのよ」

「エ—————ッ!? キッツ—————ッ」

河合が寝転がったまま頭を抱えた。

「わかるけどお、協力するって約束したんだから、ちゃんと協力してよね」

「それ、撤回！」

「なに言ってるのよっ！ 指きりしたじゃん！」

「エッ？ あの指きりは、誰にも言わねえって指きりじゃねえの？」

「指きりは指きりでしょ！」

「んなこと言われてもよお、マズイってえ」

「ま———ったく男らしくないわねっ！スパッとあきらめて協力しなさいよ！」

「そんな、おまえなあ、スパッといかねえ事情つつうのもあんべ？」

「どんな事情よ？」

「だから、それは、おまえ…」

河合が私の顔をチロツと見て、なさけな〜い顔してみせた。

「あ〜〜もう、俺、すっげーフクザツだああああ」

「好きな子がシアワセになるんだよ？ そう思えばいいじゃん！」

「だからさあああ、あ———も———っ、わけわかんねえ！」

「単純なことじゃん！ なにゴチャゴチャ考えてんの!？」

「単純じゃねーよお！ ったくよお、どうすりゃいいんだよお！」

河合はそう言って芝生の上をのた打ち回ってる。あ〜あ、泥だらけだよ。いいけど。

「とにかく、そういうことだから、ぜったい協力してよね！ それじゃ！」

立ち上がろうとしたら、河合が私の腕をつかんだ。

「な、なによ？ まだふっきれないわけ？」

河合があお向けに寝たまま、私を恨めしそうにジ〜ツと見た。

「河合、わかるけどさあ、好きな子のために協力してあげるっていうのがホントの愛じゃないの？」

「おまえは？」

「私？ 私がなに？」

「中原のこと、どう思ってたよ？」

「エッ、な、なに、ど、どういう意味？」

「好きなのか？」

「バ、バッカじゃない!? す、好きって、そ、そりゃ友だちとしては好き…だよ」

「そんだけ？」

「だ、だから、なんなのよ!? 今、私の話じゃないでしょ!？」

「ま、いいけどよ」

河合はそう言うと身体を起こした。

な、なによ、なんなのよ、やだ、私、動揺しちゃったよ、ま、まさかバレたり？
だ、大丈夫だよ…ね、こいつ、鈍そうだもん。

「あのさ」

河合が頭ボリボリ搔きながら言った。

「やっぱ、俺、協力できねえわ」

「な、なんでよっ!? ここまで聞いときながらそれはないでしょおっ!？」

「だからあ、協力はできねえけど、おまえのジャマもしねえよ、

ま、おまえはおまえで好きにやっちくり」

「なにその言い方ああああっ!? アッタマくるうううっ!」

「しょうがねえじゃんよお」

「しょうがなくはないわよっ! なにさ! あんた、マリのことが好きだから、

中原くんを取られるのがイヤなだけなんでしょ!? いいかげんあきらめなさいよ!

マリは中原くんが好きなんだよ! しょうがないじゃん!」

「んなことじゃねえって」

「それじゃなんなのよ!？」

「おまえに関係ねえだろ!」

「なっ...」

たしかにそう... 私には関係ない... マリと中原くんのこと... 二人のこと...

私には関係ないこと... 私がそこには入れないこと...

「あ... わ、悪りい、そういうんじゃねえんだ、だから、ただ...」

「どうせ私には関係ないわよっ! 関係ないことに首突っ込んで、必死こいて、

苦しんだりして、バカみたい! バカだよ! どうせ、どうせ、私なんて」

「あ、ちょ、ちょい、そ、そういう意味で言ったんじゃ」

「なによっ! あんたなんか! なんにも知らないくせに!

私の気持なんかなんにもわかってないくせに!」

「わ、悪かったって」

「悪かったなんて思っていないくせに! バカだと思ってるくせに!」

「思ってねえよ!」

「思ってるわよ! 人の恋愛に首突っ込んで、サポート役気取りで、

バカなヤツだって思ってるよ! バカだよ! どうせ私なんて、私なんて」

心の中で何かかプツツと切れて涙が溢れて止まらなくなった。

「もういいよ!」

走り出そうとした瞬間、河合に腕をつかまれた。

「な、なによ!? 離して!」

「ごめん、俺が悪かったって」

河合は私の腕をつかんだまま、そう言った。

「は、離してよ!」

手を振りほどこうとしても、ギュッとつかまれて...

「ごめんな、なんか、俺、わかんねえけど、ごめん」

「離してってば！」

バッチーン！

開いてる右手で河合の頬を思いっきり... 引っぱたいちゃった...！

あ... やっちゃった...！

河合が一瞬、顔を歪めて、それから目をシバシバさせて私を見た。

「あ、あの、か、河合、ご、ごめ...」

「効っく————っ」

河合がそう言ってプルプル頭を振って笑った。

「ヒャー、おまえのパンチ、畑山もまっつぁおだぜ」

「え？ は、はたけ...??」

「てかさあ、どうせなら数学んときにやってほしいよな、一発で目え覚めるって」

そう言って笑う河合、なんか... 私... ホツとしたような... 気の抜けたような...

「なんだよなあ、あかりちゃ〜ん、強烈パンチのわりにはしょっぺえ顔してんぞ」

「しょっ...しょっぱいって、な、なによ、いいかげん手え離してってば!」

「やーだよおお、離れたら今度は左フックかまされっかもしんねえもん」

「そ、そんなことしないわよ！」

「わっかんねーぞお？ おまえ、すっげー強い強えかなあ」

「わ、悪かったわねっ！」

「の、わりに、泣き虫だしよ」

そう言って私の頬に流れてた涙の跡を指でなぞった。

「な、なによ!? あんただって泣き虫じゃん！ 映画見て鼻水たらすほど泣いてたくせにさ！

ズズッなんてすすっちゃって、シャツの袖で拭いたりして、きったないんだからあああっ！」

「おまえだって泣いてたじゃんよ」

「ウッ...」

「ヨチヨチ、にいちゃんがいい子いい子してやっかなあ」

河合が私の頭をクシャクシャと撫でた。

「や、やめてよおっ」

「おまえ、あんまムリすんなって」

「え？」

河合が私の顔を見て優しい顔で微笑んだ。

「おまえ、ほんとは中原のことが好きなんだろ？」

「エッ、あ、だ、だから...」

「俺は... おまえをサポートしてやっからよ」

「だ、だから、そうじゃ...」

「おっ、ヤベ！ 昼休み終わっちゃうじゃんよ！ 便所行ってこよっ！」

河合が私の手を離して校舎の中に走っていった。

な... なに...よ... わかったようなこと... 言っちゃって...

“おまえをサポートしてやっからよ”

バカじゃない... 私をサポートして...どうするのよ...

“あんまムリすんなって”

ムリ...なんて... ムリ...してるの...かなあ...

なんか... わかんない... なんか... わかんなくなってきたよ...

自分の気持ち...

河合ってヤツのことも...

衝撃の事実

あれから河合は... ぜーんぜん変わんない、いつもとおーんなし、バカ言って、バカやって、ゲラゲラ笑ってる。

だから... ヘン！！

マリが中原くんのこと好きって聞いたのに、私に“おまえのサポート役になってやる”なんて言ったりしたのに、そんなことなかったみたいに普通...なんて、河合って、わかんない、何考えてんだろ？なんか今まで河合とってた河合が河合じゃなかったみたいなの、へ～んな気持ち...！

4人で文化祭の実行委員の話ししてる時も、ぜんぜん「フツー」にしてて、なんかさ、こいつって、二重人格??

「山岸？」

中原くんに話しかけられて、ハッと我に返った。

「あ、な、なに？」

「いいかな？」

「え？ な、なにが？」

中原くんがヘンな顔して私を見た。

「山岸、具合でも悪い？」

「え、あ、う、ううん」

「でも、さっきからボーッとして、ヘンだぞ？」

「ご、ごめん、なんでもないよ」

「今から俺の家で話し合おうかって言ってたんだけど...大丈夫？」

「あ、うん、いいけど」

ダメだ、ダメだ、私ったら、ボーッとしちゃって！ 河合のことなんかどーでもいいんだよ、マリと中原くんの恋のサポート役なんだから！ しっかりしろ！

「ブァッハッハ！」

河合が突然吹き出した。な、なに??

「おまえ、自分の頭ポカポカ殴ってどーすんだよ！」

「エッ!? (そ、そんなことしてた私??)」

「まったく、おまえ見てっとあきねえ！」

「う、うっさい！」

「怖えっ」

河合が首をすくめて笑った。

な、なによ、あんたのせいだよ！ ったく、バカ河合っ！！

学校の自転車置き場。

「チャリで行こう」って中原くんが言って、さあ、どっちがどっちに乗る？
決まってんじゃない！ マリが中原くんだよ。それで...私が... 河合だよおお。

「マリちゃ〜ん、俺の後ろ乗ってちょ！」

河合がマリを呼んだ。

知ってるくせに...マリが中原くんのが好きって...

「う、うん」ってうなずいて河合の方に行こうとするマリの手を引っ張って、

「マリ、あんたはあっち！」って中原くんの方に押して、私が河合の方に行った。

「なんだよなあ、な〜んで、おまえが来るかなあ」

知ってるくせに！

ムスツとした顔で河合の自転車の後ろに座った。

チラッとマリを見ると、真っ赤な顔で中原くんの腰につかまってる。

「お、おい、ちゃんとつかまれよ」

河合が後ろ振り向いて言った。

「つかまってるじゃん！」

私は河合のシャツを指でつまんで見せた。

「おまえなあ、汚ったねえもんでも触るみてえによお」

河合がそう言って笑った。

「いいから早く行ってよ！ マリたち、もう行っちゃったじゃん！」

「落ちても知んねえぞ」

河合はそう言ってグイッとペダルを踏んだ。

あ... なんか、やっぱ、これ、グラグラして、ヤバイかも... しかたない、
イヤだけど、河合の腰に腕をまわした、ら！ ヨロヨロヨロ〜ッ！キキーッ！
自転車が斜めになって止まった。

「ちょ、ちょっとお！ 何やってんのよおっ!？」

「わ、悪い、おまえが急につかまるから」

「つかまれて言ったの、そっちでしょ!？」

「そ、そうなんだけどよ」

「ヘッタクそ」

「あっ、おまえ、んなこと言うか？ おーしっ、見てろよ」

河合が私の腕をとって、ギュッと自分の腰にまわした。

「な、なにすんのよおっ!？」

「俺のチャリのすごさを見してやるっつうの」

そう言うと、グリーンとペダル漕いで、すごいスピードで走り出した。

「こ、こわいってばあああ！」

「ちゃんとつかまってねえと死ぬどおお！」

河合はそう言って笑いながらグングンスピード出した。

「わ、わかったからああああ！ やめてよおおおおお！」

「ヒョエー！ きっもちいいいいいい！」

「ヤダー—————！ こわいってば—————！」

「気持ちいいじゃーん！」

怖くて、だんだん腹が立ってきて、なんか泣きたくなってきた、

「もうイヤ！ 降りる！ 降りして！」

私は大声でそう言いながら、河合の背中をバンバン叩いた。

河合がスーッとスピードゆるめて路肩に自転車を止めた。

「サイテー！」

私はそう言って自転車降りて、反対方向に走り出した。

「あ、あかり！」

ガチャンって、河合が自転車投げた音がしても私は走った。

「あかり！ 待てよ！」

待つわけないでしょ！ あんたなんか！ サイテー！

マリが中原くんのこと好きって知っても、私に“ムリすんなよ”って言っても、

“おまえのサポート役になるよ”って言っても、

ぜんぜん普通の顔して、なんにもないような顔して、

あんたなんか、わけわかんない！ サイテー！

「あかり！」

気がつくと、河合が追いついて私の腕をつかんだ。

「放して！」

「ごめん！ 俺、ごめん、マジ、ごめん」

「放してよ！」

「悪かった、マジ、ほんとに、ごめん」

「放してってば！」

バチンって、河合のほっぺたを引っぱたいても、河合は一瞬顔を歪めただけ。

「なによ!?　なんで放さないのよっ!？」

「だって、おまえ、逃げっだろ？」

「だったら何よっ!？　どこ行こうが私の勝手でしょ!？」

「だからあ、悪かったって、マジ悪かったからよ」

「あんたなんて、あんたなんて、大キライ!!」

河合の顔が一瞬引きつった。そして、次の瞬間、

「キツツー！」

大げさに顔をしかめてそう言って笑った。

「んなハッキリ言うなよお」

「キライなもんはキライなのっ！」

「イテ～、今度は2連発かよお？」

そう言ってヘラヘラ笑ってる河合を見ると、ますます腹が立ってきた。

「そうやって何言われてもヘラヘラしてるところがキライなのっ！

あんたって、何考えてるかわかんないよ！

マリが中原くんのこと好きってわかっててもフツの顔してさ！

私にあんなこと言たくせに、な～んにもないような顔してさ！」

「あんなことって、どんなことだよ？」

「だ、だから...　ムリすんなだの、サポート役してやるだの...」

「言ったわりに俺が強力にサポートしてねえって、そういうことっすか」

「ち、ちがうわよっ！」

「オッケー！　やっちゃん！　グイグイおまえのサポートしてやっからよ！」

「ち・が・うってばっ!!」

「おまえと中原、ちゃんとくっつけてやっからさ、チャリ乗れよ」

河合はそう言ってアゴで、遙か後ろの方に置き去りにされたチャリを指した。

「どーしてそういう話になるのよっ!？　ちがうって言うてるでしょ!？」

「おまえさ」

河合が急にマジメな顔して私の顔を見た。

「友情と恋愛と、どっち取る？」

「だから、私は、べつに、中原くんのごことは、なんでも...」

「つうか、おまえ、すっげー鈍いよな」

「ヘッ？」

ニブイ...??　鈍い...　鈍いいいっ!？」

「な、な、なんで、あんたなんか鈍いなんて言われなきゃいけないのよっ!？」

「だって鈍いじゃんよ」

「わ、わ、私のどこが鈍いっていのっ!？」

河合が私の顔を上目遣いでチラッと見た。

「おまえのことが好き...ってヤツがいんだよ」

「ハ？」

「ほらな、わかってねえじゃん」

河合はそう言ってヘラヘラ笑った。

「な、な、な、なによそれえええっ!？」

「だから鈍いっつたんだっつうの！」

「バ、バカにしないでよ！」

「バカになんかしてねえよ」

「してるわよっ！」

「してねえっつうの！」

河合が珍しくイラついた声で言った。

「マジで、おまえのことが好きなヤツがいんだよっ！」

「誰よ!? 言ってみてよ！」

「だから... それは...」

「ほらね！ やっぱりウソじゃん！ 私のことバカにしただけじゃん！」

そうだよ！ こいつなら、ぜったいやりそう！

「そんなくっだらないうソついでバカにして、だから、あんたってキライ！」

「中原だよっ！」

河合の怒ったような声が、今、なんて言った？

「中原は、おまえのことが好きなんだよ！」

「え...？」

頭の中が...真っ白...なんか...よく...わかんない...

「だから、おまえと中原は、なんつうの、相思相愛？」

イラついたように言う河合の言葉が... ぜんぜんピンとこなくて...

「おまえが山本と中原をくっつけようとしてもムダだっつうの！」

中原が好きなのは、おまえなんだからよ」

「う...そ...」

「ウソじゃねえよ！ 俺は中原から聞いたんだよ！」

「え？」

「いっちゃん最初に中原ん家に集まったとき、あんだろ？」

あんとき、おまえと山本が来る前に聞いたんだよ」

「う、うそ...」

「だから、俺は、協力してやるつつったんだよ！」

「な...なに...それ...」

「協力するもなんもねえけどな？ 二人とも好きあってんじゃん、なあ？」

「マリ...マリは...マリはどうするの...マリは中原くんが好きなのに...」

「しゃーねーじゃん、中原が好きなのはおまえなんだからよ。

んで、おまえが 好きなのも中原！ しょうがねえじゃん、しょうがねえよ」
河合が、やっと私の手を放した。

「あーっ、ヤッベーなあ、俺、言っちゃったよお、超ヤベーよ、これ」
河合は大きさに頭を抱えて見せた。

私は... どうしたらいいの... なにこれ... わけわかんない...

頭の中がグチャグチャで、どこからどう考えていいのかわかんなくて、
なんだか気持ち悪くなってきて、思わずその場にしゃがみ込んだ。

「お、おい、大丈夫か？」

「き...気持ち悪い...」

「マ、マジ？」

「吐きそう...」

「エッ!？」

「やだ...ほんとに...吐きそう...」

胃から何かが突き上げてきて、思わず手で口をふさいだ。

「ちょ、ちょっと待ってろ、あ、あそこのドブまでガマンしろよ？」

そう言って河合が私のことを抱き上げようとする、ますます気持ち悪くなって、

「も、もう、ダメ...！」

「あっ...！」

河合の腕の中で... 私... 吐いちゃった！

河合の部屋

みなさ〜ん、（って、誰!?) 私は今、河合の部屋にいまーす。
そんで、おとな〜しく狭っまい部屋のすみに座ってまーす。
河合は、これまた小っこい洗面台で自分の制服のシャツと私のブラウスを
ザブザブ洗ってまーす。だって、私がゲロ吐いたから！.....。

あ————っ！も————っ！恥かしいiiiiiiiiっ！

なんでゲロ吐いちゃったかなあああああっ!?
しかも、河合に直撃でさあああああっ！

「こんくらいでいいか？」
河合がビショビショの私のブラウスを持ち上げて見せた。
「う...うん...ご...めん...」
河合の顔がまともに見れないiii。
「似合うじゃん、それ」
河合がアゴで私の方を指した。
「そ、そう...？」

河合に貸してもらったTシャツ、真っ赤な生地に“Funky Monkey Baby!”のロゴ。
なんじゃ、こりゃ?? どこで買ったの、こんなの!? 趣味悪る〜いっ。
似合うって言われてもねえ...って、貸してもらって文句は言えない... シュン。
なんせ、私がゲロ吐いたんだから... シクシク。
河合がブラウスをギュッと絞って、その辺にあったコンビニのビニール袋に
入れて、自分のシャツも一緒に入れた。
「コイン・ランドリーで乾かしてくるわ」
「あ、わ、私のはいいよ、帰ってからやるから（お母さんが...）」
「そっか? んじゃ、俺のもここに乾かしときゃいいや」
そう言って自分のシャツを取り出して、窓のところにぶら下がっていたハンガーにかけた。
「あ、あの、それじゃ、私...」
そう言って立ち上がろうとすると、
「なんか飲むか？」
「え？」
「なんか買ってくっからよ」
「わ、私は、い、いいよ」
「ゲロ吐いたあとしてなんか飲んだ方がいいぞ」

い、言わないでっ！

「何がいい？」

「え、あ、な、なんでも...いい...」

「んじゃ、すぐ行ってくっから」

河合はそう言うと部屋を飛び出した。

河合の部屋に、私一人... ポツーーーーーン。

部屋の中、キョロキョロ見たりして、河合って、アパートだったんだあ。

アパートっていうか、下宿？ なんか、すごい古くない？

身体動かすたびに床がギシギシいうよ？

てか、ここ、すごい男くっさーい。あたりまえだけどさ。

畳の上にパイプベット、あ～あ、グシャグシャ！ 今朝起きたまんまってカンジ？

いちおう机はあるわけね。

あっ、あの参考書、私と同じだ...なんて、どうでもいいんだけどさ。

にしても、あの壁にかけてあるカレンダー！

“飯田村農協”ってナニ？？？

フツー高校生があんなカレンダーかけるうっ？ いいけど。

でもさあ、本棚にある本は、けっこうまともなんだよね。

この数学の問題集なんてむずかしいやつじゃん？ こんなものやってんだあ。

え？ “日本の農業の未来”？

なにこれ？？ うちって普通高だよね？ なんで“農業の未来”？ いいけど。

机の上、（って、私、河合の部屋探検してどーする!? ま、いっか!）おいおい、

なんで灰皿があるかなあっ!? いいけどお？

あれ？ この写真、春の校外学習（別名「遠足」ともいう）のときの、マリと私が写ってるやつ！

そうだよ、これ、写真屋のおじちゃんに「二人の撮ってえ」って頼んだやつだよ。

へえ、河合、買ってたんだあ。

だよねえ、マリが写ってんだもんねえ。

かわいそうに...！ 片思いのまま失恋だよ。

だって、マリは中原くんが好きで...

中原くんは... あーっもーっ、考えんのヤメヤメ！

あれ？ ベッドの下に...なんか、本が... 手を伸ばして引っ張り出して、ン？

あっ...！ あーーーーーっ！ ギャーーーーッ！ バシンッ！

ゼーゼーゼー、や、やだ、あんなの読んでんのおおっ!?
み、見てはいけないものを見てしまった気分... ウゲッ。
バタンと戸が開いた。ギクッ...!

「買ってきたぞお」

こ、こいつは...あんなエロ本を...

「ン? なんだよ? なんかした?」

「べ、べつに...」

「俺はコーラで、おまえは...ホイ」

河合が缶を目の前に出した。

「お、おしるこおおっ!?」

「そうだよ?」

「は、吐いたあとに、おしるこなんて飲めるわけないでしょおっ!?」

「おまえ、なんでもいいつつったべ?」

「な、なんでもいって言ったからって、フツーおしるこ買ってくるうっ!?」

「おまえ買ってきたじゃん、ほれ、映画見にいったとき」

河合がそう言ってゲラゲラ笑った。

こ、こいつうううっ、根に持ってやがったのかあっ!?

「なーんちってな! ほれ、爽健美茶」

河合がおしるこの缶を引っ込めて、爽健美茶を出した。

「え、そ、それじゃ、おしるこは?」

「ウケよ、ウケ! ブアッハハハ」

「ウ、ウケねらうためだけに買ってきたわけえっ!?」

「ピンポン!」

「バーツカじゃないっ!?」

「あれ? おもしろくねえ? 俺的にはあんどき、すっげえウケたんだけどなあ」

「ふ〜ん、私はもーっとおもしろいもの知ってるけどね」

私はニーツコリ笑って、ベッドの下から“あの!”本を取り出して見せた。

「ほーらね!」

「エッ!? あっ! あ—————っ! バ、バ、バカ、おまえ!」

河合が真っ赤な顔になって、私の手から本を奪い取ってベッドの下に投げ入れた。

「ね! おもしろかったでしょ?」

河合が赤い顔のまま、私を上目遣いでチロチロ見た。

「ったくよお、何見てんだよ、わざわざ引っ張り出してくることねえべ?」

「あんたこそ何見てんのよ!? あ〜んな本! ヤラシイんだから!」

「し、しかたねえだろお!?」

「な〜にがしかたないのよ!?」

「お、男は、なんつうか、そういうもんだって」

「あんただけでしょ!？」

「ちーがうって！ あれだぞ？ 中原だって持ってんだぞ？」

「ウツソだあ！」

「マジマジ！ 読み終わったやつ、交換したりすんだからよ」

「ウツソーー!？」

「おまえなあ、男つつうのは、そういうもんだって！ わかってねえなあ」

河合はそう言って立ち上がると、部屋のすみの小さい冷蔵庫から何か出してきた。

「おまえ、これ食っとけ」

そう言ってタッパーのフタを開けた。

「梅干し？」

「気分悪いときはいいんだぞ、食え」

「あんたって、梅干し買ったりするわけ？（若いのに）」

「これは俺のかあちゃんが漬けたやつだよ」

「お母さんが作ったの？」

「ああ」

「へえ」手作りの梅干しって初めてだよ。

「それじゃ、いただきますう...けど」

一個取って、パクッ。

「スッ・・・・・・パー——————ッ！」

「そんならいがいいんだつつうの、売ってるやつなんか添加物ばっか入ってて、本物じゃねえんだぞ、添加物食ってんだぞ」

「やたら詳しいじゃん？」

「まかしとけて」

河合はふざけたみたいにそう言って笑った。

「河合の家って、どこ？」

「田舎だよ、ドがつく田舎、こっから電車で2時間ちょいだな」

「もしかして... あそこ？」

私は壁のカレンダーを指差した。

「ピンポーン！」

「なんで、あれ、“農協”なの？」

「俺ん家、百姓だもん」

「そうなの？」

「今は、アニキがやってっけどな」

「河合も農業やるの？」

「家はアニキがいるからな、俺は、研究の方をやりたいわけよ」

研究??? 河合と研究??

「河合」「研究」二つの言葉が私の頭の中で、どーしても結びつかない!

「なんだよ、その顔はよお」

河合がそう言って笑った。

「エッ? わ、私、どんな顔してた?」

「似合わねーっ! みてえな顔!」

「な、な、なんでわかったの?」

「当たりかよお!? ひっでーっ」

河合が情けな〜い顔して笑った。

「だって...さあ」

「あ〜あ〜あ、おまえの俺に対するイメージって超悪くねえ?」

悪い。

「だからあっ、んな顔すんなって」

河合がそう言ってまた笑った。

「ど、どんな顔よっ!?!」

「なんつうの、眉間にシワ寄せて、こうやって、ジト〜ッと俺のこと睨むんだよ」

河合が大げさに眉間にシワ寄せて上目遣いで私を見た。そんな顔してんのおっ?

「たまには、俺にもニコ〜ッと笑ってくれたっていでねーの?」

「な、なによっ、あんたはマリにニコ〜ッてしてもらえばいいでしょ!?!」

あ... いけない... マリは中原くんのが好きで... 河合は失恋で...

「か、河合、あの、ご、ごめん」

「あっ、おまえ、妬いてんな?」

「ハ?」

「俺がマリちゃんにばっか優しいとか思ってんだろ?」

そうかそうか、俺にかまってほしいんか、だ〜ったら言ってくれよなあ」

「バッ・バッ・バッカじゃないっ!?!」

「アハハハ! ウッソでーす!」

な、なに、こいつううっ!? わけわかんない!

「なあ、ラーメン食いに行かねえ?」

「ハ??」

「晩メシ」

河合がそう言って机の上の目覚ましを指差した。

「ゲッ! 6時半!? わ、私、帰らないと」

「おまえんところ、親うるせえの?」

「そうじゃないけど、遅くなるって言ってないし...」

あんたと二人でラーメン食べる気ないし....

「そっか、んじゃ、送ってくよ」

「いいよ、一人で帰れるから」

「その格好で？」

河合が私を指差した。

真っ赤な“Funky Monkey Baby”...だったよおお。

「送って...ください」

河合がニコッと笑って、押し入れからゴソゴソ何か取り出した。

「寒いから着てけよ」

ボロッチいスタジャン。これを着ると？

「い、いいよ」

「風邪引くつつうの」って、無理やり私に着せてくれやがった。

袖が長くて手が隠れちゃうよ？

「河合って、大きいんだね？」

「見りゃわかんだろ？」

河合がそう言って笑った。あんまし...見てなかった...ってか、意識してなかった。

「河合って身長何センチ？」

「180ちょいかな」

「デカッ！」

「つつか、今さら驚くなつつうの！」

そうだよね、でも、なんかあんまり意識してなかったっていうか...

今、意識したっていうか...

「おまえは何センチあんの？」

「え、（それ聞くっ？）168...だよ」

どうせデカくて可愛くないですよっ。

「やっぱな！ おまえとしゃべってっと楽だもんな」

「ハ？」

「なんつつうの？ 背小せえとさ、俺、こうやって猫背になんねえとじゃん？」

河合が背中を丸めてみせた。

「おまえとは猫背になんねえでもしゃべれるもんな」

そういう“楽”ね。あ、そ。

「でも、マリは156だよ？ 小さいじゃん？」

河合がチラッと横目で私を見てフッと笑った。な、なによ？

「んじゃ、行くぞ」

河合が私の濡れたブラウスの入った袋を持って部屋を出た。

河合の下宿の裏の自転車置き場。ゴミ捨て場？ってくらい、ダンボールや壊れたトースターやわけわからないサビた部品みたいなのが置いてある。そこで、そこにある河合の自転車がミョ～に合うっていうか、粗大ゴミ？ってくらいポロちくてさあ。

「その自転車って... 拾ったの？（ゴミ捨て場から）」

「前ここにいた先輩にもらった」

河合は歪んじゃってるカゴに私のカバンとブラウスの入った袋を入れた。

「その先輩は、そのまた先輩にもらったっつうから、これは、なんつうの？」

「まあ、いわゆるアンティークっつうやつだな」

「バッカじゃな～い!? そういうのアンティークって言わないよ」

「んじゃ、なんつうんだよ？」

「ただのボロ・チャリ」

「バーカ、おまえ、こういうのが渋くてかっこいいっつうんだよ」

河合がそう言って笑いながら、サドルにまたがった。

「あ、さっき中原から電話あってよ」

「え？」

「コンビニの帰り、あんときな、んで、心配してたぞ」

「エッ!? ま、まさか、は、吐いたって...言った...の？」

「言った言った、ゲロ攻撃で死ぬかと思ったっつといた」

「ウッソーーーーッ!?」

「ウッソ！」

「な、なによ!? どっちよ!?」

「つうか、いいじゃん、べつに、ゲロ吐くくれえ、なんも恥ずくねえべ？」

「恥ずいよっ！」

「そっかあ？ しょうがねえじゃん、気持ち悪くなっただけなんだからよ」

「で、言ったの？」

河合は私をチラッと見て、またフツて笑った。

「な、なによ、それ、言ったってこと？」

「言ってねえよ、具合悪くなっただけ」

「あ... そ、そう」

「乗れよ」

「う、うん」

河合の後ろに座って、今度は、いちおう、河合の腰に腕をまわした。

うちでご飯

夜の町並の中、自転車が風を切って走る。
なんか... 気持ちいいかも。

赤信号で止まるたび、河合は私の方を振り向いて「大丈夫か？」って聞いた。
「うん」ってだけ答えるけど、なんか...
男の子にそんなふうに気をつかってもらったことってなかったから、なんか...
ドギマギして、なんか... バカみたい。

河合の背中に頬をくっつけてると、あったかくて、気持ちよくて、なんか眠くなってきた。
なんか... ヘンだよ、私、なんか今日は...ヘンだよ。

うちの近くのバス停が見えてきた！...とき、ゴルルルウウギユルギユルウツって
河合のお腹が鳴る音が私の手に伝わってきた。お腹空いてるんだ。だよ、
ラーメン食べようって言ってたんだもん、あのときから空いてたんだよね、
私の家って河合の下宿から遠いから、これから帰って、ご飯食べるのって、
もっと遅くなっちゃうね...って、何考えてんのよ!?

「おまえん家って、どこだ？」
河合が大声で聞いた。
「え？ あ、そこ左に曲がった突き当たりの白いマンション」

河合がスーッとカーブを曲がった。運転うまいかも。悪いこと言っちゃったかも。
へたくそ...なんてさ。悪いことしたよね、ゲロ吐いちゃって、ブラウスまで洗って
もらって、Tシャツ貸してもらって、寒いからって（ボロだけど）スタジャンまで
貸してもらって、送ってもらって...って、何考えてんの!?

河合の自転車がスーッとマンションの前に止まった。

「すげー！」
河合がマンションを見上げて言った。
「おまえってお嬢さんなんだなあ」
「ちがうよ、ただのサラリーマンだよ、30年ローンで買っただけだもん」
「アハハ、よく知ってるな」
「お母さんが、いつもブツブツ言ってるからね、ローンがタイヘンだあって」
河合が笑いながら、私のカバンとブラウスの入った袋をカゴから出した。

「あ... ありがとう」

「んじゃな！」

河合はそう言って手をあげて、グイッとペダルを踏んだ。

「あ、ま、待って！」

キーッと自転車が止まって、河合が振り向いた。

バカ、あかり、何言おうとしてるの？

「ご... ごはん... 食べてかない？」

河合がビックリした顔で私を見てるけど、もっとビックリしてるのは私だよお！

なんて言った、今？ ごはん食べてかない？って、河合に??

「マ、マジ？」

「う、うん」

だって、言っちゃったんだもん、私が、この口で、言っちゃったんだよお。

「あ、サ、サンキュ」

河合がボリボリ頭搔いて、自転車から降りた。

これはもう...後に引けな—————いっ。

河合と一緒にマンションの階段上りながら、私は一生懸命自分を納得させようとしてた。

だって、ほら、ゲロ吐いちゃったし、ブラウス洗ってもらったし、

Tシャツ借りてスタジャン借りて、送ってもらって、だから、なんていうの？

お礼？ そうそう！ お礼だよ！ だって...さ、いちおう...ね。

「ただいまあ」

ドアを開けると、奥からお母さんが出てきた。

「遅かったわね、どこ行って... あら？」

私の後ろの河合を見つけて不思議そうな顔して、また私を見た。

「ちわっ」

私の後ろで河合が挨拶してる。

お母さんは不思議そうな顔のままうなずいて、

「お友...だち？」

「う、うん、同じクラスの... あの、委員会で一緒に、今日ほんとは委員会があって、

でも、私、途中で気持悪くなって、吐いちゃって、あの、河合の、
あ、や、河合...くんの服まで汚しちゃって、それで、私の服も、それで、
「シャツ貸してくれて、送ってくれて、遅くなっちゃって、あの、だから...」
私はお母さんをすぎるような目を見た。

「ごはん...食べて行って...って言った...の」

「まあ、そうなの！ あらら、お世話になっちゃって、どうぞどうぞ」
お母さんがニッコリ笑って言った。ホーーーーッ。

「すいません、おじゃまします」

チラッと横目で河合を見ると笑顔で挨拶してた。ま... っか...

急いで着替えてリビングに戻ると、河合がテーブルの前に座ってた。

うちに河合がいる図... 不思議だ。

「あかりー！ あんたも手伝って！」

キッチンからお母さんが私を呼んだ。

「う、うん」

「俺も、なんか手伝いましょうか？」

へっ??

河合が立ち上がってキッチンに向かって言った。

「あらあ、いいのいいの、座っててちょうだい」

キッチンからお母さんがニッコニコした顔を出して言った。

私はチラッと横目で河合を見てから、サササッとキッチンに入った。

信じらんない... 河合がウチにいるよおお！

いつもの食卓テーブルに、私とお母さん...と、河合。なんじゃこりゃ??

お母さんはニッコニコしちゃって、河合に「あれ食べるこれ食べる」って、
なによ、その大サービスぶりは何?

河合は、なんかぜんぜんいつもと変わらないってカンジで、
なんか自然にここにいる...ってのが不思議だよ、こいつ！

「そう、一人で下宿してるの」

「はい」

「それじゃ、食事なんかはどうしてるの？」

「コンビニとか近くの定食屋で食べてます」

「あらあ、たいへんねえ」
フツツに二人で会話してるよ。いいけどお？
「お母さ、あ、や、おばさんの料理、うまいっスね」
「え？ あらあ、やっだあ、そうかしらあ、オホホホホ」
お世辞だっつうの！

「マジ、うまいっスよ」
だから、もういいって！
「そうだわ！ 今度からいつでも食べにいらっしやいよ」
ゲッ???
「マジっすか？」

か、河合、目え輝かすなよおっ！
「ええ、うちのお父さんはいつも遅いし、出張は多いしで、この子と二人きりで
食べることの方が多いんだから、いつでもいらっしやいよ」
な――んでそんなこと言うかなあああっ!?
「やったあ！ 超うれしいっすよ！」
あんたもなんで遠慮しないかなあああっ!?
ゼーゼーゼー... もう知らない。

お母さんに「ほら、下まで送ってあげなさいよ」なんて無理やり背中押されて、
河合と二人、マンションの玄関の前。

「マジうまかったあ！」
河合が嬉しそうに言った。
「サンキューな」
そう言って私の方を見てニッコリ笑った。ま... いっか。

「おばさんにお礼言っといてくれよな」
「う、うん、あの、私も、ありがとう」
「なにが？」

河合がキョトンとした顔で聞き返した。

「だから... あの、いろいろと...」
「つうかさ、楽しかったよ、俺」
「え？」

「なんつうの、おまえとまともに話したっつうか、あっ、つうよりさ、
まともに相手してもらったっつうの？ あかりちゃん、超冷てえんだもんなあ」
河合がふざけたみいにそう言って笑った。

「そ、そんなこと」...あるかも。

プルルプルル...

え？

「あ、俺だ」

河合がジープのポケットから携帯を出した。

「もしもし？ あ... うん」

河合がチラッと私を見た。

「いや、今メシ食いに出てた」

誰？ いいけど。

「あ... もう家にいんじゃないの？ ああ、わかった、んじゃない」ピッ。

「中原から」

河合がポケットに携帯しまいながら言った。

「え、あ、そ、そう」

「おまえにメール送っても電話しても出ねえって、心配してたぞ」

河合はそう言ってフツて笑った。

「今から電話してみるっつってたから、早く家に入った方がいいんじゃないの？」

「え... う...うん...でも...」

でも... 何を話せばいいの...

どんなふうに... 中原くんの気持ち知ったあとで...

「ほら、早く行けって」

「どう...したら...いいと...思う？」

河合が「ン？」って顔した。

「マリと...中原くん...とか、どうしたらいいのか...」

「んなこと、俺に聞くなよなあ」

河合が苦笑いした。

「そうなんだけど...さあ」

「おまえは、中原が好き...なんだろ？」

「え...」

好き...だよなあ...でも...なんか...

「好きなら好きでいいじゃんよ、中原だっておまえのこと好きなんだからよ」

「だって...マリ...」

「しょうがねえじゃん」

「でも...」

河合がガシンッて足で自転車のブレーキあげた。

「いくら好きでもさ、そいつが自分のこと好きじゃねえなら...しょうがねえよ」
そう言うとサドルにまたがって、こっちを見た。

「恋のサポート役なんてやめた方がいいぞ」

「え？」

「ぜってえ後悔すっからよ」

そう言うと、グイッとペダル踏んで、「んじゃ！」って、
すごいスピードで夜の町の中に消えていった。

部屋に戻って携帯を見ると、中原くんからのメールと着信、それにマリからも。
どうしよう... どっちにも... なんて言えばいいの...

プルプル... 手の中で携帯が鳴った。

誰？ あ... マリだ。

「も、もしもし」

「あかりちゃん？ 大丈夫？」

「う、うん」

「なんかやっぱり元気ないみたい」

「そ、そんなことはないよ、もうぜんぜん元気だよ」

「だったらいいけど...」

「それよりごめんね、連絡しなくて」

「そんなこといいよお、だって具合が悪かったんでしょ？」

「う...ん... あ、ていうかさあ、河合のやつがすごいスピードで走るから

気持ち悪くなっちゃって吐いちゃったんだよお、アハハ」

「は、吐いたの？」

「しかも、河合にもゲロかけちゃって、もう最悪うっ！」

「中原くんは、あかりちゃんが具合悪くて帰ったって言ってたけど」

「ゲロ吐いたなんてカッコ悪いから、ぜーったい言うなって河合脅したの！」

「アハハ、あかりちゃんたら」

「アハハ」

胸のところがヒリヒリする...マリ...私...どうしたらいい...？

グチャグチャの頭の中

朝になった。なっちゃった...ってカンジ。

なんか寝たんだか寝てないんだかわかんない。頭ボーッとしてる。

「あかり！ 早く起きなさい！」

お母さんの声がしても、ボーッとベッドの上に座って...

ゆうべは、マリとの電話のあと、携帯の電源を切っちゃった。

だって、もし中原くんから電話があったら、どんなふうに、何を言えばいいのか
わかんなくて、自分の気持ちがもっとグチャグチャになりそうで...

「あかり、何してるの！ 遅刻するわよ!？」

お母さんが部屋に入ってきた。

はぁ～あ...なんてため息ついて、ノソノソ立ち上がって洗面所に行った。

鏡の映る顔、さえないなあ。

好きな人が自分のこと好きってわかったら嬉しいはずなのに、なんでこんな顔してんの？

だってさ...そんな単純なことじゃないよ。

マリが好きな人だよ？　それで私はサポート役になるって宣言しちゃって、

なのに自分も好きになっちゃって、そしたら、その人は私を好き...

あーーーーっもーーーーっ！　わけわかんない！

制服に着替えてカバン持ってキッチンに行くと、お母さんがトースト焼いてた。

「ほら、早く食べなさいよ」

「食欲ないから、もう行く」

「ダメよ、ちゃんと朝食食べてかなきゃ！」

私だって食欲ないくらい悩むときだってあるんだよお。

モソモソしたトースト、口に突っ込んで牛乳で流し込んで、

「いってきま～す」

「あ、ちょっと待って、お弁当」

お母さんはそうってお弁当の包みを二つ渡した。

「へ??　なんで二つ？」

「河合くんの分よ」

「ハァ～??」

「だって、ほら、下宿じゃお昼だってパンとかそんなのでしょ？」

「だ、だからって、なんで私が、あいつの」

「昨日お世話になったんでしょ？ そのお礼よ」

「昨日ごはん食べさせたからいいじゃん!？」

「いいから持っていきなさい」

「やだよ、河合の分なんか持ってくるの」

「せっかく作ったんだから！」

ガチャッとドアが開いて、まだパジャマのままのお父さんが入ってきた。

「なんだ？ 朝からケンカか？」

そう言って寝起きのボーッしたヒゲづらで笑った。

「ほら、ゆうべ話したじゃないですか、あかりが具合悪くなったのを助けてくれて

シャツまで貸してくれて、ここまで送ってくれた同級生」

「ああ、そうそう、今どきの子にしては優しい子だよなあ」

オヤジ——！ なに感心してんのよっ!？」

「そうなのよ、下宿してるから外食ばかりらしくてね、昨日のお礼と思って

お弁当作ってあげたのに、あかりったら、持っていきたくないって」

「あかり、持っていきなさい」

オヤジまで口挟むなよおおっ！

「お父さんも大学のころ下宿しててな、いやあ、メシがまずくてまずくて...」

「わ、わーかったよっ！ 持ってけばいいんでしょっ!？」

ガシッとお弁当箱二つひつつかんでバタンと家を出た。

ったくさあっ、なに!？ うちの親って、わけわかんないっ！

プリプリしてマンションのドアを開けた...ら、 え??

「チース!」

河合が自転車にまたがったまま玄関のまん前にいる...???

「な・な・な・なんでいるのおおおっ????」

「迎えに来てやったんじゃん」

ニヤニヤしながらそう言うけどさあぁっ!？」

「な・な・なんでよおおっ!？」

「さあな、俺もわかんねえ」

そう言って笑う河合、あんた、

「バッカじゃな——いっ!？ あんたん家逆方向じゃん!？ てか、あんたんとこの

方が学校近いじゃん！ なんで、わざわざ来るわけええっ????」

「悪い？」

「わ、悪いって、信じらんないっ！ しかもなんで私んこ来るかなあっ!？」

「いーじゃん、来ちまったんだからよお、ゴチャゴチャ言ってねえで、

早く乗れつつうの！ 遅刻すんど」

「え、あ、う、うん」

って、なんで私も乗るかなあっ?? ま、いいや、もう、どーでも！

ひん曲がったカゴの河合のカバンの上にドンとカバン置いて、ついでにお弁当箱...

ふ・た・つ！

「なんだよ、おまえ、弁当二つも食うの？ すっげー大食いだなあ、アハハハ！」

「私のじゃないわよっ！ あ、あんたのよっ！」

「エッ!? お、俺？」

「お母さんが昨日のお礼だってさ！」

「マ、マジ？」

「私は持ってくるのイヤだったんだけど、うるさいから持ってきただけっ！」

「マジー!? 超嬉しいっ！ サンキュー！」

河合のニコニコした顔見てたら、ま、いっか...

「早く乗れよ」

「え、あ、うん」

河合の後ろに座って、腰に腕をまわすと、河合がグイッとペダル踏んで、
自転車が朝の風を切って走った。

河合の背中に頬をつけてたら、あったかくて、なんか、なぜか、ホッとして、
朝のドンヨリした気持ちが少し薄らいでいった。

ヘンなの、こいつって、なんか、わかんないけど、いっか！

学校の裏門のところで河合が自転車を止めた。

「おまえ、先行ってるよ、俺、チャリ置いてくからさ」

「あ、うん」

河合がカゴの中から私のカバンを取って、

「どっちが俺の？」

ピンクとブルーの（いつもはお父さんの）包みを持ち上げた。

「ピンクのが私に決まってんじゃない！」

「サンキュー！」

ニコッと笑ってスーッとチャリ置き場に曲がっていった。

なんだろうなあ、河合と登校（しかも、同じお弁当持って!）って...ヘンなの！

だいたい、なんで迎えに来たわけ?? まあ...正直いって...河合の顔見てホッと
したんだけどね...なんでか...わかんないけどさ...でも...だから...いっか!

教室に入ると、マリが駆け寄ってきた。

「あかりちゃ〜ん、よかったあ、来ないかと思っちゃった」

「な、なんで? もう元気になったって言ったじゃん」

「さっき中原くんがね、ゆうべ電話しても通じなかったって」

「え？」

「だから、かなり具合悪いんじゃないかって言ってたから」

「ち、ちがうよ、マリと電話したあと眠くて電源切ってただけ」

「中原くん、あかりちゃんのこと、すごい心配してたよ」

マリがそう言って淋しそうに微笑んだ。

またヒリヒリする...やだ...こんな気持ち...

「山岸、もう大丈夫？」

中原くんがそばに来た...!

「う、うん」

中原くんの顔を見ると、苦しくて、胸の真ん中が重くて、好き...なのに...

「今日、全体の委員会があるんだけど、大丈夫かな？」

「え? あ、う、うん...」

中原くんと二人... どうしよう...

「あの...私...」

ジリジリジリ! ってベルが鳴った。

「おお! セーフ!」

河合が教室の中に駆け込んできた。河合の顔見てホッとする私...って、ヘン?

授業中も頭がボーッとして、先生の言ってることなんか耳に入ってこない。

斜め前の中原くんの背中や、横の列のマリの横顔を見て、

フウ〜なんてため息ついて、チラッと斜め後ろの河合を見ると、あっ、目が合っちゃったよ...!

な、なに、こっち見てんのよっ!?...って、私もだけどさ。

やっと昼休み。いつものようにマリと二人で中庭に出た。

お弁当開けると、そぼろごはん、卵焼き、ほうれんそうのソテーやらカツやら、

お母さん、がんばっちゃってるよ！

いつもはもっと手抜きじゃん、河合に食べさせるから？

今ごろ河合も同じの食べてるのかなあ...なんて思いながら食べてたら、マリが話しかけてきた。

「あかりちゃん、なんかヘンだよ？」

「え？ そ、そんなこと、ないよ」

「なんか... 隠してない？」

マリが私の顔を覗き込んだ。

「な、なにも隠してなんかないよ」

目をそらしちゃダメって思うんだけど、つい下向いちゃって...

「あかりちゃん... 中原くんが好きなんですよ」

「えっ、そ、そんな、ことないよ」

「私が中原くんのこと好きだから、だから、遠慮して」

「ち、ちがうって！」

「ほんとのこと言って、でないと... 私も辛いから」

マリはまっすぐ前を向いたまま真剣な顔で言った。

「だって... ヘンだもん... あかりちゃん... 最近ずっと... 感じての...私...
でも... あかりちゃん、何も言ってくれないし... そうなのって辛いよ」

マリは...感じてた...私が...

「中原くんは... あかりちゃんが好きだよ... わかるの...そばにいれば...

あかりちゃんの話しかしないし... 私にも優しくしてくれるけど... でも...

わかるよ、そんなの... そばにいればわかるよ... 好きな人が...

マリの目から涙が溢れてきた。

「好き...な人のことなら...わかるよ...何も言わなくたって...だって...好きだから...
いつも...見てるんだもん...だから...」

「マ...マリ...」

マリが涙で濡れた目でキッと私を睨んだ。

「やめてよね、そういうの、私のためだとか、そういうの、そんなの辛いよ、
好きなら好きって、ハッキリ言ってよ、友だちなのに、友だちだからって、
そんなの、嬉しくない！ みじめだよ！」

「マリ！」

マリは立ち上がると、そのまま校舎の中に走っていった。

涙が出そうになった...けど、泣けない...くちびる噛んで、ギュッと噛んで、
だって、マリが言ったのは全部ほんとのことで、私は、自分の気持ばっかで、
マリの気持ち、考えてなかった、なのに、悲劇のヒロイン面して、自分ばっか
苦しいと思ってて、友だち面して、マリのこと傷つけてた、全部ほんとのこと、
中原くんのこと好きっていうのも、全部ほんとのことなのに...。

私って... 私って、サイテーだ。

お弁当半分も食べずに、昼休み終了のベル、ギリギリに教室に入った。
中原くんの背中もマリの横顔も見れなくて、河合の方を向く気にもなれずに、
ずっと、自分の机の上に視線落として、胸の真ん中が重くて辛くて、
早く授業が終わって、早くここから出ていきたい...!
そればかり考えて一日の授業が終わった。

終業のベルが鳴って、マリの方をチラッと見ると、
私の方は見もしないでサッと教室から出ていった。

胸がヒリヒリして痛くて...鉛みたいな塊が...重たくて...

「山岸」

中原くんがそばに寄ってきた。

「30分から委員会だけど、大丈夫？」

「え...」

行きたくない... こんな気持ちで...

「あの... ごめん... なんかもまだ具合悪くて...」

「そっか、ムリしなくていいよ」

「ごめんね」

「気にするなって」

中原くんが“中原スマイル”で微笑んだ。なんだか胸がズキッとする。

「バス停まで送ってくよ」

「え？ あ、い、いいよ、大丈夫だから」

「話もあるしさ」

「え？」

「行こう」

中原くんがサッと私のカバンを持って先に教室を出た。

話って... なんだろう... 重たい気持ちのまま私も教室を出た。

玄関を出たとき、中原くんが「ちょっとこっちに来て」って、
中庭の方に私を連れていった。
な...なに...? なんか気が重くて... なんか...

いつもマリとお昼を食べる大きな木のそばまで行くと、中原くんが立ち止まった。
「あのさ」

私の方を向いた中原くんの顔は真剣で...

「こんなときに、こんなこと言うのは... どうかと思ったんだけど、でも、
やっぱり、もう言った方がいいなって」

「や、やだ、中原くん、どうしちゃったのお? アハ...アハハ...」

重たい空気が辛くて、ふざけたみたいにそう言うと、
中原くんが困ったみたいな顔で微笑んで、また真剣な顔になった。

「山岸、俺と...つき合ってほしい」

ガーン...

っていう言葉が、なぜか浮かんで、知ってたはずなのに、
私だって中原くんが好きなはずなのに... なぜかショックを受けたみたいに...
いちばん言われたかった言葉のはずなのに、待ってた言葉のはずなのに、
嬉しいのか、悲しいのか、苦しいのか... わかんない...なに...これ...

「ダメ...かな?」

「あ...あの... 私... なんか... あの... ビ、ビックリしちゃって」
なんとか微笑もうとしたけど、ほっぺたが引きつっちゃって...

「だよな」

中原くんがそう言って照れたように頭を掻いて笑った。

なんですぐに返事しないの? 中原くんのが好きなんでしょ?

でも... マリは... マリのことはどうするの...

「あ...あのね... マリ... あの... 私、マ、マリと... ケ、ケンカしちゃって」

「え?」

中原くんがポカンとした顔で聞き返した。

「今日、ちょっとケンカして、マリとケンカしたのって初めてで、

それで、ちょっと、ショックで...」

って、わけわかんないこと言ってるよね、私...。

「あ... ご、ごめんな、そんなときに」

「う、うん、いいの、あの、ありがとう、てか、アハハ、やだ、照れちゃうよ」

そう言って笑うと、中原くんも照れくさそうに笑った。

「なんか、俺もちょっとアセッててさ」

「え？」

「あ、いや、あの返事はすぐじゃなくていいよ」

「う、うん」

「あの、俺のこと...」

中原くんが私の顔を覗き込むようにして言った。

「きれい...じゃ、ない？」

「えっ...」

好き... って、今、言えないよ、だって、言っちゃったら、キマリってことで...

「や、やったあ、アハハ、中原くんたら、照れちゃうってばあ！」

バシバシと中原くんの肩を叩くと、中原くんも真っ赤になって笑った。

好きなのに、好きって言えない、好きだって言われても、素直に喜べない、
苦しいよ、こんなの、苦しくて...泣きたいのに、なんか泣けなくて...

中原くんがバス停まで送ってくれて、バスに乗り込んだ私に手を振って学校へ
戻っていった。どうしたらいいんだろう、私、マリのこと、中原くんのこと、
どうしたらいいの？ 頭の中がボーッとして...

「次は奥野二丁目、奥野二丁目です」

バスのアナウンス、河合の下宿のそばのバス停だなあ...なんて思って、
なぜか、ビーッ！って押して、なぜか、降りてた。

河合の部屋に行っちゃってた

「ど、どした？」

ドアを開けた河合が驚いた顔で私を見た。

「べつに」

私はムスツとした顔のまま。

「なんかあったんか？」

「ベ・つ・にっ！」

「べつにって顔じゃねえぞ？」

「悪かったわねっ！ 生まれつきだよっ！」

「ヒュー、超キゲン悪りい！」

河合はそう言ってゲラゲラ笑った。

「帰る！」

クルッと河合に背を向けた。ここに来た私がバカだった。なんで来たかなあっ!?

「ちょ、ちょい、待てよ！」

河合が私の腕をつかんだ。

「せっかく来たんだからよ、入ってけよ」

「いいよ、もう！ 帰る！」

「いいから入れって」

河合が私をグイッと中に引き入れて、ボタンと戸を閉めた。

「あいかわらず汚ったない部屋！」

「おまえなあ、自分から来といてそれはねえだろお」

河合がそう言って笑った。

「わかった、じゃ、帰る」

「あーっ、スイマセン！ 俺が悪かったっス！ いてください！」

河合は笑いながらそう言って私を座らせた。

なんでここに来ちゃったかなあ、わけわかんない、でも、家に帰って一人でいるのって、なんか耐えらんないって...なんかそう思ったんだもん。

「なんか飲むか？」

「何があるの？」

「そうだなあ」

河合が小さい冷蔵庫を開けて中を覗いた。

「ビールと... この前のおしるこ！」

そう言っておしるこの缶出してニッと笑った。

「どっちもいらない」

「だよな」

そう言って笑ってパタンと冷蔵庫を閉めた。

「てか、ビールってなによおっ!？」

「まあ、いいじゃん、あ、コーヒー入れてやるよ」

そう言うと、冷蔵庫の横のチビっこ〜い食器棚からカップと湯のみを出した。

食器棚の上に置いてあったインスタントコーヒー開けると、

フツて、カップの中に息を吹きかけた。

「今のフツてなに？」

「ゴミついてねえかなあって」

「やったあ！」

「ダーイジョーブだって！」

河合は、サッサとカップと湯のみにコーヒー入れてポットのお湯を入れて、

「砂糖とミルク入れっか？」

「ミルクだけでいい」

粉のミルクをサッサと入れて、カップを私の前に置いた。

「ミルク溶けてないよ」

「はいはい」

食器棚からデッカい「カレー用？」ってスプーン出してかき混ぜた。

「どうぞ、できました」

そう言って笑うと、私の向かい側にあぐらかいて座った。

「んで？ どうした？」

イタズラっぽい目で私を見ながらそう言ってコーヒーすすった。

「どうも...しないけど...」

「けど？」

「い、いいでしょ!? べつに、なにもないよ！」

河合が苦笑いしながら私を見てる。

なにもないわけない...って思ってるよね、あたりまえだよ...ね。

「あ、そうだ、弁当！」

河合が立ち上がって机の上から包みを持ってきた。

「チョー——うまかったぜえ！ 俺、涙出そうになっちゃったもんなあ」

そう言って笑って、私の前に包みを置いた。

「おばさんにお礼言っといってくれよ、チョー——感激してたってよ」

「うん...」

お弁当...昼休み...マリとのケンカ...頭の中をグルグル...

「手作りの弁当なんか食ったの、高校入ってはじめてだよ」

河合が嬉しそうに笑った。

「マリと... ケンカした...」

「え？」

河合の顔を見ると、真剣な目で私を見てた。

「ケンカ...っていうか...マリが...怒って...私が...な、中原くんを...」

チラッと河合を見ると、ちょっとだけ微笑んで...

「おまえが中原が好きだって、わかっちゃったのか？」

なんて答えていいかわかんなくて、思わず目をふせた。

「そっか」

「そういうの...辛って...みじめだって...言って...怒って...私...マリのこと...

傷つけてたんだって...思って...辛いとか思ってたけど...バカみたい...」

「電話しろよ」

「え？」

「山本に電話して話しした方がいくねえ？」

「でも...出てくれないかも...」

「そんなときはそんなときじゃん、あっちもまだ意地になってっかもしんねえけど、

友だちなんだからよ、やっぱ山本だって気にしてっと思うぞ」

「そ...そっかなあ...」

「つうかさ、おまえ、一生懸命やってたじゃん」

「え？」

「裏切れなかったんだろ？ 山本のこと、大切だから、裏切れねえんだよな」

泣きそうになって、まばたきして必死に涙を止めた。

「よしよし、俺がほめてやるよ」

そう言って笑いながら手を伸ばして私の頭をなでた。

「や、やめて...よ...」

そんなことしたら...もっと泣きたくなっちゃうよ...

「なにショッペエ顔してんだよ、ダーイジョーブだって、すぐ仲直りできるって」

「あの...ね、もうひとつ...ある...の」

「え？」

「な...中原...くんが... さっき... つき合ってくれって...」

「えっ...」

河合が一瞬驚いた顔して、それからニコッと笑った。

「よかったじゃん、これでハッキリしたじゃん、なあ？」

「よくないよ、どうしたらいいのかわかんないよ、そんな、マリとのことが...」

「しょうがねえじゃん、中原はおまえが好きなんだからよ」

「でも...」

「中原、とうとう言ったかあ！ いやあ、男らしいっすねえ！」

河合がそう言って笑った。

「ゴチャゴチャ考えねえでさ、好きなら好きでいいじゃん」

「そ、そんな簡単じゃないよ！」

「おまえも中原が好きなんだろ!？」

「そ、そうだけど、でも」

「どうしてえんだよっ!？」

河合の声がイラついて...

「好きなら好きでいいじゃんよ！ 何が簡単じゃねえんだよ!? 好き合ってたろ!？」

「だったらいいいじゃんよ！ んなこと、ここでゴチャゴチャ言われて、俺にどーしろっつうんだよっ!？」

驚いて、河合のいつになくイラついた言葉に、怒ったような言い方に、

「か、帰る」

くちびる噛んで部屋を飛び出した。

「待てよ！」

河合が追いかけてきて私の腕をつかんだ。

「放して！」

「ご、ごめん、悪かった、俺、マジ、悪かった、ごめん」

「なによ!? どうせ私は、くだらないことゴチャゴチャ言って、あんたに関係ない

ことゴチャゴチャ言って、突然来て、悪かったわねっ！」

「ちがうって、マジ、今のは俺が悪いって、ごめん」

「なによ、なんにもわかんなくせに！ 私の気持なんてわかんなくせに！」

「悪かった、マジ、部屋戻ってくれよ」

「帰る！」

「たのむから」

「イヤ！ 帰る！」

「このまま帰らせたなら、俺、ぜってえ後悔すっから、たのむよ」

「あんたが後悔したって、そんなのどーでもいいわよ！」

「わかってるって、わかってるから、入ってくれよ」

突然、私の足が宙に浮いて、

「えっ??」

河合が私のこと抱き上げて、

「ちょ、ちょっと、な、なにすんのよおおっ!？」

河合は私を抱き上げたまま、部屋に戻ってボタンと戸を閉めた。

「なにすんのぉっ!? 降ろして! 降ろしてってば!」

「逃げねえか？」

「な、なによ!? 逃げるってどういう意味よっ!？」

「逃げねえって約束したら降ろす」

「バツ・バツ・バツカじゃないっ!？」

「いいから、約束!」

「わ、わかったからああっ! 降ろして!」

「おっし、約束な」

河合は無理やり私の小指に自分の小指からませて、それからやっと私を降ろした。

「バ、バカみたい! なによこれ!」

「ごめん、こんくらいしねえと、おまえ、ぜってえ帰っちまうと思ったからよ」

「あ、あんたが、あんなこと言うからでしょ!？」

「はい、そうっス、俺が悪いっス」

河合がペコペコと頭を下げた。

「あ、あんたなんか、なんにもわかってないくせに!」

「はい」

「わ、私が中原くんにつき合ってくれて言われて喜んでると思ってんの？」

「え？」

「好きな人につき合ってくれて言われて嬉しくないわけないって思ってるの？」

「そりゃ…」

「私はねっ、つき合ってくれて言われて、ガーンって思ったのっ!」

「ハ？」

「ガーンだよ、ガーン! ショック浮けたときのガーン!

ガーンって思った 自分がショックだったよ!」

「クッ…」

河合が嘔き出しそうになった。

「な、なによ! 何がおかしいの!？」

「いや、おかしくないっス」

河合がマジメな顔して見せたのが余計に腹が立つううっ!

「こんなのサイテーだよ! 好きな人につき合ってくれて言われてショック 受けるなんて、嬉しいと思えないなんて、サイテーだよ!」

河合は黙って私の顔を見ていた。

「だって、わけわかんないだもん! どうしていいのかわかんないよ!

マリのこととか、いろいろ頭の中ゴチャゴチャになっちゃって、

どうしていいかわかんなくなっちゃったんだもん！」

「そっか...」

河合の顔は優しくて...

「バス停まで送ってくれて、バスに乗って、だけど、なんかもう、耐えらんなくて一人でいたくなくて、なんか、わかんないけど、なんか、わかんないのに、バス降りちゃって、なんか、わかんないけど、ここに来ちゃったんだもん！」

河合が、泣きそうな笑いそうな顔して、そして、私のこと抱きしめた。

「な、なによ!？」

「ったく、おまえはよお！」

「わ、悪い？」

「悪くねえよ、ぜんぜん...悪くねえ」

河合は私のこと抱きしめたまま、優しく私の頭をなでた。

「や...やめて...よ、そんな...こと...」

ノドのところが痛い...ガマンしてた涙が...

「そんなこと...したら...泣きたくなっちゃう...よ...」

「泣けよ」

「やだ...あんたの前でなんか...ぜったい...泣きたく...ない」のに...

涙が溢れて...止まらなくなっちゃって...だって...河合の腕の中...あったかくて...
なんか...ホッとして...もっと泣きたくなっちゃって...私は声をあげて泣いた。

いっぱいいっぱい泣いて、泣き疲れて、涙が止まっても、私はまだ河合の腕の中にいた。
身体力が抜けちゃって、ダラ〜ンって河合に寄りかかっていた。
泣いてる間、河合はずっと私の頭をなでてくれて、だから私、子どもみたいに
わんわん泣いちゃって、なんか恥かしくて顔上げられないよお。
それに、河合に抱っこされてるとホッとしちゃって、なんか安心しちゃって、
なんだろ...こいつ...ヘンなの...ヘン...だよ...ね。

「靖男ちゃ〜ん！」

パッと、二人同時に反射的に離れた。

「は、は、はい」

河合が戸を開けると太ったおばさんが顔を覗かせた。

「あれれ、お客さんかい？」

「え、あ、は、はい」

「この荷物さあ、あんたん家から届いてたんだよ」

おばさんはそう言ってダンボールをズルズルと引きずって部屋の中に入れた。

「あ、すいませ〜ん」

おばさんが河合と私の顔をチラチラ見てニヤニヤ笑った。

「靖男ちゃん、ガールフレンドかい？」

「え、あ、や」

河合がチラッと私の顔見て、

「と、友だちっス」

「いいねえ、若いってさあ、ガハハハ」

あれ...？　なんか...私...

「あ、おばさん、ちょっと待っててよ」

河合がパリパリッとダンボールのガムテ剥がした。

友だち...って、河合が言って...　なんで...ちょっと...

「あ、やっぱ、野菜だよ」

河合が箱の中から大根やニンジンやじゃがいも引っ張り出して、

「おばさん、少しだけどさ」

そう言ってコンビニのビニール袋に入れて渡した。

「あらあ、いつも悪いねえ」

バカじゃない!?　友だちだから友だちでいいんじゃない!

パタンって戸が閉まって、また二人。

チラッと河合を見ると、河合もチラッと私を見てた。

「あ、あの、私、帰るね」

「そ、そっか、あっ、おまえも持ってけよ」

河合がそう言って大根持ち上げた。

「えっ、い、いいよ」

「持ってけて、俺ん家の野菜はうめえんだぞお」

河合はそう言ってコンビニの袋に大根やじゃがいもをゴソゴソ詰め込んだ。

「そんなにいっぱい、重くて持てないよお」

「んじゃ、チャリで送ってやるよ」

「え、い、いいよ」

「バーカ、遠慮すんなよ、似合わねえって」

河合がそう言って笑った。

「似合わないってなによっ!?」

「アハハ！ 行くど！」

河合が野菜の入った袋にお弁当の包み入れて、私の手をひいて部屋を出た。

野菜と私のカバンと私を積んで、河合の自転車が夕暮れの町を走る。

河合の腰に腕をまわして、河合の背中にほっぺたくっつけてると、ヘンなの、
なんでこんなにホッとするんだろう。マリのことや中原くんのことを、
そういう重たかった気持ちが、なんかこうしてると楽になってる。ヘンなの。

河合の自転車が私のマンションの前にスーッと止まった。

「ありがとう」って、自転車降りると、

「上まで持ってってやっか？」と、河合が野菜の袋を持ち上げて言った。

「え、あ... うん」

なんか...まだ離れたくなくて、うん...って、言っっちゃった。

なんだろう、私、気が弱くなってんのかなあ。

マンションの階段を、河合は野菜の袋持って、黙って私の横に並んで上ってる。

なに？ なんで黙ってんの？ いつもならベラベラしゃべるくせに。

そんなこと思いながら上ってたら、もうウチの前に着いた。

「んじゃ！」

河合が野菜の入った袋を私に渡して階段の方に、

「あ、ま、待って」

振り向いた河合に、私、なに言おうとしたの？

「あ、あの、よ、寄ってく？」

「え？」

「あの、ご、ごはん、食べてく？」

言いたかったのはそんなことじゃなくて...

「連チャンはやバイベ」

河合がそう言って笑った。

「そ、そんなことないよ」

「今日はいいよ、サンキューな」

そう言って階段を下りようとする河合を、思わず追いかけてた。

「な、なんだよ？」

「え、あ、し、下まで... 送る」

河合がフツて苦笑いした。

「おまえ、それよか早く山本に電話してやれよ」

「え？」

「あいつも今ごろ、おまえみたく悩んでんじゃねえの？」

「そ...そうかなあ...」

そうか...河合は...マリが好き...だったんだっけ...

「か、河合がかけてあげれば？」

「ハ？」

「マリのこと... 心配なんでしょ？」

「バーカ、そういうんじゃねえよ」

河合がそう言って笑った...けど...さ。

「だって、河合、マリのこと...好き...なんでしょ？」

「ちげーよ」

「だって、マリの写真持ってるじゃん」

「え？」

「ほら、あの春の研修旅行の」

「あっ、バ、バカ、おまえ、いつ見たんだよっ!？」

河合の顔が赤くなった。やっぱり...か。

なに... 私... なんで... お腹のとこの力が... 抜けて...

「あ、あれは、ちがうかな、あれは、なんつうか」

「マりに言わないの？」

「な、なにをだよ？」

「好きって」

河合がフーッて大きく息を吐いた。

「おまえなあ、人の心配してるヒマがあったら、中原のことちゃんとしてやれよ」

「ちゃ、ちゃんとして、なによ？」

「好きなんだろ？」

「え...そ...そう...だけど...」

だけど...

「すっげー勇気だよなあ、おまえにコクるなんてよ、決死の覚悟っスね」

河合がそう言って笑った。

「け、決死って、どういう意味よ？」

「ヘタすりゃ殴られっかもしんねえじゃん」

「そ、そんなことしないわよっ！」

「アハハ」

河合の笑い顔が、急にまじめな顔になって...

「あいつは男らしいよ、すげえよ、負けた！って気いしたもんな」

そう言って淋しそうに笑った。

「河合は... 言わないの？」

河合が私の顔をチラッと見て、

「言いてえよ」

淋しそうな顔...

「つかさ、言ってんだよ、こん中ではさ」

そう言って自分の胸を指差した。

「何回も、何百回も、一万回も！ とっころが通じねえんだなあ、これが！」

ふざけたみたいにそう言って笑った。

「ったりまえじゃん！ 口で言わなきゃわかんないよ！」

「だよな！ アハハハハ」

そんなに... 何百回も、一万回も... マリのこと... 好きなんだ...

「んじゃな！」

そう言って階段を駆け下りていく河合の後ろ姿見ながら...

なんで...胸の真ん中...スースーするの...？

その夜は、結局マリに電話しなかった...できなかった...

なんとなく、マリが遠く感じて、河合が遠く感じて、できなかった。

マリと仲直りしたけど・・・

朝、キッチンでトースト食べてると、

「あかり、今日の晩ご飯に河合くん連れてらっしゃいよ」

「な、なんでよ？」

「昨日もらったお野菜でいろいろ作ってあげようと思ってね。

だって、男の子じゃ大根の煮付けなんて作れないでしょ？」

「そ、そんなのいいよ、連れてこないからね」

「なんでよお、この前だって喜んでたじゃない！ お母さん嬉しくなっちゃった！

男の子っていいわあ、食べっぷりよくて気持ちいいわよね」

「あのね！ 河合はマリが好きなの！」

「え？」

「ここに来たって嬉しくなんかないんだよ！」

「河合くんって、あんたのボーイフレンドじゃないの？」

「ち・が・い・ま・すっ！」

「あ...らあああ」

「いってきます」

驚いてるお母さん残して家を飛び出した。

マンションの玄関出て...も、いるわけないよね。ったりまえじゃん。

ガランとした玄関前を横切ってバス停に走った。

朝の教室、騒々しくて、なんかイライラしちゃう。

チラッとマリの机の方を見ると、あ... 河合と何かしゃべってる。

楽しそうに...二人で笑いながら... ふうん、いいけど。てか、よかったじゃん。

河合もやっと勇気出してきたんじゃない。関係ないけど。

「山岸、おはよう」

あっ... 中原くん...

「お、おはよう」

チラッと河合の方を見ると、河合もこっちを見てた。な、なにさ、あんたはマリと楽しくしゃべってればいいじゃん。私は、中原くんが好き...なんだから。

「な、中原くん、昨日の返事なんだけどね」

「えっ、こ、ここで？」

「え？ ダ、ダメ？」

「え、あ、い、いいけど…」

中原くんが目だけキョロキョロした周りを見た。

「や、やめとく？」

「え、あ、いや、いいよ」

中原くんが静かにフーッと息を吐いた。

「OKだよ」

中原くんが目を大きく見開いた。

「マジ？」

「うん」

「そ、そうか」

そう言って照れくさそうに微笑んだ。

これだよ、これ！“中原スマイル”！

私は中原くんが好きだったんだからさ、何グチャグチャ考えてたのよ！？

考える必要ないじゃん、ないよね…って、誰を納得させようとしてんの、私？

「よろしくお願いしまーす」

「あ、こ、こっちこそ、よろしく」

中原くんが照れくさそうに頭を掻いた。

チラッと河合の方を見ると、あ… いない。なんだ…って、何が“なんだ”よ？

いいじゃん、べつに、関係ないよ、そうだよ、もう河合もマリも関係ないよ！

私は私の道を行くっつうの！ フン！

昼休み。あ～あ、なんでだか、またここに来ちゃったなあって、

一人で中庭の大きな木の根元に腰を下ろした。

だって… なんか教室にいたくなかった。

なんか… なんで… ブルーかかってんの？

中原くんにOKして、両思いつてことになって、よかったじゃん？

よかったのに…ブルー… なんで？

マリのこと？ まだ気兼ねしてる？ ちがう…なんか…ちがう…

「あ…あかり…ちゃん」

顔を上げると、マリが困ったような泣きそうな顔で立っていた。

「あ... な...なに？」

「あの... い、一緒に... 食べても...いい？」

そう言ってお弁当の包みをかかげて見せた。

「え... あ... うん」

マリが私のとなりに座る。な...なんだ？ どうして？

「あかりちゃん... あの... 昨日は... ごめんね」

「え... あ... う、ううん」

「怒ってる...よ...ね？」

「え、う、ううん」

「私ね... あかりちゃんに... ひどいこと言ったなって... すごい後悔して...」

「そ、そんなこと... ないよ、だって、だって...ほんとのこと...だったから...」

「ううん、ひどいこと言っちゃった、あかりちゃん、私のためにいろいろしてくれたのに、私ったら、あんなこと言って」

「だって、マリの言ったとおりになんでも、私も... マリのこと傷つけてたの知らなくて、自分一人が辛いみたいにさ」

「あかりちゃん、私、応援する」

「え？」

「中原くんとつき合うことになったんでしょ？」

「えっ!？」

「さっき、中原くんが、河合くんに言ってるの、聞いちゃったの」

マリがそう言って微笑んだ。

「そ...そう...」

言ったんだ... 河合に... いいけど...

「私はもう平気だから、ほんとにもう大丈夫だから、あかりちゃんの応援する」

マリがそう言ってニッコリ笑った。

「でも... マリは、中原くんのこと...」

「うん... まだ...好きだけど、でも、しょうがないよ」

マリはそう言って淋しそうに笑った。

「それより私、あかりちゃんと友だちでいたいもん」

「うん...私も... マリとあのままっていうの、なんかすごいイヤだなって...」

「私ね、ゆうべ...河合くん電話したの」

「えっ!？」

「あかりちゃんに、あんなこと言っちゃって、なんかすごくイヤな気持ちで、あかりちゃんに電話しようかなあって... でも... できなくて...」

マリが...河合に電話... いいけど。

「私、他の友だちっていないし、それで、河合くんしか思い浮かばなくて...」
マリがそう言ってウフフと笑った。

“河合くんしか”...か、いいけど。てか、よかったじゃん、河合、チャンスだよ。
そう思いながら... なに...私...なんか...ヘンな気持...なぜ...

「河合くんがね、『あいつはマリちゃんのこと大切に思ってるぞ』って、
『今ごろ仲直りしたくて泣いてんじゃねえの?』って、ウフフ」
「な、泣いては...ないけど...さ」
なにが“泣いてる”よ!? あれは...ちがうつつうの!
「だよね、あかりちゃんはしっかりしてるから、私みたいに泣き虫じゃないもん」
マリがそう言って笑った。
「河合くんにはいっぱい励ましてもらったら、なんか気持ちが楽になって、
私の方から謝ろうって...そう思えたの」

ふ～ん、河合、がんばったわけだ！ いいけど！

「河合くんて、優しいよね」
「そ、そうかなあ」
マリには“特別”なだけだよ...!
「私も河合くんておもしろいだけかなあって思ってたの、だって、ほら、
あかりちゃんと河合くんがしゃべっていると漫才みたいでおもしろいんだもん」
「ま、漫才いいっ!？」
「ウフフ、なんか息がピッタリってカンジで」
「や、やめてよ！ 私は、あんなやつ、キライ！」
「え？」
「私は河合なんて大キライなの！」
「あっ」って、マリがヒジで私をつついた。
「え？」って、見ると、あっ... 河合...！ 聞いて...た...今の...キライって...
「なんだよお、もう仲直りしてんじゃ～ん」
河合はニヤニヤしながらそう言った。
「河合くんのおかげなの、ありがとう」
「あ、やっぱ？ ク～ッ、俺ってかっこいい！」
ふざけてる河合を見ると、ムカムカして...
「あ、そうだ、山岸」

“山岸”？ “あかり”じゃなく...て？

いつもは“あかり”って呼び捨てにしてたくせに...

「中原が探してたぞ」

私はムスツとした顔でチラッと河合を見て、フンッて立ち上がった。

あ... マリ... 振り返ると、マリがちょっと淋しそうな顔で微笑んだ。

なんか...だって...ね、マリだって、まだ中原くんのこと...

「い、いいや、あとで」

また座りなおそうとしたら、スッと河合がマリのとなりに座った。

「早く行けよ」

「な、なによっ!? あんたに関係ないでしょ!？」

「関係ないんすけどね、中原が山岸を探してくれつつうもんでね」

また“山岸”... いいけどおっ!

「って、パシリじゃん、俺! ブァッハハハ」

笑ってる河合の顔が、なんか、すごいムカつく。

「あっ、マリちゃんの弁当うつまそー! 卵焼き食っていい?」

「うん、いいよ」

やってろっ! そうよ、あんたなんて、マリのお弁当食べてりゃていいのよ!

もう二度とうちのお母さんのお弁当なんか食べさせてやんないよっ!

フーーーーンッだっ!

中原くんが私を探してたのは、今日、臨時の委員会があるって言いたかったかららしい。

そんなことわざわざ河合使ってまで私のこと探して言うようなことじゃないじゃん!

...って、おいおい、中原くんは仮にも、あ、仮じゃなくて、ちゃんと私の“カレシ”なんだから。

カレシ...なんだよ...ね、中原くんが私のカレシ...

どうもピンとこない...って、なに言ってんのよ!?

だいたいさあ、中原くんがカレシなんてサイコーじゃん!

かっこいいし、頭いいし、性格いいしで、モテモテなやつがカレシだよ?

私って超ラッキーじゃん! そうだよ! そう...

そうだよ...ね。

帰りの学活が終わって、チラッと河合の方を見ると、

マリと楽しそうにしゃべりながら教室を出ていった。

いいけど、べつに、関係ないよ、てか、なに？

なんでそんな急接近なわけ？ ジャマ者がいなくなったから、マリに近づけるってわけ？

ってことは、なによ、私ってジャマだったわけ？

だから、私に優しくして、なぐさめたりなんかして、中原くんにつき合うようにして、

それで、ジャマな私を追っ払ったってこと？ そうかも...そうだよ。

いいけど！ いいよ、ぜんぜん、関係ないよ、あいつがマリとどうなろうと、

私に関係ないもん！ 私は中原くんが好きなんだから！

「山岸、行こうか」

「うん」

“カレシ”の中原くんにとびっきりの笑顔で返事した。

委員会が終わって、中原くんが「一緒に帰ろう」と言った。いよいよ二人きり！

って、一緒に帰るだけなんだけどさ。

中原くんのピカピカのシルバーの自転車。やっぱこうでなくちゃ！

あいつのなんて、サビサビのボロボロのガタガタでさ、あんなの乗りたくないよ！

もう...乗ることない...けどさ...

中原くんの腰に腕をまわすと、ほのかにコロンのいい香り。さっすが中原くんだよな！

あいつなんて、なんていうの？

男くさい？ 汗くさい？ てか、くさい！ 中原くんの背中にほっぺたつけて...

なんか...ちがう...あいつと...って、あたりまえだよ！ 中原くんなんだから！

あいつじゃないんだから！ 私が好きなのは、中原くんなんだから！

中原くんの腰にまわしていた腕にギュッと力を入れた。だって、なんか、

そうしないと、自分の気持ちがどこかに飛んでっちゃんいそうで... どこかって...

どこ？

わかんないけど...

気づいちゃった・・・！

うちのマンションの前。

「あの、中原くん、ご、ごはん、食べてく？」

「え？」

なんとなく...中原くんに悪くて...何が悪いんだかわかんないけど、
ごはん食べてく？なんて誘ってた。

「送ってもらったし、遅くなっちゃったから」

「また今度にするよ、突然だと悪いしさ」

あいつは、突然だろうと平気な顔して、フツツーにごはん食べてったけどね。

「そ、そうだよ、突然...だったよね、アハハ」

あいつは...今ごろ何食べてんだろ...って、関係ないよ！

キッチンのテーブルの上に山のようにおかずがいっぱい！

「なにこれえっ!？」

「あら、おかえりい」

「こーんなにいっぱい、誰か来るのお？」

「それがねえ、ほら、河合くんからもらった野菜で作ったんだけどね、
河合くんが来ると思って張り切って作りすぎちゃったのよ」

「来ないって言ったじゃん！」

「そうなのよお、すっかり忘れてたのよお、困ったわね、お父さんも今夜は
ごはんいらないって言うし」

「明日また食べればいいじゃん」

「そうなんだけどね、できたて食べてもらいたいじゃない？」

「しょうがないじゃん！ 作りすぎたのが悪いんだよ」

「あっ、河合くん、今から呼んだら？」

「な、なんでよっ!？ 来ないよ！」

「あらあ、どうして？ いつでも来るって言ってたじゃない？」

「だからあっ！ 河合は...」

マリが好きなんだから... 私の家なんか、もう来ないよ。

「来るかもしれないでしょ？」

「あ——っも——っ！ それじゃ持ってく！」

「え？」

「河合に持ってくよ！」

「今から？」

「今から呼べって言ったんだから、今から持ってたって同じだよ！」

「まあ、そうねえ」

まったく、お母さんってバッカじゃない!? こんなに作っちゃってさ!

来ないって言ったのにさ! 来るわけないのにさ!

プリプリしながら、お母さんがタッパーに詰めたおかず持って家を出た。

バッカじゃない!? なんで私も河合に持ってくなんて言ったかなあっ!?

なんで河合の家に向かっているかなあっ!?

こんな時間にタッパー持ってバスに乗ってる私...って、バッカじゃない!?

河合の部屋の前。ポロッチい木の戸を睨んで、なんでドキドキしてんの!?

ノックしなきゃ、早くしなさいよ、なんでしないかなあ、するよ! コンコン

「あ〜い」

か、河合の声だ! って、あたりまえだけど。ガチャッて戸が開いて、

「え？」

河合が驚いた顔して私を見た。

「どした？」

べ、べつに...って言おうとして、バカじゃない? おかず持ってきたんじゃん!

「これ！」

私はムスツとした顔で河合にタッパーの入った袋を差し出した。

「お、お母さんが、あんたにもらった野菜でおかず作りすぎちゃって、

お父さんも今日は帰ってこないから、すっごい困って、あんたに持ってけて、

すっごいうるさいから、持ってきた、だけ」

「あ、サ、サンキュ」

いつもみたいに無条件に嬉しそうな顔...じゃない。いいけど。

「それじゃ」

「あ、うん、おばさんにお礼言っといってくれよ」

「わかった」

クルッと背を向けると、パタンって戸が閉まる音、え？

振り返ると、やっぱり戸は閉まってて、それだけ？ それだけ...なの？ い、いいけど。

河合の下宿の裏の自転車置き場。河合のボロッちい自転車がある。

なんとなく...そばに寄って、なんとなく...荷台に手を置いた。

ここに座ることは...もうないんだよね...あたりまえだけど...

もうここには、きっとマリが座るようになって... 関係ないけど... いいけど...

「なにしてんだよ？」

ギクッ！

振り向くと、か、河合が立ってた...！

い、いつからいたの？ ず、ずっと見てた？ や、やだ、

「べ、べつに、あいかわらずボロッちいなと思ってみてただけだよ」

「おまえ、俺の愛車をボロって言うなよなあ」

河合が大げさに情けない顔して笑った。

「あ、あんたこそ、なによ？」

「送ってくよ」

「え？」

「乗れよ」

河合がそう言いながら、自転車のカギを外した。

ど...どうして？ さっきはあんなにそっけなくパタンッて戸を閉めたじゃない...

「早く乗れって」

「あ...う...うん」

なんだか...わかんない...私も...なんで素直に河合の後ろに乗って...

河合の腰に手をまわすのが、ドキドキして、ぎこちなく河合の背中にほっぺたつけると、

胸がギュツと痛くて、苦しくて、なんで泣きたい気持ちになるの？

だって...河合の背中があったかくて、すごくあったかくて、ずっとこうしていたくなって、

離れたくなくて、離れたくない、河合と、河合のそばにいたい、バカだ、

私、バカだ、今ごろ気がついて...

私、河合が... 好き... 好きなんだ...!

河合の背中で、こらえようと思っても、涙が出てきて、身体が震えて、
一生懸命声を押し殺しても、涙だけは止まらなくて、河合のシャツを濡らしてた。

ぐちゃぐちゃな気持ち

河合の自転車がマンションの前にスーッと止まった...と同時に、荷台から降りて
「さよなら」

河合に顔見られないように、そのままマンションの中に駆け込んだ。

うちのドア開けて、そのまま部屋に直行してボタンってカギ閉めた。

「バカだ...」

ドスンってベッドに倒れこんだ。

「バカバカバカバカバカ」

枕たたいて足バタバタさせても、どーにもならないこの気持ち...!

バカだ、私って、チョー——バカだあああ!

なんで河合なんか好きになっちゃったかなあっ!?じゃなくて、なんで今ごろ、
なんで、なんで、なんでよおおっ!? もう遅いじゃん! てか、遅すぎじゃん!
てか、なんで今まで気がつかなかったかなあっ!? だってさあ、ぜんぜんそういう
相手と思ってなかったし、そういうカンジじゃなかったし、じゃ、なんで好きになったの?
わかんないよお、だけど、好きって思ったんだもん、さっき、てか、勘違いってことない?
バカじゃない!? なわけないじゃん! そんなくらい自分でわかるよ。

じゃあ、どうして今まで気づかなかったんだよお!? だって私、
中原くんのが好きなんだって思ってたし、マリのことあったし、河合はマリ...
そうだよ... 河合はマリが好きなんだよ... わかってたじゃん... そんなこと...
マリと一緒にいて楽しそうにしてたじゃん... だから... 私... 嫉妬してたんだ...
マリに... 可愛くて女らしくて、男の子の好きになるタイプ... マリに...

マリ... 小さくて可愛くて、男の子なら誰でも好きになるような女の子...
いつも...羨ましいって思った...だけど...今くらい羨ましいって思ったことない...

河合が心の中で“何回も、何百回も、一万回も好き”って言ってるのは...マリ。
河合が好きなのは...小さくい可愛い...私とは正反対の女の子...だから。

「あかり？」

お母さんの声。

「な、なに？」

あわてて涙を拭いた。

「ごはん食べないの？」

「いない...」

「なに言ってるの！ あら、カギかけてるの？」

「い、今、着替えてるから、あとで行くってば」

「早くしなさいよ」

「わかってるよ」

ハァ〜、ゆっくり考えごともできないよ、河合みたいに一人暮らししたい...

河合の部屋が浮かんで... ああ、もうヤメよう！ プルプルッて頭振って、制服脱いでクローゼット開けると、あ... 真っ赤な“Funky Monkey Baby”のTシャツとボロっちいスタジャンがきれいにたたんで置いてあった。

返すの忘れてた... どうしよう... 明日学校持っていく？ それとも、また河合の家に... そしたら、またさっきみたいに、そっけない態度で、パタンッて戸を閉めるかな... なんか河合の部屋が遠くて... 河合が遠くて... もうそばにいけない... そんな気がしてやっぱ学校で渡そう、手提げにTシャツとスタジャン詰めて部屋を出た。

お母さんが作った大根の煮付け、河合の家の大根、河合も今ごろ食べてるかな、どんなこと考えながら食べてるの、何も考えてない？ だろうね。

「どうだった？」

「何が？」

「河合くんよ、喜んでた？」

「え... ああ... お母さんにお礼言っといってくれって」

「そう、また作ってあげなきゃ」

お母さんがニコニコしながら言った。

「もういいよ！ 河合に作らなくていいからね！」

「あらあ、どうして？ 喜んでたんでしょ？」

「どうだかね」

「なによお、ケンカでもしたの？」

お母さんがからかうような顔でそう言った。

「ち、ちがうよ」

「あっ、そういえば、あんたが出かけてるときに何回も携帯鳴ってたわよ」

「え？」

「よっぽど出てあげようかと思ったんだけどね」

「出、出ないでよ！」

「そう言うと思って出なかったわよ」

お母さんがちょっとムツとした顔で言った。

「まったく今の子は携帯携帯って、そんなに話すことあるのかしら」

「ごちそうさま！」

お皿を流しに置いて、部屋に入った。

机の上の携帯にはメールのマーク。

受信履歴をピッと押すと、中原くんと、マリ...か。

そういえば...河合から電話やメールが来たことって一回もないじゃん。

受信履歴下げて...中原・中原・マリ・マリ・中原・中原... あっ、あった。

『マリちゃん無事帰宅！ 安心しろ』

ああ... マリが貧血起こして、河合が家まで送って、そのときの... だよな、

やっぱ、マリなんだよ。あのときから、きっとその前から、ずっと...マリ。

ピピピッと、新しい受信履歴を開けて、

『今日はありがとう！ 山岸がOKしてくれて嬉しかった』

中原くんだ。返信ピッ。

『m(_ _)m ゴメン!! キャンセル!』

な～んて送れるわけないじゃん。ピッとクリア。次！

『あかりちゃんと仲直りできてよかった！ ほんとにごめんね。』

私、もう少しで 大切な友だちなくすところだった。これからも友だちでいてね』

マリ...か、返信ピッ。

『マリーー！(T_T)助けてええ！ 私が好きなのは中原くんじゃなかったのお！』

河合なのおっ！ でも、河合はマリが好きなのおっ！ どーしよおお!?!』

どうもできないよ。

新規作成ピッ。

『好き』

誰に送るの？ 電話帳登録の中...河合靖男...ここを押せば...

『私は河合が好き』

言いたい言葉、言えない言葉、送れない言葉。

携帯があったって言えないことがあるんだよ、言いたいのと言えないんだよ、

いちばん言いたいことを、いちばん言いたい人に送れないんだよ。

ピッ。電源切ってベッドの上に放り投げた。

朝が来て、いつもどーりに顔洗って、いつもどーりに制服着て、
いつもどーりにモソモソしたトースト食べて、

「フウ〜...」

「なあに？ 朝からため息なんかついちゃって！」

ため息くらい好きにつかせてよ！

「いってきま〜す」

いつもどーりに家を出た。

いつもどーりの朝の教室の喧騒の中、ドスンと机の上にカバン置いて、

「あかりちゃん、おはよう」

マリはいつもどーり可愛くて、

「山岸、おはよう」

中原くんはいつもどーりかっこよくて、

いつもどーりベルが鳴って、

「おお、セーフ！」

河合がいつもどーりに駆け込んできて、

私だけ、“いつもどーり”じゃないんだよ...！

「フウ〜...」って、ため息ついて、いつもどーり朝の学活が始まった。

昼休み。

まだ昼休みだよお。

午前の授業、ほとんど聞いてなかった。

身体はここにあるのに、意識がビリッビリ河合の方にいっちゃって、

なんかもう疲れちゃったよ。

「あかりちゃん、なんか雨が降ってきそうだから、今日は中で食べない？」

お弁当持って中庭に行こうとしたらマリが言った。

「いいけど...」

教室は...河合もいるんだよね...

ヨイッショッて、マリと机くっつけてたら、

「めずらしいね」

中原くんがそばに来た。

「俺も一緒に食べていい？」

「うん」って、返事したのはマリ！ おいおいおい、いいわけええ??

「河合！ おまえもこっち来ないか？」

ヤ・メ・テ———！

「なんだよ、委員会でもやんのかよ」

河合がそう言って笑いながらそばに来た。か、顔見れない...

4つ机くっつけて、私のとなりに中原くん、マリのとなりに河合。

な、なんなんだ、この人間相関図...！ あ、汗出てきちゃった...

私とマリと中原くんはお弁当、河合はパン2個と牛乳。

「河合、この前弁当持ってきてただろ？」

ギク———ッ！

「ああ」

河合はへーきな顔でパクッとパンをかじってる。

「あれって、誰に作ってもらったんだよ？」

聞かないでええええええっ！

「ああ、あれは... 下宿のおばさんだよ」

え... あ... そ...

お母さん、下宿のおばさん扱いされてま〜す。いいけど...さ。

「ほんとはカノジョじゃないのか？」

な、中原くん、なんでそんなに突っ込むかなあっ!?

「え？ 河合くんってカノジョがいるの？」

マ、マリ、いいから、そんなこと聞かないでお弁当食べてなさいよ！

「いないんすよお、俺ってチョー淋しい男なんすよお」

笑いながらそんなこと言ってる相手が...河合の好きなマリで...

そして、私は河合が好きで...なのに、中原くんとつき合うって言っちゃって... サイトー。

お弁当の中、じゃがいもの煮ころがし...河合からもらったじゃがいも...

私のお弁当の中には“河合”がいるのに...

「山岸、どうしたの？」

「え？」

「ぜんぜん食べてないじゃん」

「あ... ちょ、ちょっと、食欲なくて...」

「大丈夫か？」

「う、うん」

お弁当のフタ閉じようとしたら、

「あ、もったいねえ、俺食ってやるよ」

河合が指でじゃがいもの煮っころがしをつかんでパクッ。

「うっめえ！」

あたりまえだよ、あんたん家のじゃがいもで、あんたにもらって、なんで、こんなときに、そんなことするの、なんでもないみたいに、ふつうに、やだ、なに、涙が出てきちゃったよお。

「えっ、あっ、な、なんで泣くんだよ？」

河合が驚いた顔して、

「あかりちゃん、どうしたの？」

マリも心配した顔して、

「河合が食ったからか？」

中原くん、ちがうってば！

「エッ!? お、俺？」

ち・が・うってばあっ...てか、そうだよ！

「い、いも食ったくれえで泣くなよお」

“いも食ったくらい”じゃないんだもん！

「か、河合、あやまれよ」

「えっ、あ、ご、ごめん...な」

だからあっ、ちがうんだってばあああ。

「山岸、もう泣かないで」

中原くんがそっと私の肩に手を置いた。

「な...中原くん...ごめん...ね...」

涙がまたいっぱい出てきちゃって...

「な、なんで俺にあやまるんだよ？」

中原くんは苦笑いしてるけど...だって...私...河合が好きで...

「ご、ごめん、私...」

そのまま席を立って教室を飛び出した。

中庭の大きな木の根元。空を見上げると、雨が降りそうで降らない、中途半端な天気、中途半端な気持ち、中途半端な私....。

あ————っ恥かしいiiiiiiiiっ。なんであんなとこで泣いちゃったかなあっ!?

みんな、私が、河合にイモ食べられて泣いたって思ってるよおおお。

ちがうのにiiiiii。でも、言えないiiiiiiii。

恥かしくて教室に戻れないよおお、どーしよおおお...

「あかりちゃん」

顔を上げるとマリがこっちに走ってきた。

「大丈夫？」

「う、うん」

よかった... マリで... ちょっとホッとして... でも、ちょっとガッカリしてる...

なにを期待してたの、私...？

「さっきは、どうしたの？」

マリが私のとなりに腰をおろした。

「え... だ...だから...河合が...私のイモを食べて...」

「ウソでしょ」

マリがそう言って笑った。

「ウソ...だけど...」

「ねえ、何があったの？ 私には言えない？」

「え...」

言いたい、全部言っちゃいたい、でも、言えない、ぜったい言えない...！

「あかりちゃん、前はなんでも言ってくれたじゃない、私もなんでも言ってたし、

でも、最近何も言ってくれなくなっちゃたね」

「え...そ、そんなこと...」

「私ね、ほら、あかりちゃんとケンカして、ていうか、そのちょっと前から、

なんか私もあかりちゃんもお互い、思ってること、っていうか、

ほんとの気持ち言わなくなっちゃった気がして、それが苦しくて、

なんかモヤモヤって、そういうのイヤだった」

「ご、ごめん...ね」

「ちがうの、あかりちゃんのこと責めてるんじゃないの、私もだったから、

あかりちゃんが中原くんのこと好きで、中原くんもあかりちゃんのこと

好きみたいって、なんとなく気づいてたのに、言えなくて、

言うのが怖かって いうか、言ったら...」

マリの声がちょっと涙声になって、

「でも、言ってよかった、サッパリしたもん」

そう言ってウフフツて笑った。

「ごめんね...マリ...」

「やだあ、謝らないでよお、だってしょうがないじゃない、あかりちゃんだって

悩んだんでしょ、私のこと大切に思ってくれたから、言えなかったんだよね、

河合くんと言われて、ほんとにそうだなあって」

「河合が...好き...」

「好きっていうか、いい人だなあって思ったよ、ただおもしろいだけじゃ」

「ちがうの」

「え？」

マリが私の顔覗き込んで、私はマリの顔見ながら...どうしよう...言いたい...でも...

「あかりちゃん、なあに？ 言って」

「マリ...言ったら...軽蔑する...ううん...もう二度と口聞いてくれないかも...」

「な、なあに？ どういうこと？」

「わ、私...どうしよう...サイテー...」

「なあに？ 言って、言ってくれなきゃわからないよ」

「わ...私...ね、す...好きな人がいるの」

「うん、中原くんでしょ？」

「ち、ちがうの」

「エッ!？」

マリが大きな声で驚いて、あわてて口に手をあてた。

「だ、だれ？」

「そ...それが... あの... そいつは...」

マリをチラッと見ると、真剣な顔で聞いていた。

「ていうか、そいつを好きって気がついたのは... 昨日で...」

「エッ!? 昨日？」

「う、うん、でも、もしかしたら、その前から好きだったみたいで...

でも、私も、中原くんのが好きって思ったから... でも... ちがってて」

「な、中原くんは... どうするの？」

マリがポカーンとした顔で聞いた。

「そ...そうなの...よ」

「困った...ね」

マリがボーッとした顔で言った。

「ご、ごめんね、マリ、中原くんとマリをくっつけるなんて言っときながら、

中原くんのこと好きになっちゃって、てか、好きだと思っちゃって、

それで、取ったみたいなことになっちゃって、それなのに、こんなこと、

ごめん、マリごめん、どうしよう、でも、ごめん」

「え... あ... い、いいよ、それは、もう、ぜんぜんいいけど... どうするの？」

「どう...しよう...も、ない...と思う、そいつは好きな人がいるから...」

それは... マリで... あ——っなんてフクザツなのおおおおっ!?

「それで、あかりちゃんの好きな人って誰？」

「そ、それは...」

河合...だけど、河合はマリのことが好きで、もしかしたら、コクるかもで、

そのとき、私の好きなのが河合だって知ってたら、マリは私に気をつかうかもで、そしたら、また私はマリの恋をぶっ壊しちゃうことになっちゃうかもで...

「マ、マリの... 知らない人」

「そんな人いたの？」

「う、うん」

「どこの人？ 同じ学校？」

「え... そ、それは...」

ジリジリジリ... 昼休み終了のベル。ホッ...

「マ、マリ、行こう」

「あ、う、うん」

戸惑った顔のマリの手を引っ張って教室に走った。

言っちゃった・・・！

マリに言ってよかったんだか悪かったんだか、言ってなんの意味があったのかわなかったのか、てか、結局、事態はな～んにも変わってないわけで、すごいハンパな気持ちのまま午後の授業が終わった。
今日一日、私って、なにやってたの？

「山岸」

帰りの学活の前に中原くんがそばに来た。

「大丈夫？」

「え、あ、う、うん、あの、ごめん」

「いや、俺はいいけど、どうしたの？」

「あ... あの、お、お腹痛くなっちゃって、涙が出るくらい... 痛くて」

「そうか、言ってくればよかったのに」

「う、うん、でも、もう大丈夫」

「今日、クラスの委員会開こうと思うけど、大丈夫？」

「えっ」

また、あの、フクザ～ツな人間相関図...か。

「う、うん」

「また具合が悪くなったら言ってくれよ」

「も、もう大丈夫だから」

「帰りは送ってくよ」

「え、あ、い、いいよ、ほんとに大丈夫だよ」

「一緒に帰りたいしさ」

中原くんがそう言って照れくさそうに笑った。

ああああ、中原く～ん、ごめんなさーーーーい！

あーーーーっ、自分で自分がイヤになるううううっ！

もうどうたしらしいのかわかんないよおお。

放課後の校内、三年生の階で残ってるのは私たちだけ。いくら文化祭近くてもさ三年にもなってこんなマジメに打ち合わせするなんて、うちのクラスくらいだよ。だから、帰りたい、てか、なんでもいいから帰りたい。

この4人だけにいるなんて、今の私には拷問だよおおっ！

「みんなからもいろんな案が出てるんだけどさ」

中原くんがまじめに議事進行。ねえ、全部任せるから帰して！

「場所によっては許可されないのもあるからなあ」

マリがチラッチラッと心配そうな顔で私を見てる。

や、やめて、余計意識しちゃうんだからさあつ。

「んじゃ生物室はどうよ？」

河合がフツツの顔で、な～んともなくしゃべってる。

昼休みに私が泣いたことなんて、どーでもいいと思ってるのかな...ってか、もう忘れてるのかも、どーでもいいから。

「生物部も使うからムリかもしれないなあ」

「マジ!? ヤベえべ、俺たちの日記は生物室で会うんだからよ」

どーでもいいよ、そんなことは、私にはねっ。

「生物部の部長に聞くしかないな」

「おっし、行ってくるわ、生物部まだいんだろ？」

河合がそう言って立ち上がった。

それがそんなに重要なわけっ!? だよな、河合は私の気持ちなんか知らない、知ったって、やめちくりってカンジだよな、河合が好きなのはマリだもん。

「マリちゃん、行くべ」

「え？」

「パートナーじゃんよ、俺とマリちゃんはさ」

“パートナー”...って言った...

「それに、ほれ、こいつらは二人になりたいじゃねえの？」

そう言ってニヤッと笑う河合いいっ！

なんでそーゆーことばっかは、ヘンに気い使うかなあああああつ!?

「あ、う、うん」

マリがまたチラッと私の方を心配そうな顔して見てから、立ち上がった。

「中原、二人っきりだからってヘンなことすんなよ」

するかあああああつ！

「バ、バカ、そんなことするかよ」

中原くんが赤くなって笑った。

「あ、俺たちに戻ってきてほしくなかったらメールしろよ」

河合はそう言ってポケットから携帯出して笑った。

バッカーーーーーッ！

河合とマリが教室を出ていった。

中原くんと二人...きり。 困ったあああああ。

「バカだよな、あいつ」

中原くんが照れくさそうに笑った。

「う、うん」

んつとに、バカー———！

「えっと、この案だと、最後に中庭で出会って」

中原くんがまだ照れながら日記の話に戻った。

「でも、当日、中庭は二人きりになれるかな？」

「え？」

「中庭に出店するクラスもあるだろ？」

「あ、ああ、うん、そうだね」

「みんなのいるところでコクるのは...なあ」

中原くんがそう言って笑う。

「やっぱり二人きりじゃないと、ちょっとな」

二人きり... 河合は...私と中原くんを二人きりにするって言った... てことは...

河合とマリも... 二人きりで...

「二人きりになって...コクる...の...？」

「その方がやりやすいんじゃないかな」

だから、河合はマリを連れていったの？ 生物部に行くってふりして、

私と中原くんを二人きりにするふりして、ほんとは河合とマリが...

「だから、もっと人のいないようなところを選んだほうがいいかもな」

放課後の校内...廊下にも人はいなくて...三年生の階はここしかいなくて...

マリと二人きりになって...河合は“心の中で一万回も言ってる”言葉をマリに

言うつもり...なの？ そうなの？ そうだよ、きっと！

どうしよう!? どうしようもできないよ！

だって河合はマリが好きで、だけど、私も河合が好きで、でも、河合はマリに

コクるつもりで、もしもマリがOKしたら、もう、だけど、そんなの、イヤ！

だけど、私は中原くんにつき合うって言っちゃって、河合がマリにつき合って、

中原くんのこと好きなふりして、河合とマリがつき合ってるのを平気なふりして

見てるなんて、できない、私、できない！ だって、河合が好きなんだよ！

「で、どうする？」

「キャンセル！」

「え？」

「中原くん、ごめん、でも、キャンセル！ キャンセルなの！」

「ハ？」

バタンと椅子倒して立ち上がって教室飛び出した。

バタバタと廊下走って、だって、もし一秒でも遅れて、
それで、河合がマリアにコクっちゃったら、そしたら、もう、もう終わりだもん！
言えないよ、河合に好きって言えなくなっちゃうよ、私のこと好きじゃなくたって、もういいよ
！

だけど、言いたい言葉を言わないままでいたら、ぜったい後悔する！
もうイヤ！ そんなのイヤ！ イヤなの——っ！
あ... ウソ、なんか、下っ腹が、イタッ、あっ、なんか、今の、えっ!?
ウッソ——!?
バタバタとそのまま女子トイレに駆け込んだ...！

マジっすかあああ!? なんでなっちゃうのよおお!? 一週間も早いじゃ〜ん。
なんでこんなときに生理になるかなああああ。もう、バカー——ッ！
あっ！ ナプキン！ 持ってきてない！ どーしよおおおおっ!?
トイレットペーパー丸める？ すぐ漏れちゃうよおお。 どうしよおおお。
このままずっとトイレに座ってるわけにいかないしさあ、どうすんのおお!?
サイテー、最悪、ついてない、ひっどーい、なにこれえええ、ガク〜ッ。

ギギーッってドアの開く音。だ、だれ？

「あかり...ちゃん？」

あっ、マリだ！

「マ、マリいいいい」

「あかりちゃん？ どこ？」

「こ、ここだよ、ここ」

トントントンってドアを叩いて知らせた。

「なんか中原くんが、あかりちゃんが青い顔して走っていったって」

「生理になっちゃったのおおおっ！」

「ああ！ それでなの！」

「ち、ちがうけど、でも、今は、そうだよおおお」

「え？」

「マ、マリ、ナプキン持ってない？」

「持ってるよ」

「あ～～ん、よかったああああ」

「私、今生理だから」

「一個くれる？」

「うん、いいよ、どうすればいい？」

「あ、えっと、上から放り投げてよ」

「うん、いくよ」

ナプキンが天から降ってきた...！ 私、救われたかもおお。

ジャーッ！ 心地よい水の流れる音。ホッ。ボタンとドアを開けると、マリが立っていた。

「大丈夫だった？」

「う、うん、ありがとう、すごい助かった」

「驚いちゃったあ、中原くんが...」

「あっ、か、河合は？」

「え？」

「も、もう戻ってきちゃったの？」

「河合くんはトイレ寄ってくからって、私だけ先に...」

「な、何か言われた？」

「え？」

「か、河合、マリになんか言った？」

「え... えっと、うまくいくかもって」

「エッ!? そ、それから？」

「それから... マリちゃんが言えばOKするに決まってるって」

「エッ!？」

「でも、ダメだったけどね」

「エッ!? ダ、ダメって、断っちゃったの？」

「ていうか、断られたっていうか」

「か、河合が断ったの？」

「ううん、河合くんはたのむって言ってたけど」

「マリが？」

「私も、お願いしてみたけど、ダメだったの」

「な、なにそれ!? そ、それじゃ、とにかくダメってこと？」

「うん」

「そ、それじゃ、私が言ってもいい？」

「あかりちゃんが？」

「私が好きって言ってもいい？」

「ハ？」

「私、言ってくる！」

バタンッとドアを開けると、目の前に、河合が立っていたあっ！

「ウッソーーッ!？」

河合がキョトンとした顔で私を見ていた。

「な・な・なんでここにいるのおおっ!？」

「な、なんでって...」

「い、今の聞いてたのおおっ!？」

「い、今の？」

「だ、だから、私があんたに言うって」

「な、なにを？」

「だから、あんたに好きって言うって！」

「だ、誰が？」

「私がつ！」

「だ、誰を？」

「だからっ、私があんたを好きって言うって言ったのっ！」

「ハ？」

「ハじゃないわよっ！ 私があんたが好きなの！」

「エッ!？」

河合が 固まった 目と口、大きく開いたまま硬直してる...！

「だ、だから、あ、あんたがマリのこと好きなのは、知ってるけど、でも、

あんたのこと、好きって、言わないと、ぜったい後悔するって思って、べつに、

私のこと好きになれって言ってんじゃなくて、ただ、言いたい言葉を言わないと

ぜったい後悔するって思ったから、だから、言っただけ、それだけ！」

プイッと河合の横を通り抜けようとする、

「あ、ちょ、ま、待てよ」

河合が私の腕をつかんだ。

「な、なによ!? もういいでしょ!? 言ったんだから！」

「マ、マジ？」

「こ、こんなことふざけて言うと思うのっ!？」

「や、だ、だって、便所の前でシナこと言うからさ」

「べ、便所の前だってなんだって私の勝手でしょっ！」

「ま、まあ...な」

「だいたい、あんたがここに立ってんのが悪いんじゃないよっ！」

「つうか、おまえが便所から出てきたんだろ？」

「しょーがないでしょーっ！ 生理になっちゃったんだもん！」

「え...」

「アッ...！」

河合の顔が真っ赤になって、多分私の顔はもっと真っ赤で

「キ... キャーーーーーッ！」

河合の手を振りほどいて、廊下を全力疾走、教室の手前の階段駆け下りて、ゲタ箱走り過ぎて、そのまま校門を走り抜けた...！

ゼーゼーゼーゼー... バカだ... 私... バカだあ、なにこれえ!?

だって河合があんたなとこにいるからさあ、まさかドア開けてすぐにいるって思わないからさあ、ビックリしちゃってさあ、心の準備だってできてなかったし、恥かしかったし、何言ってんのか自分でわけわかんなくなっちゃったし、しかもトイレの前でだよおお、しかも怒鳴っちゃって、プリプリしちゃって、最悪だよおお。

私の恋は終わった...！

ガック〜ン...

泣きつつらに蜂？ ヨワリメニタタリメ（どういう字？）？ あかりに雨？
雨が降ってきちゃった、どうしよう、カバンは教室、定期もその中、バカだよお。
でも、戻れない、顔あわせられないよお、河合にはモチロン、マリにも、
そして中原くんにも…。ハァ～…。
しかも、うちの学校、なんで屋根がないかなあっ!? 雨宿りもできないじゃん！
どうしよう、校舎の中に入ろうとしたら、バツタリみんなと顔合わせちゃうかも。
今は会いたくない、だって、なんか、すごい落ち込んでるんだもん。
中原くんにはハッキリ断らないうちに、河合にあんなこと言って、
しかも、あんな言い方しちゃって、マリにも河合が好きって言ってなかったし…。
みんな呆れてるだろうなあ、てか、「なににあいつ!？」って嫌われちゃったかも。
しょうがないよね…悪いのはぜーんぶ私なんだもん。ハァ～…。あっ、そうだ！

自転車置き場の屋根の下。ここならなんとか雨宿りできる…けど、
ノラ猫みたいに頭から濡れて、こんなところに座ってる私って…悲しすぎるう。
あっ、だ、誰か来る！ あわてて校舎の裏に隠れて、そ〜っと見ると、中原くん！
どうしよう、今、言う？ ごめんなさいって、ムリだよ、今は、なんて言ったら
いいのかわかんない、どんな顔すればいいのか…。
中原くんの自転車が雨の中に消えていった。
ごめんね…中原くん。

「何やってんだよ？」

「ヒッ…！」

振り返ると、後ろに、

「だっ、あっ、か、河合…」

「おまえ、ズブ濡れじゃんよ」

河合が笑いながらそう言った。

「ほ、ほっといて」

フンって玄関の方に行こうとすると、

「カバンならあるぞ」

そう言って私の目の前に私のカバンをぶら下げて見せた。

「あっ」

ガバッと取り上げて、バス停の方に行こうとすると、

「送ってやるよ」

河合が私の腕をつかんで言った。

「い、いい、バスで帰る」

「その格好で？」

河合が苦笑いしながら私を指差した。

「あ...」

まるで転覆した船から救助された女... の、乗れない...。

河合に腕をつかまれたまま、河合の自転車のところまで行って、

「乗れよ」

河合がサドルにまたがって、

「ぬ、濡れてるじゃん」

荷台を指差して言うと、

「おまえよかマシだっつうの」

なんて笑われて、河合の腰に腕をまわして、あんなことのアとで、河合の背中...

辛いですううううっ。シクシク

みなさ〜ん（って、誰？）私は今、河合の部屋にいま〜す。

河合が「風邪引くから俺ん家で着替えろ」って無理やり連れてきたんで一す。

あんなことがあったすぐあとに河合の部屋、二人きり、辛いですうう。

「これで拭いてろよ」

河合がポンとバスタオルを投げてよこした。

「えーっと、シャツ...」

河合は押し入れ開けてゴソゴソ探してる。

あ、河合のTシャツ...！ 持ってきてたんだ。

「あ、あの、これ、前に借りてたやつ」

カバンの中から“Funky Monkey Baby”とスタジャンを出すと、

「んじゃ、上はそれ着ろよ、あとは、これでいっか」

グチャグチャのベッドの上から青いジャージのズボンを引っ張り上げた。

「んじゃ、着替えたら呼んでくれい」

そう言って部屋を出ていっちゃった...。

あ————っなんじゃこりゃああ?? なんでここにいるかなあ??

今一緒にいたくないナンバー1の部屋にさあ。

し、しかたないよね、とにかく着替えよう。制服脱いで、Funky Monkey着て、

青いジャージのズボン、このコーディネート、最悪っ！なんて、言ってる場合じゃ

ないけどねえ。バスタオルで髪の毛ゴシゴシ拭いて、河合呼ばなきゃ、

どんな顔して？ 頭からスッポリタオルかぶって、戸を開けた。

小さなテーブル挟んで、私のまん前に河合が座ってる。

さっき入れてくれたコーヒーが湯気をあげて、テーブルの上に二つ。

さっきから...沈黙。二人とも。な、なんか言ってよ。

「おまえさあ」

河合がやっと口を開いた。

「な、なに？」

「タオル取んねえと顔見えねえだろ？」

「え、や、やだ」

「やだって、おまえ、俺、仮装大会のオバケといるみてえじゃんよ」

河合がそう言ってゲラゲラ笑った。フンだ！ 笑ってろっ！

「おまえさ」

「と、取らないからねっ」

「じゃねえよ、いいよ、もう、一生かぶってるよ」

河合がそう言って笑った。笑ってよ、どうせ、私は、バカですうう。

「おまえさ、あれって... マジ？」

「あ、あれって...な、なによ？」

「だ、だから、おまえの好きなのは...」

「わ、忘れて！」

「え？」

「そ、そのことは、もう、ぜんぶ忘れて！」

「忘れろって、おまえ...」

「ごめん、忘れて！」

「冗談だっつうこと？」

「じょ、冗談じゃ...」

「おまえ、冗談でンナこと言うなっつうの」

河合がそう言って苦笑いした。

「な、なによっ!? 本気よ！ 悪いっ!？」

「え？」

「ほ、本気だけど、もういいって言ったでしょ!? 本気だけど、あんたがマリの
こと好きなもの知ってるし、だけど、言わなきゃぜったい後悔すると思ったし、
だから、言っただけ！ それだけ！ だから、もう忘れて！」

「忘れらんねえよ」

「忘れてってば！」

「忘れたくねえんだっつうの！」

「へ？」

「ったく、おまえって鈍いっつうかよ」

「に、鈍いいいっ!？」

「俺がいつ山本のこと好きだっつったよ!？」

「マリちゃんマリちゃんて、いっつもそばにいたがったじゃん！」

「だから、それは、中原がおまえとつき合いてえっつうから、おまえと中原を二人きりにすんには、やっぱ、なんつうか、しょうがねえじゃんよ」

「マリの写真持ってるじゃん！」

「バカ、あの写真に誰が写ってんだよっ!？」

「マリ！」

「おまえも写ってっだろ！」

「へ？」

「ったくよお」

「私も写ってるから、なに？」

「だ、だからっ、おまえが写ってるから買ったんだっつうの！」

「なんで？」

「な、なんでって、おまえのことが好きだからに決まってんだろ！」

「ハア～～??」

「お、おまえ、んな、気い抜けた反応すんなよお」

「だーって、何回も、何百回も、一万回も好きって心の中で言ってるって！」

「よ、よくンナこと憶えてんな」

「言ったじゃん！」

「あれは、おまえにだっつうの！」

「ハア～～??」

「だから鈍いっつうんだよ」

「バ、バッカじゃない!? 心の中で言われたって、わかるわけないでしょ!？」

「まあ...な」

「しかも、マリの話してるときに言ったんだよ？ マリだと思うじゃん！」

「しゃーねーだろ!? おまえは中原のこと好きだと思ってたし、中原からはおまえのことが好きだから協力してくれって言われてたしよ、んなときに俺もおまえが好きだなんて言えっか!？」

「え...そ...それは...」

「おまえだって悩んでたじゃんよ」

「ま...まあ...ね」

タオルの隙間から見える河合の顔...なんか、照れてるみたいで...

なんか、男っぽく見えて...なんか、ドキドキちゃう...

「わ...私のこと...好きって... い...いつから？」

「お、おんなしクラスになって、ちょっとしてから...つつうか」

「ウッソー!? そんな前からなのおっ？」

「お、おまえこそ、いつから...だよ？」

「昨日」

「ヘッ!？」

「ていうか、昨日...気がついた...っていうか」

「遅っせえよ」

河合がそう言って笑った。

「だって、あんたなんか好きになるなんて思わなかったんだもん！」

「あんたなんかって、どういう意味だよお」

「ぜーんぜん私のタイプじゃなかったんもん！」

河合が苦笑いしてる顔がタオルの隙間から見える。

なのに...好きになっちゃった...目の前のこいつを...

「おまえは、バリバリ俺のタイプだけどな」

「え... ど、どんな...タイプ...よ？」

「おっちょこちょいで、せっかちで、ガーッと突っ走ってドンッとすっ転んで、ガキみてえにワンワン泣いて...って、まあ、ひとことで言やあ、天然だな」

「テ... テ・ン・ネ・ン〜ッ!？」

「だろ？」

「ジョーダンじゃないわよっ！私はねっ、小学校のころから、あかりちゃんはしっかりしてて、姉御肌で頼れるって有名だったんだからねっ！」

「ブァッハハハハ！」

「な、なによっ!？」

「おまえ、自分のこと知らなすぎ！ ブァハハハ！」

「な、なによおっ！ アッタマくるううっ！」

バシッてバスタオル投げつけても、まだ笑ってるうっ！

「な、なにさ！ フン！ 帰るっ！」

バンって立ち上がって、ガシッとカバンひつつかんで部屋を出ようとする、

「あ、ちょ、ちょい、待ってっ」

河合が腕をつかんだ。

「なによっ、放して！」

「まだ帰んなよ」

「帰るっ！」

「悪かったって」

って、言ってる顔が、まだ笑ってるううっ！

「あんたなんか、あんたなんか、ダー————イッキライ！」

「好きだったじゃん」

「ウソ！ 撤回！ 私がバカでしたあああッだ！ サヨナラッ！」

「いろって」

河合がつかんでた腕をグイッと引っ張って、抱キ・シ・メ・タ...！

ウ...ソ... ドキドキドキドキドキドキドキドキ

な...なんか、固まっちゃって...なんか、身動きとれなくて...なんか...

河合の腕の中...あったかくて...河合の胸にほっぺたくっつけると...

ドクドクドクって、河合の心臓の音が聞こえて...ずっと...ここにいたい...って...

思っちゃうよ...ずっと...河合のそばに...

好き...って、心の中でつぶやいた。

聞こえないけど...わかるよね...

だって...私も...河合の背中に腕をまわして...ギュッと抱きしめたから...

トロ〜んと河合の腕の中...に、いたけど、ちょっと冷静になってきたら、

ど、どうしよう、なんか恥ずかしくなってきたよ、そろそろ離れる？

でも、突然？ 顔だけでも上げてみる？

で、でも、顔を上げて、そこに河合の顔がドアップであって、

も、もしかして、キ、キス...!? キャーッ！

どうしよおお!? やだ、くちびる荒れてるかも、リップ塗っとけばよかった...って

何期待してんのよっ!? か、河合はなに考えてるのかな...

あ、今、河合のノドがゴクッてなる音がした...！ やっぱり...考えてる...!?

ギョルルルウウ

え？ 今のだれ？ 私じゃないよ？ 河合か。

「腹へったな」

思わず顔を上げると、河合が私の身体から腕を離して自分のお腹をさすった。

「なんか食いに行かねえ？」

あっそ いいけど。

「ラーメン食いに行くべ」

河合はそう言うと、窓の方に歩いていった。

「おっ、雨やんでんじゃん、ラッキー！」

ふ～ん、あんたは私を抱きしめながら、ラーメン食うこと考えてたわけねっ。

「寒いから着けよ」

河合がそう言ってボロ・スタジャンをバサッと私の肩にかけた。

そして、私はまた、このボロスタジャンとFunky Monkeyを着て...って、

「やったあ！ 私、下、ジャージだよお？」

「気にすんなって、たいした店じゃねえからよ」

「でもおっ」

「いいから、行くぞ」

そう言って河合が私の腕をつかんで部屋を出た。

もうっ、そういうことだけ強引なんだからあつ。

河合が連れてきたのは、ガードレール下のボロッチい小屋みたいなラーメン屋。

これならジャージでもいっか。

それにしても、こいつ、食べるの早すぎ！

私が半分も食べてないのに、もう終わったっちゃったよ！

「遅らせえよ」

河合がニヤニヤして私を見てる。

「あ、あんたが早すぎるのよ！」

ったくさあ、ムーないよ、せっかく愛を確認しあったのにさ、そのすぐあとに

ラーメン屋だもんね、私、とんでもないヤツ好きになっちゃったよっ。

河合の自転車が私の家目指して走る。

このボロ・チャリの荷台、私の指定席...だよな。

河合の腰にまわしてる腕にギュッと力を込めると、河合が片手で私の手をにぎった。

ドキッとして、なんか、嬉しくて、河合の背中につけたほっぺたがもっとあったかくなった。

河合の自転車が、うちのマンションの前にスーッと止まった。

「ありがと」って言って荷台から降りると、

「あれ？」って、河合が私の顔を見た。

「な、なに？」

「おまえ、ネギついてんぞ」

「エッ、う、うそ、どこ？」

「もっとそば来いよ」

河合が私の腕を引っ張った。

「ど、どこよ？」

「ここだよ」

河合が私の頬に手をあてて、そして、チュッ！

え????

「んじゃな！」

河合がグイッとペダルを踏んで、自転車が走り出して、

なに????今の????チュッ???

エ—————ッ！ チュウウウウッ!?

なにこれえええええっ!? キスうううううっ!?

私のファースト・キスだよおおっ?

それが、ネギついてるからとか言われて、チュッて、なにこれえええっ!?

「バ、バカ—————ッ！」

小さくなった河合の背中に大声で怒鳴ったら、河合が片手をあげて通りに消えた。

ひっどーいっ！ ファースト・キスだったのにいっ！

もっと、もっとさあ、もっとムードがあってもいいんじゃないのお？

ネギついてるとか言う？ そんで、すぐに行っちゃう？ 余韻とかないわけ？

サイテー！ あいつ！ とか思いながら... くちびるを指でなぞって...

キス...しちゃった、河合と... キャ—————！

バカみたい、私、嬉しいとか思ってる、だって、やっぱ嬉しいよ、好きな人とのキスだもん、一生に一度だけのファースト・キスだもん。

あっ！ ラーメン食べたあとだったあっ！

やっだあ！ ネギくさかったかもお。 河合はどうだった？ ていうか、

感じてるヒマなかったよ、一瞬だったもん。だったら私も大丈夫か。ホッ...って、一生に一度のファースト・キスの味...味わえなかったあああ。

てか、多分、ネギとラーメンのおつゆの味...

「河合のバカ」

一人でつぶやいて、なんか、にやけてるから、ほっぺたパンパンってたたいて、マンションの中に入った。

ところで、私、とんでもないこと忘れてた。

中原くん。

どうしよおおおお。

つき合うなんて言っちゃって、なのに、私、河合が好きって気がついて、
中原くんに断らないうちに、河合とキスまでしちゃったよおお！
明日言わないと...だよ、なんて？ てか、言ったよ？ “キャンセル！”って。
でも、あれじゃ、なんのことかわかんないよね。やっぱ、明日ちゃんと言おう。
あ〜あ、悩みはつきないよお、まったくさあ。

朝になって、カーテンを開けると、昨日の雨がウソみたいな晴れ！
ウソみたい... 昨日のこと... 河合と私、お互いがお互いを好きってわかって、
そして... キス... キャー！ どんな顔して学校に行けばいいのおお!?

「あかり！ 早くしないと遅刻するわよ！」

「わーかったよ！」

ったく、私にだって、いろいろと考えることがあるんだからね！って、言ってる
ヒマない、早く着替えなきゃ！

モソモソのトースト食べて、お弁当持って、マンションの玄関飛び出ると、
「ハ？」

中原くんが立っていたあっ！

「な、なに、ど、どうしたの？」

「話したいことがあって」

中原くんがそう言って、ちょっとだけ微笑んだ。

「こ、ここで？」

「学校だと二人きりになれないからさ」

「う、うん」

なんだろう、なんだろう、なんだろう、ま、まさか、私が河合を好きってことがバレて、それで、怒って、グサッ...！　バ、バカじゃない？　何考えてんのよ!?
てか、その前に私が言わないとだよ。

「あ、あの、中原くん、あの、実は、私ね、あの、ご、ごめんなさい！」
私は180度くらいまで頭を下げた。（身体硬いから120度くらいだったけど）

「私、あの、つき合うなんて、言ったけど、私、実は」

「河合が好きなんだろう？」

「エッ!?　な、なんで??」

中原くんがフツて苦笑いした。

「聞こえたよ、昨日、廊下で大きな声で言ってただろ」

「あ...！」

あれ...聞きちゃった...のね。

「あのあと、河合とも話したし」

「エッ!？」

「河合に言われたんだ、『悪いけど、もうおまえの協力できない』って」

中原くんがちょっと淋しそうに微笑んだ。

「俺、河合が山岸のことを好きなのは知ってたんだ」

「エッ!？」

「ていうか、山岸のこと好きになったのは、河合の方が先なんだけども」

「ハ？」

「俺と河合って1年のときから同じクラスでさ、なんとなく気があって、

2年になっても同じクラスになって、ずっと一緒に行動してたっていうか、

それで、河合が...山岸のこと目で追ってるんだ、気がつくとも山岸のこと見てて」

「ウッソー！」

中原くんが私をチラッと見て、そして、フツて笑った。

「それで、俺も、河合の視線を追っていくうちに、なんか山岸のこと見てて、

俺も...　なんていうか...」

中原くんがそう言って照れくさそうに頭を掻いた。

「でも、山岸ぜんぜん気がついてなくて、これは脈ないなあと思ってた」

脈ないもクソも、気がついてなかったよおおお！

「でも、最近、山岸が俺に近づいてきたっていうか、いろいろ聞いてきただろ？」

だから、そんな気がして、これはイケるかなあなんてさ」

それは...マリのために...近づいて...

「中原くん...　ごめんね...」

「謝られると、かえって辛いつて」

中原くんがそう言って笑った。

「ごめん...」

「俺もさ、ズルイんだよな、河合の気持ち知ってたくせに、知っててわざと、河合に協力してくれって言ったんだ」

中原くんがちょっとだけくちびる噛んで...

「なんかさ、こうなる気はしたんだよな、山岸は河合といると、俺といるより、ずっと楽しそうに見えて、だから、余計アセッてたんだ、俺」

なんて...言えればいい...中原くん...こんなに正直に話してくれてる中原くん...

「てことで、俺とのことはキャンセル！」

中原くんがそう言って笑った。

「あ、でも、実行委員会は今までどおりだからな」

「う、うん」

「それじゃ、先に行ってるよ」

中原くんは“中原スマイル”で、自転車に乗って学校の方に向かっていった。

なんか... やっぱり、中原くんてかっこいい。ほんとにかっこいい。

マリが好きになったの...わかるよ。

あっ！ マリにも言わなきゃ！

教室の前に来ると予鈴のベルが鳴った。ヤバッ！

教室に駆け込んで自分の机にカバン置いて席に着くと担任が入ってきた。セーフ！

出欠を取ってる間、中原くんの背中を見た。いつもと同じ背中...でも、ちがう。

マリの方を見るとマリもチラッと見て何か言いたそうな顔して、

でも、前の席の子が名前呼ばれたから、また前向いちゃった。

河合の方をチラッと見ると、河合もこっち見てて、ドキッ！ 思わず前向いちゃった！

だって、中原くんの言葉...

“河合はいつも山岸のこと見てた”って...

だから、いつも振り向くと、こっち見てたのか。

今も見てるのかな？ もう一回チラッと見ると、あ、やっぱり見てた...！

河合は今度は照れくさそうに微笑んだ。

ドキドキドキ

見てたんだ、ずっと、私のこと...！ キャッ。

もう一回振り向くと、やっぱり見てる！

河合がくちびるすぼめて...？ チュッ！ にや、にやにいつ？

「河合！ なにやってるんだ？」

担任がキョトンとした顔で河合を見てた。

「あ、は、はい、いえ、なにもしないっス」

バーカ、バーカ、アハハ！

こうして、また一日が始まった。

昼休み。昨日の雨で土が濡れてるから、今日は中庭のベンチに腰かけてる。

マリに言おうとしたら、もう知っていた。

「あんなに大きな声なんだもん、しかも、トイレのすぐ前でしょ？」

私、なかなか出れなかった」

マリがそう言って笑った。

「ご、ごめんね、マリに言う前に...あの...」

「なんかそんな気はしてたよ」

「ほ、ほんと？」

「あかりちゃん、すぐ顔に出るんだもん、わかるよお」

「ウ、ウソ!？」

「それに、河合くんといると楽しそうだったし」

「楽しいっていうか、あいつ、バッカみたいだからさあ」

「でも好きなんでしょ？」

「ウッ... ま、まあ...ね」

「似合ってるよ、二人」

「なんか、嬉しくない」

「な～に言ってるの！ 素直に喜ばあ？」

「うん... まあ...ね」

なんか今日はマリに押され気味。しかたないよ、スネに傷持つっていうかさあ。

マリのことグチャグチャ振り回しちゃったしさあ。

「中原くん... すごいね」

マリがポツリと言った。

「好きな人にふられても、そんなふうにはできるなんて...」

マリは... まだ中原くんが好きなのかな... そうだよな...きっと...

だって、中原くんのことを話すとき、マリの顔はとっても優しくなるんだもん。

「あ、さっき中原くんが言ってたんだけど、今日、実行委員会やるって」

「あ... 昨日できなかったもんね... (私のせいで...だけどさ)」

「ていうか、タイヘンなことになったらしいの」

「タイヘンなこと？」

...ってというのは、未来日記をやるためにあちこちの場所を借りるのが

不可能になってきたってことだった。

「んじゃ、どうすんだよ？」

河合がノンキな声で中原くんに聞いた。

「うちのクラスはなんもやんねえつつうこと？」

「いや、そうはいかないだろ、別のものを考えるしかないな」

「今からかよお!？」

河合と中原くん、ぜんぜんフツーにしゃべってる。

あたりまえだけど、でも、すごいなあ、私だったら、ぜったいフツーにできない、すっごいわだかまっちゃうっていうか、河合がマリのこと好きだと思ってたときでも、マリのこと遠くに感じちゃったもん。

マリだって、すごいよ、私がさんざん振り回したのに、フツーにしてくれて。

なんか... 私って、この中でいちばんガキくさくない？ ズド～ン...

「何かいい案ないかな？」

中原くんもちょっと困った顔してる。

迷惑かけたお詫びに、ここでドーンとひとつ、いい案を！って言いたいけど、ぜ～んぜん他のこと思いつかないなあ。

「バンドやっか？」

河合が閃いた！って身振りで言った。

ハ～～?? バンド～～??

「バンドって誰がやるんだ？」

そうそう、中原くん、私もそれが言いたい。

クラスにバンドやってるヤツなんかいたっけ？

「決まってんじゃん、俺たちだよ、俺たち4人！」

「ハ～～～??？」

ナニ言ッテンノ、コイツ???

「中原はピアノやってんじゃん？」

「それは小学校のときの話だろ？ 今はできないよ」

「ダ～イジョーブだって！ んで、俺がタイコ叩くからよ」

ドラムを“タイコ”なんて言ってるヤツにバンドはムリだつつうのっ！

「マリちゃん、なんか楽器やったことあんべ？」

「わ、私は、小学校のときの縦笛しか...」

「んじゃ縦笛な！」

「バッカじゃないっ!? どこの世界にバンドに縦笛なんてあんのよっ!？」

「おお！ 俺たち、先駆者つつうこと？」

「な～にが先駆者よ！ 笑われるだけでしょ！」

「それよ！ それ！ お笑いバンド！ どうよ？」

「ぜー————ったい、イヤ！」

「おまえは声デケえからボーカルやらしてやるよ」

「なっ、なんだとおおっ!？」

フツ...と、中原くんとマリを見ると、必死に笑いこらえてるよおおっ！

反論できない... 昨日の今日だから... たしかに私...声デカイかも...

「河合、バンドなんて今からじゃムリだよ」

中原くんが笑いながら言った。そうそう、ムリムリ、ぜーったいムリ！

「そんじゃ、どうする？」

シーン...。 また振り出しに戻っちゃった。

「あ、あの...ね...」

マリ？ みんなが（って、3人だけだけど）マリの方を向いた。

「喫茶店は？」

私も、多分...河合も中原くんも、ちょっと戸惑い気味。

「喫茶店か... 喫茶店やるクラスって、けっこうあるからなあ」

そうなんだよね... ありがちっていうか...

「ほら、あの、未来日記で4人で海の家をやってたでしょ？」

「おお、見た見た！ ハヤトが男だったぜえ！」

河合が話に乗っていった。

「未来日記喫茶店っていうか、ボードで席を区切っちゃって、恋人同士だけになれるような... 恋人のいない子は入るときにクジを引いて席を決めるの、男子と女子ペアになるように...って、ダ、ダメ...かな...」

おお！ いいかもお！

「それ、いいじゃんよ！」

「そうだな、未来日記喫茶店っていいかもな」

「ほ、ほんと？」

「マリ～、サイコー！」

マリが嬉しそうに微笑んだ。

ってことで、決定！

それから、私たちは未来日記喫茶店の準備に追われる日々であった。

メニューもすごいんだよ！

ストロベリー・ジュースは「桜坂」！（ピンクだからね！）

レモン・スカッシュが「Tsunami」！（シュワシュワッとくるところから...！）

ジャスミン・ティーが「イーロン」！（中国つながりってことで...）

おせんべいの上にアイスに乗せて、「とまどい」！って、

「なにこれえっ!？」

「とまどいだよ、とまどい！ せんべいの上にアイス乗ってたら戸惑うべ？」

「意味ちがうよっ！」で、これは却下だけどさ。

あとは、コーヒーと紅茶で、この全部に、マリと私が作るハート型のクッキーがつくの！ お—————！すばらしすぎるうう！

ところで...

「喫茶店の名前はどすの？」

「未来日記喫茶でいいじゃんよ」

「ダッサー！」

「んじゃ、おまえ考えろよ！」

「う〜〜ん... そうねえ... あっ！ Lover's Tea Roomなんて、よくない？」

「うわっ、こっ恥ずかしくて、俺ならぜってえ入んねえ！」

「んじゃ、あんたは来るなっ！」

「俺はスタッフだも〜ん、へへ〜んだ」

「あっそ！ スタッフは、ぜーったい私たちの作ったクッキーは食べれないから」

「マ、マジ!？」

「あったりまえじゃん！ 数が足りなくなるもん！」

「いっぱい作れよお」

「二人だけで作るんだから文句言わないでよ！」

「んじゃ、俺だけに特別作るつつうのはどうよ？」

「イ・ヤッ！」

「なんだよおお、おまえの作ったクッキー食いてえじゃんよおお」

「あんたは、せんべいにアイスでも乗せて戸惑ってれば!？」

そう、私と河合、つき合うようになって、ぜ〜んぜん変わんない。

でもね、二人っきりになると... ムフツ

「あのお、あかりちゃん？」

「え？ あ、マリ、なあに？」

「名前なんだけどお」

「あ、そ、そうだったよね」

「“Love Season”は？」

「あ、いいかも...！」

「未来日記の海の家の名前が“Season”だったでしょ？」

だから、それにちなんで...っていうか」

「いい、いい！ それにしようよ！」

って、ことで、“Love Season”に決定！ パチパチパチ！

送信

いよいよ明日は文化祭初日！

今日は朝から全校のあちこちで、各クラスや部が展示や催し物の準備をしてる。

うちのクラスも、男子が掲示用ボードでしきりを作ったり、女子が飾り付けや

明日から出す飲み物用のコップやお皿の下準備をしたりで大騒ぎさ！

中原くんは総責任者で、本部と教室の間を忙しそうに走り回ってる。

河合は大道具の責任者。やっぱり、あんたって肉体労働派ね！

マリは調理班の責任者。マリの指導のもと、女子全員でクッキー作ったから、

こりゃ余裕だね！

私は飾り付けの責任者。ピンクや白や黄色のパステルカラーの風船で教室中を

埋め尽くす予定！ コンセプトは“パステルの泡”！ カッワユ〜イ！

「そっかあ？ 風船だらけでジャマくせえべ」なんて河合の言葉はムシ！

風船をひとつひとつつけていくと、やっぱり、カッワユ〜イ！

なんていうの？ やっぱりさ、私ってセンスあるっていうの？ うんうん。

「河合くんてさあ」

え？ 河合って言葉に反射的に声のする方を見ると、飾りつけ班の子たちが
ボソボソしゃべってる。河合が...どうしたって？

「なんか、かっこよくない？」

エッ!?

「うん、私も思ったあ！」

別の子が目を輝かせて相づち打ってる。

「河合くん、優しいよね！」

ヘッ!?

「さっきも天井に風船つけるとき、『届かない』って言ったら、

すぐにやってくれたじゃん？ 他の男子なんてシカトしてんのに」

「大丈夫かあ？とか言って脚立押さえてくれたしね」

にや、にやにい〜っ!? あ、あいつ、私の知らないところでそんなことを...!?

「河合くんてカノジョいたっけ？」

いるよっ！

「いないんじゃない？」

いるってばっ！

「それじゃイケるかな？」

イクなあっ！

「今日の前夜祭なんか、いいかも！」

エッ!? ちょ、ちょっと、待ってよ！ 前夜祭は私と、

「山岸」

中原くんがそばに来て話しかけても、私の意識はとなりの女どもの方につ！

「山岸、知ってた？」

「えっ、なにをっ!？」

あっ、思わず怒り口調になっちゃったよ。

「え、えっと、なんのこと？」

中原くんが顔を近づけてきた。

「えっ、な、なに、どうしたの？」ま、まさか、キ... って、バカじゃない!?

「あのさ、今、英訳の佐藤が言ってたんだけど」

佐藤がなにさっ！ 私はとなりの女たちのが気になるんだってば！

「Love Seasonって、発情期って意味なんだってさ」

「ハア〜？」

「知らなかったよな、俺もちゃんと調べておけばよかったな」

「い、いいよ、もう今さら」

「だよな」

てか、私のとなりの発情した女たちをなんとかしてくれえええっ！

前夜祭、いろんなアトラクションがあって、キャンプファイヤーがあって、
人間は火を見るとコーンするらしいっていうけど、言えてるかも。

だって前夜祭でカップルになったって話はよく聞くもん、

てか、おととしも去年もたしかにクラスで何人かあった。

それを狙ってるの？ この女たちはっ!?

ジョーダンじゃないわよっ！ 河合には私というれっきとしたカノジョがいるんだからねっ！

そうよ！ 前夜祭は、河合は私といるのっ！

ったく、あいつも女の子にいい顔しちゃってさ！ だから誤解されるんじゃん！

誤解...だよな？ ま、まさか、ウ、ウワキ...なんちって？ ユ・ル・サ・ンッ！

夕方になって、そろそろ前夜祭が始まる時間。準備もだいたい終わって、

みんな教室を出て会場のグラウンドに向かった。

あれ？ 河合？ 河合はどこ？ キョロキョロ見渡しても、河合の姿が見えない。

ウッソーーッ!? ま、まさか、あの子たちとおおお？

あわてて走り回って探すけど、人が多くて見つからないよお。

あ、そうだ、携帯鳴らそう。ピピピッ。プルプル...って、出ないよ？

鳴ってるから電源は切っていないよね、バイブなら気がつくはずでしょ？

なによ、まさか、シカト!? ウッソーッ！ ひっどーい！

なによ、なんなわけ？ 文化祭のウキウキ気分で、他の女の子たちと浮気っ!?

アツマくるうっ！ だいたいさ、この何日か、てか、もう一週間以上、

二人っきりになれたことないじゃん！ 文化祭の準備で遅くなっちゃってさ、

ゆっくり二人で話したりとかもできなかったし、前夜祭は二人でいようねって

約束したのに、てか、私がそう言ったんだけど、でも河合だってOKって言ったじゃん！

なのに、なによおっ!? いない、ぜんぜんいない、

どこにもいない...って、どーゆーことよおおっ!?

あ... 教室？ もしかして、教室で私を待ってるとか？

わかんない、けど、行ってみよう！

バタバタバタと階段駆け上って、ゼーゼーいいながら教室に駆け込むと、

いない。ウソ。それじゃ、どこにいるの？ うそおおおお。

区切られた教室のあちこち覗いても、やっぱりいない。なにこれえええ。

ガクツとして、思わず机に腰かけちゃったよお。なんか涙出そう...

窓の外をぼんやり見ると、アトラクションが始まってみんながはしゃいでる。

なのに... 私一人、こんなところにいて... 河合のバカ...

もう一回だけ携帯鳴らしてみる？ それでダメなら... 帰る。ピピピッ。

プルプル...って応答音が鳴って、突然座ってた机の下でブルブルブルって、

な、なに？ 机の下を覗くと、ウソ!? これ、河合の携帯じゃない？

ほら、「着信アリ」のマークがついてるよ？ もう一回、ピピピッ。

ブルブルブル...って、河合のだよお！これじゃ、何回鳴らしても出ないわけだよ！

なんだあ、ホッ。

じゃないよ！ 河合はどこにいるのよ？ あ〜ん、もうっ。

あいつの携帯と私の携帯を二つ並べて... 二つ、おそろ。

たまたまだったけど、色も同じ。

これ買ったときは、まさか河合のこと好きになるなんて思わなかった。

でもさ、今はさ、あいつがいないと、こんなに心の中がスーシューしちゃって、

ちょっとしたことで不安になっちゃう、やだなあ、なんか。

あいつってさあ、私の他に誰にメールとかしてるの？ 中原くん？ それだけ？

送信履歴... 見たりして？ おいおい、それはマズイでしょお。でもさあ...

ちょっとだけ、ね？ でも、もし別の女の子の名前なんか入ってたら... ガーン！

ど、どうする？ 見るのやめる？てか、ホントは見ちゃいけないけどさあ。でも...
ピッ。送信履歴が開いた...！ ドキドキ... あかり・あかり・中原・あかり...
他の女の子の名前は... ない。ホッ。てか、あいつ、あんまりメールしないよね、
ワンギリばっかです。あれ？ 未送信のマークがいっぱい、しかも...ぜんぶ私宛？
なんで？ 日付は... え？ これって... まだ付き合っていない頃だよ？ なんで？
中身...見てもいいかな...って、よくないけど、で、でも、いいよ！
私のこと、ほっといて、どこかに行っちゃってるんだから！ フンッだ！ ピッ。

目に飛び込んできた文字は 好き
え...？ 他のは...？ ピッ。 好き
未送信のマーク... 全部... 好き
日付は... 私が携帯買った日から...ずっと... 私が「好き」って言う日まで...
うそ...

『言ってるんだよ ここん中ではさ』

ずっと...

『何回も 何百回も 一万回も』

好きって...

『でも伝わんねえんだよな、これが』

あたりまえじゃん... 送信しなきゃ...

河合の...言えなかった言葉が...ここにあった...

ずっと...私が好きになる前から...ずっと... 好きって...この中で言ってたんだ...

涙がポロポロ出てきて、画面が滲んで、せつなくて、嬉しくて、

私、未送信の河合の言葉を、私にあてて送信した。

ひとつ、ひとつ、プルルッて私の携帯が鳴るたびに、河合の言葉が私の中に入ってくる。

最後の一個、私が河合のこと好きってわかる前の日、中原くんとつき合うって言っちゃった日...

あの日も河合は私に「好き」を言ってたんだね... ピッ。

「あれ？ あかり、何やってんだあ？」

「ヒッ...!？」

ビクッとして振り向くと、河合が戸のところに立っていた。

「か、か、河合いいいっ??」

「おまえ、前夜祭はどうしたんだよ？」

河合はノンキな声でそう言いながら、細い材木抱えて教室の中に入ってきた。

「あ、あんたこそ、どーしちゃったのよおっ!？」

「裏の製材所に行ってたんだよ」

「ハァ～～??」

「おまえ、仕切りと仕切りの間に風船ぶら下げてノレンみてえに」

「カーテンだよ！」

「それみてえにしてえつつってたろ？」

「い、言ったけど...？」

「この棒くっつけば、ここに下げれんじゃんよ」

河合はそう言いながら、一本を二つの仕切りの間に渡して見せた。

「そ...それで... いなかった...わけ？」

「間に合わねえじゃん、今やんねえとさ」

「み、みんなにも手伝ってもらえばいいのに...」

「悪りいべ、みんな前夜祭楽しみにしてんのによ」

「だ...だって、あんただって」

「おまえがノレン作りてえつつうから、しゃーねーべ」

河合がそう言って笑いながら、棒の端を仕切りにくくりつけた。

「わ...私が...言った...から...？」

「そっすよお」

河合はふざけた口調でそう言うと、また別の棒をくくりつけ始めた。

「河合いいい、ウ...ウ...ウエ～～ン」

「な、なんで泣くんだよ？」

「だ～ってえええ... ウエ～～ン」

「だ、だから、なんで泣いてんだよ？」

「だってえええ、あんたがいなくてええ... ヒック」

「あ、悪りい、言おうと思ったら、おまえ、もういねえしよ」

「だって、河合がいなくてあああ... ヒック」

「だから、携帯鳴らそうと思ったら、携帯どっかいつちまってさ」

「これでしょお、ウエ～ン」

私は泣きながら河合の携帯を差し出したあああ、ウエ～ン

「なんだよ、ここにあったのかあ」

「携帯鳴らしても出ないしいい... ヒック」

「出れるわけねえじゃん、ここにあんならさ、アハハハ！」

「バカ～～、ウワ～～ン」

「ったく、おまえはよお」

河合が苦笑いして私のこと抱きしめた。

「ガキみてえなんだからよ」

「だって...ヒック...河合がいなくて...ヒック...淋しかったよおお」

「よしよし、悪かったって」

「一緒に前夜祭出ようねって、ヒック、言ったのに、ヒック、いないし、ヒック、

教室にもいなくて、ヒック、そしたら、私がカーテンみたいにしたって
言ったから、ヒック、だから、いなかったなんてえええ、ウエ〜〜ン」
「だって、おまえ、飾り付けの責任者じゃんよ、だから、なんつうの？
やっぱ思ったとおりにやらしてやりてえじゃん、なあ？」

「バカ〜〜〜」

「ヘッ？ お、俺？」

「あんたじゃないよおおお、私だよおお、ヒック」

「おまえ？」

「河合が、他の女の子と、ヒック、浮気してるのかなって」

「な、なんでだよおっ!？」

「だーって、言ってたもん、河合くん優しいねって、天井に届かないって
言ったら、すぐつけてくれたし、大丈夫かあって脚立押さえてくれたって」

「そ、それが、なんで浮気になんだよおっ!？」

「だーって、前夜祭のときに河合のそこ狙うみたいなこと言ってたんだもん！」

「アホかああ？ ブアッハハハハ」

河合がゲラゲラ笑った。

「アホってなによおおっ!？」

「おまえのことじゃねえよ」

「じゃ、誰よっ？」

「んな話がアホくせえっつうの」

「だーって、『河合くんて、カッコいいよね』とか『優しいよね』とか、

『カノジョいないよね』とか、そんなこと私のとなりで話してるんだもん！」

「バーカ」

河合がギュッと私を抱きしめた。

「俺はおまえだけだっつうの」

「ほ...んと...？」

「ったりめえだろ？ 1年半も片思いやってたんだっつうの、えれえべ？」

耳元で言う河合の声が優しく、私、ギュッと河合に抱きついた。

河合の“言えなかった言葉”...見たから...

窓から聞こえてくる前夜祭のバンドの演奏やアトラクションの音楽の中で、
私と河合二人きりで風船のカーテンをつけていた。

「おっし、これで完成！」

最後の一個をつけ終わって、河合が嬉しそうに言った。

「おお！ すげえ！ マジ風船のカーテンっつうカンジだよなあ」

「こうすると中がそんなに見えないから二人きりってカンジになるでしょ？」

「試してみっか！」

河合が私の手を引っ張って中に入った。

「おお！ 天井からも風船ぶら下がってるし、なんか教室じゃねえみてえ！」

「でしょでしょ？」

「やっぱ、おまえ、センスいいなあ」

「やっだあ！ もうっ」

照れくさくって、バシッ！なんて叩いたら河合の顔に当たっちゃったよおっ。

「イデッ！」

「あっ、ご、ごめん」

「おまえ、指細くて長げえから、痛てえんだよお」

河合がほっぺたさすりながら笑った。

「ごめんってばあ」

「俺、何回殴られたんだあ？」

「そ、そんな何回も殴ってないよ！」

「ボッコボコ殴ったじゃんよ」

「ボッコボコなんてやってないでしょっ!？」

「あ～あ、俺、おまえのカレシやってて身いもつかなあ」

「なによそれえっ!？」

「このまんまじゃボッコボコにされて殺されっかもしんねえなあ」

河合がニヤニヤしながら言った。

「いいよ！ やめたいんたならやめればっ!？」

「あ、ウソです、やめたくないっス」

「フン！」

「あ、すねた？」

「フ～ンだっ」

「あかりいいい」

河合が私の手をつかんだ。

「あんたなんか大キライ！」

バシッて振りほどく私！

「俺は好きだも～ん」

「私はキラ～イ！」

「好きだもん、俺、おまえのこと、すっげー好きだ」

河合が私の手をつかんで引き寄せた。

「キライ...だ...もん」

河合は私の言葉なんて聞いてないみたいに、私のこと抱きしめた。

「あかり、好きだよ」

ギュ～ッて抱きしめられると、私の胸の中もギュ～ッて、

河合のこと好き！って気持ちでいっぱいになって、苦しいくらい。

河合が私の顔を手でそっと上にあげた。

河合の優しい目が見える...まつげ...長い...河合の目...好き...

河合の顔が近づいて...私は目を閉じて...くちびるの上に...柔らかい...フワッて...

とけて...しまいそう...フワフワの...風船...パステルカラーの中に...

目の中にパステルカラーの風船がフワフワ浮かんで...私...その中に浮かんでる...

キモチ...いい...フワフワ...

「アッ!？」

河合がパッと身体を離れた。

え、な、なに??

目を開けて河合の顔を見ると、風船のカーテンの方を見て、固まってる...!?

「え？」

カーテンの方を見ると、

「ゲッ!？」

な、中原くんと、マリが、ニヤニヤしながら、こっちを見てたあああああっ!

「な、な、な、なんだよ!？」

河合が動揺（かなり動揺!）して、中原くんに向かって言った。

「いやあ、初めて見たよ」

中原くんがニヤニヤしたまま言った。

「な、な、なにをだよっ!？」

「おまえがキスしてるよ」

「バ、バカ、んなもん見せっかよっ!?!つうか、見んな! バカ!」

「俺はいつでもよかったんだけどさ、マリさんが心配してたからさ、

おまえと山岸がいないって、それで来てみたら、そういうことだったわけか」

「ち、ちげーよ! こいつが風船のカーテンつけてえっつうから、

二人で つけてただけだっつうの!」

「まあ、そういうことにしておいてやるよ」

「そーゆーことだっつうの!」

「マリさん、行こう、俺たちジャマみたいだからさ」

中原くんがそう言ってマリの肩をポンポンッて叩いた。

「ヘンな気い使うな、バーカ!」

「何してもいいけどさ、担任には見つかるなよ」

「バーカ、なんもしねえっつうの!」

「マリさん、行こう」

中原くんは笑いながらマリの身体に手をまわして、マリはチラッと私を見て、クスッと笑って、中原くんと一緒に行っちゃった...！

シーン....

なんか、急に、恥かしくなっちゃったああああっ！

チラッと河合の顔を見ると、河合もチラッと私の顔を見て、

「ったく、中原のバーカ」

照れくさそうに、わざと怒ったふうにした。

「見られ...ちゃった...ね」

私がさういうと、河合が私の肩を引き寄せて、

「いい、いい、見せとけ！ これで中原もカンペキおまえのことはあきらめるぞ」

河合がさう言って笑った。

「バックじゃない!? まだそんなこと言ってんのおっ？」

「言うよっ、俺はっ、横入りされた気分だったんだからよっ」

「なによ、横入りってえっ？」

「俺の方が先に好きになったたのによ、『山岸のこと好きだから協力しろ』ってよ
ジョ〜ダンじゃねえつつうの！」

「でも、あんただって協力するって言ったんでしょ!？」

「はい、言いました」

河合が叱られた子どもみたいにペコッと頭を下げた。

「じゃ、あんただって悪いんじゃない」

「はい、そのとうりでごせえやす、お代官さまあ」

「バ〜カ」

二人でゲラゲラ笑ったら、恥かしいって気持ちが飛んでちゃったよ。

「あ、キャンプファイヤー始まったぞ」

河合が窓の外を指差した。

「あ、ホントだ」

二人で窓に近づいてグラウンドの真ん中の大きな炎を見た。

「なんか俺たち、特等席で見てねえ？」

河合がさう言って私の肩を引き寄せた。

「うん、そうかも」

私は河合の肩に頭をもたれた。

炎の前で、みんなが歌ったり踊ったり大はしゃぎしてるのが見える。

「あっ！」

河合が窓ガラスに顔を近づけた。

「おい、あれ見ろよ」

河合が指差す方を見ると、他の人たちから離れたところで、中原くんとマリが手をつないでキャンプファイヤーを見てるうううっ!?

「ウ...ソ...」

「なんだ、そういうことかよ」

「そうなのおおっ？」

「じゃねえの？」

「あっ！ そういえば、さっき、中原くん、マリのこと、マリさんって呼んでた」

「そうかあ？」

「呼んでたあ！ 前は山本だったのに！」

「そんじゃ、キマリだな」

「なにこれえええ」

「え？」

「こんなのありいいい？」

「な、なんだよ、おまえ、まだ中原のこと...」

「バカ、ちがうよ！ だってさあ、私が必死こいてサポート役やってたときは、どーにもなんなかったのにい、こんなアツサリってありいい？」

「ブァッハハハ！」

「なんで笑うのよっ!？」

「だってよ、つうかさ、おまえに恋のサポート役はぜってえムリ！」

「なんでよお!？」

「天然だから」

「な、なんだとおっ!？」

河合が笑って私の顔を見た。

「つうか、もうぜってえやるな」

「や、やらないよ！」

「おまえは俺だけ見てろ、な？」

河合がそう言って肩を抱いていた手にギュッと力を込めた。

「やっぱ好きになったらさ、自分でなんとかしろつつうの、なあ？」

そう言って私の顔見て微笑んだ。

「あんたは自分でなんとかしたわけえっ？」

「したじゃんよお」

「私のこと好きなんて、な～んにも言ってくれなかったじゃん」

「言わなくたってわかれよ」

「言わなきゃわかんないよ！」

「だよなあ、おまえ、超鈍いからなあ」

河合がそう言って苦笑いした。

「フンだ！ 私じゃなくたってね、送信されてなきゃわかりませんよーだっ！」

「なんだ？ 送信って？」

「さあね、あんたの携帯に聞いてみたらあ？」

「携帯？ えっ... あっ！」

河合があわててズボンのポケットから携帯引っ張り出した。

「お、おまえ、まさか...」

河合はピッと送信メールを開けた。

「ア——————ッ！」

「ちゃんと送信しといてあ・げ・た！」

河合は真っ赤な顔して私のこと恨めしそうにジト〜ッて見た。

「そっかあ、河合が心の中で『何回も何百回も一万回も好き』って言ってたのは私にだったのねええ」

「や、やめろおおおっ」

河合の顔は、もう、真っ赤通り越して、ドス赤黒くなってる...！

「てかさあ、送信しなきゃ受信できないじゃん」

「おまえのアンテナが圏外だったっつうの！」

「今はバリサン？」

「せいぜい1だなあ」

「なにそれえっ」

「俺が浮気するとか、くっだらねえこと考えるじゃんよ」

「そ、それは...」

「あ〜あ、俺はアンテナ1本っきゃ立ってねえヤツに必死こいて送信してんだな」

「してなかったくせに！」

「するよ、これから、ずーっと」

「ずーっと？」

河合がチラッと私の顔を見て、照れくさそうに微笑んだ。

「ずーっととは... ずーっと...だよ」

そう言うとまた私の肩を引き寄せた。

二人で肩を抱き合いながら、窓の外の大きな炎を見ていると、

なんだかポカポカあったかくて、でも、それは...きっと...河合の腕の中だから...

河合の腕の中...あったかくて...ずっとここにいたくなって...ずっとそばにいたい...

私と河合、そしてマリと中原くんも、それぞれの心がグチャグチャに入り混じってまるでスクランブル交差点の真ん中で、どっちへ行ったらいいのかわからなくなるみたいに...

でも、あなたは私の手を握ってくれて、「こっちへ来いよ」って引っ張ってくれた。

だから、これからも、ずっと私の手を離さないでね。

どっちへ行ったらわからなくなっても、あなたの手を握っていれば安心できる。

スクランブル交差点の真ん中でも、あなただけは見えるから...

FIN.